
バカとマフィアと召喚獣

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとマフィアと召喚獣

【Nコード】

N2259Y

【作者名】

carzoo

【あらすじ】

少年はマフィアだった。少年は死神だった。

そんな少年神竜 一真の周りではハチャメチャなことがいっぱい！

一真はこの日常を過ごしていく。

ドキドキ青春ハーレムラブコメ開幕！

設定（前書き）

バカテス投稿よろしくです

設定

オリジナルキャラ設定

名前 神竜じんりゅう 一真かずま 主人公

文月学園2年Fクラスに所属している。殺人剣技「桜炎双闇流」の使い手で常に木刀を持ち歩いていて、銃、ナイフも好きで、かばんに大量のエアガンとゴム弾入りの銃、腰のベルトにゴムつきのナイフを持っておりウエストポーチにスタンガンを装備あまりに危険なことから「学園1の危険人物」、の称号を、近所の不良から「孤独の死神」の肩書きを持っている。超不幸体質でフラグ建築士、成績はAクラス並文系は、教師クラスであり、理系もAクラス並、(元学年主席)である。木下姉弟と幼馴染 料理のレベルは最高でバイトもしている 元マフィアのボスでその時に敵との抗争中、自分が親と実の兄に虐待されて捨てられた過去を思い出しその時に周りから「死神モード」と呼ばれる状態に無意識に入ってしまった、この状態のときは、自分を殺してほしい感情とその残虐性が目覚め、自分を孤独なものと思い、対象を破壊するまで止まらない。マフィア界での通り名は「絶望の死神」後、「緋弾のリア」のヒステリアモードも使用できる(なぜかそうなってしまった)。集中しているときは、「集中モード」、怒ってしまったらほぼ自我が崩壊したときは「暴走モード」とさまざまなモードを持っている

顔は良く(ヴェ トウス)、髪はキン ダムハーツのソラの髪の色が黒のような髪型身長168cm体重45キロ(モヤシ)

サッカーが得意で現在日本代表のエース(U22)で、代表の試合に行っていたため試験を受けてないのでFクラスになった。

召喚獣 基本デフォルメー真だが服が改造学ランで必ずベルトにスタンガン学ランの中にナイフが装備されており、教科によって武器が変わる

武器 基本文系が銃 理系が近接系となっている
文系（ ）は平均点数

- ・ 日本史 右手 ショットガン 左手マシンガン
- ・ 世界史 バルカン砲
- ・ 現代社会 対物ライフル
- ・ 地理 右手ライフル 左手拳銃
- ・ 現代国語 二丁ライフル
- ・ 古典 ガトリング砲
- ・ 政経 メタルバースト

理系

- ・ 物理 太刀（姫路の剣と同じくらいの長さ）
- ・ 化学 木刀
- ・ 数学 トンファー（両手）
- ・ 英語 W ランス（モ ハンのアカムノ奴）
- ・ 生物 クレイモア

その他

- ・ 英語 ビームサーベル
- ・ 保健体育 日本刀

総合科目 ガンブレード

腕輪は銃、剣、その他、で、三つずつある

銃

- 1、爆炎放射^{ばくえんほうしゃ}・・・銃に炎をチャージして銃口からとてつもない火力の“爆炎”を噴出す

- 2、龍滅爆砲^{リウメイバクポウ}・・・銃を撃つと龍の光線に変わり相手に“龍”が襲い掛かる
- 3、空中爆発^{エアバースト}・・・銃に全てのナイフをセットし大量に出し空中で彗星のごとく爆発させる

剣

- 1、空間爆発^{くうかんばくはつ} 剣で切った空間を爆発させることができる
- 2、人炎爆発^{じんえんばくはつ} 剣で相手を切り、中に爆薬をしみこませ召喚獣が指を鳴らすと体の内部から爆発が起こる（超グロイ）
- 3、龍切り神殺し（りゅうぎりがみごろし） 一つの部位を切ると続けて何撃もの斬撃が襲ってくる

その他

- 1、イマジンプレイカー 相手の召喚獣の攻撃を受け付けけない（左手首から上限定）
- 2、エターナルペイン 相手に攻撃すると相手自身にも痛みが来る（自分も攻撃を食らうと2倍ほど痛く、点数がかなり消費されるのであまり使わない）
- 3、フルバースト すべての点数と引き換えにフィールド全体に大爆発を引き起こす（自分は痛いのであまり使わない）応用として、一転集中型の「GODDBURNER^{ゴッドバーナー}」がある。

桜炎双閻流・・・桜、炎、閻、の三つの方がそれぞれ五つの技とひとつの奥義で形成されている。奥義の型もあり、三つの技と最終奥義に分けられる。召喚獣も使える

桜・・・華麗に相手を切ることを基準として考えられた型

- 一式 枝垂桜^{したれざくら} 連続した縦切り

- 二式 夜桜 よさくら 色々な方向からの連続切り
- 三式 満開 まんかい 最大の力での一閃
- 四式 狂い咲き（くるいざき） たくさんの敵を目にも留まらぬ速さで一瞬で切り裂く
- 五式 桜吹雪 さくらふぶき ある一箇所を高速で切りまくる

奥義 桜花 おうか 変則的な動きで敵をかく乱し華麗に敵を一閃する

- 炎・・・圧倒的な力で敵をねじ伏せることを目的として創られた型
- 一式 火炎爆発 かえんばくはつ 同じ場所を相手の武器または骨が折れるまできり続ける
- 二式 鳳凰火 ほうおうか 両腕を高速できりつけ使えなくする
- 三式 不知火 しらぬい 最大速度で斬りつける（止めた時はその部位が3時間使えない）
- 四式 獄炎破滅陣 ごくえんはめつじん モ ハンの太刀の鬼神切り
- 五式 炎歌 えんか 歌のテンポでばらばらに切りつける歌が終わるまでやめない

奥義 獄炎 ごくえん ただ相手を切るだけでも切れるまで何度でも切り続ける

- 闇・・・泥臭く相手の裏を取り最小限の力で敵を倒す型
- 一式 暗闇 くらやみ ワイヤールでくくりつけた剣を投げ、引き戻して刺す
- 二式 暗閃 あんせん 相手の上を飛び後ろに回り一閃する
- 三式 裏闇 うらやみ 右に行くとき見せかけての高速バックターンで左に行き一閃する（刀を下に刺さないと、回っても倒れてしまう）
- 四式 闇黒 あんこく 前から突っ込んで行き、そこから真横を通って後ろに行き刺す
- 五式 闇転 あんてん 刀を抱えて転がり後ろに来たところで刺す

奥義 双闇 そつあん 二本の剣で一本をフェイントとして前で戦ってる間に

もう一本の剣で暗闇をして刺す

奥義・・・文字どおり奥義

一式絶滅 せつめつ 自分の武器を全て、上へワイヤーをつけて投げ敵に対してめちやくくちな切断攻撃を与える

二式竜神殺し（りゅうぎりかみごろし） 足技で敵を追い詰めて縦切りを食らわせる

三式殲滅 せんめつ 真正面から突進して突き刺す技

最終奥義 斬閃 ざんせん 相手の攻撃をバックステップでかわしバランスを

崩させて首を切る

名前 破神 当麻 あま サブキャラ

一真の友達で一真と同じ不幸体質、いつも一真と共に不幸に会っている。同じサッカー日本代表で、一真とのコンビは抜群、雄二、明久、一真、当麻のいたずらは教師の悩みの種。成績は理系だけででき、他は壊滅的、特に政経は視力検査。元一真の側近。語尾に「いやー」とぶざけた口調で普段は話す。怒ったとき、真剣なときは普通の口調。

容姿はソラのやる気がなさげなバージョンで髪はキンダムハーツのリク

召喚獣

デフォルメ当麻だがワイヤーナイフで戦う

腕輪

バースト ワイヤーナイフが一本一本爆発していく

名前 大神

おおがみゆつき
祐輝

サブキャラ

Fクラスただ一人の常識人（たまに途中で壊れる）。仲間のためなら何でもする、一真、当麻、雄二、明久のことを尊敬しており、よく一緒に行動する。元学年次席で海外に行つてたため振り分け試験を受けなかった。一真の友達で、明日菜の夫（年齢制限の無い国で入籍した）

容姿は茶髪に黒目の超イケメン（キラッヤマトのような感じ）

召喚獣

デフォルメ大輝でビームライフルとビームサーベルを装備

腕輪

スターダストスラッシャー 背中から羽が生えて羽から八本の光線を撃つ

名前

山口

やまぐちなほ
怜奈

ヒロイン

Aクラスで学年三位の成績、一真とはイタリアで住んでいたころ、マフィアに襲われていたところを助けてもらう、それ以来一真に好意を持つが空回りして優子と一緒にサブミッションを仕掛けている。

容姿はとある 術の 書目録の御坂美琴

召喚獣

もう全部、御坂 琴そのまま

腕輪

レールガン

名前

水野

朱里 あまのしほ

当麻の彼女

当麻の幼馴染で、当麻が大好き。しかし肝心の当麻が気づいてくれない為少々腹を立てている。

怜奈の従姉妹 Aクラスの4番手

容姿はキ グダムハーツのアクア

召喚獣

着物を着ていて、薙刀で勝負する。

腕輪

光学切り 光を操り敵を切る

名前 柴崎 彩夏しばきあやか ヒロイン

Aクラスで学園の癒しと言われる程の超絶美人、三年からの告白も全て断っている。ある理由で多分、一真が好きなんではないかといわれている。過去に何かで助けてもらったと言う噂も。留年している

容姿は小さい、胸が大きいかわいい顔の三拍子そろった超絶美人、

召喚獣

鎧を着けていて、なぜか魔法杖

腕輪

サイコキネシス 相手の動きを30秒間止めることができる。

名前 十六夜 明日菜あすな 祐輝の妻

祐輝の妻で、Aクラス。一真の幼馴染でもあり、一真の能力を最大限生かした戦い方を知っている数少ない一人。基本祐輝思いでおっとりしている。

容姿 そ おとのイカロス

召喚獣 祐輝の、翼が白になったデフォルメ明日菜。

腕輪

イージスブロック
絶対的防御権

指定した相手を、一分間完全に防御する結界が張られる。

設定（後書き）

はいcarzooです。今回はバカテスでス（っていうか他の作品全然進んでない）

ま、よろしくおねがいします

第1話 最強と馬鹿

第1話

最強と馬鹿

文月学園

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られるこの学園。

それ故に、多くのスポンサーが付いており学費は極めて安い。

そんな文月学園の校門にて、学校指定のカバンと木刀を持ち、学ラを某マフィアのひばりさんのような着かたをしている少年が1人とその隣のだるそうな少年が1人
時間が時間故、筋肉隆々とした体格の良い教師に呼びとめられていた。

ここから、物語は始まる

「遅いぞ、神竜、破神！」

「あつ、はよッス。西鉄」

「その呼び方を名前の様に扱うな！それが教師に対する態度か！」

「え？……先生の名前って、西鉄じゃないんですか？」

「そうですね。先生の名前って西鉄筋肉ズですよ。」

「吉井ですら知っている事を知らんのかお前達は！？破神は、プロ

野球チームか！」

少年の目の前にいたのは、生活指導の西村教諭。
トライアスロンが趣味の肉体派であることから、通称“鉄人”

少年“神竜一真”と“破神当麻は、その彼に目をつけられている問題児達である。”

「それより、他に何か言う事があるんじゃないか？」

「え？ えーっと……今日も肌が黒いうえに暑苦しいですね？」

「お前達は遅刻の謝罪より、俺を罵倒する事と肌の色の方が大事なのか？ ……まあ良い、受け取れ」

茶色の封筒を差し出され、それを興味なさうに受け取った。

「あまり関心があるようには見えんな？」

「どこだろうと、戦って勝てば設備を奪えるのがこの学園の特色でしょう？ 不満だったら奪えば良いだけです。俺は“元学年主席”の天才ですよ？」

「ちなみに当麻さんはもう分かりきってまゝす」

「そうか。流石は我が学園の問題児の中で、最も過激思想の持ち主で天才だな。それに、貴様らはサッカーの試合なんぞで試験を休みおつて」

「心外です俺は自分の好きなことに命をかける男ですよ？」

「その証拠にぼろかすにして勝ってきましたし」

「……それ位勉強にも気合を入れていれば、今頃Aクラスの首席として立っていた物をまあ破神は別だが」

彼の言う問題児とは、主に吉井明久と坂本雄二、そして神竜一真、破神当麻の事。

常に大量の武器を持ち歩き身体能力は学年1の危険人物神竜と常に
だるそうにしながらも悪知恵を働かせる参謀破神、と教師の間では
恐れられていた。

のりづけされた封筒を破り、その中に入っていた紙を見ると……

「Fかまあ普通かな」

「当麻さんもFです」

「お前の幼馴染は、弟の方が同じだ。残念だったな？」

「残念じゃなくて、喜びですよ。片方はともかく、あいつとクラス
が一緒だなんて冗談じゃない」

「にはははははは」

「何だ、違うのか？ まあいい、急げ」

全く……と、愚痴を漏らして、彼らは校舎へと。

そこから靴箱に到着したところで……

「ん？ よう明久」

「明久はよ〜」

「あつ、おはよう一真、当麻。どうだった？」

彼の去年のクラスメイトにして、同じく悪友である吉井明久。

学力的に最低ランクのバカさと、行動力により彼と同様に鉄人に目
をつけられていると同時に、バカの代名詞である“観察処分者”の
称号持ち。

苦笑して、全然のジエスチャーを交えての宣告。

「Fだった、まあ試験受けてねえから俺達」

「じゃあ、僕と同じだね？」

「ははっ、まあ仲良くやろっや」

「よろしくな！」

基本、いじられ役である事が多い明久だが、一真と当麻は彼をいじる事を良しとはしていない。

どことなく、自分と何か強く通じるものを感じていたためである。

それはさておき、彼らは2人でFクラスへ。

途中興味本位で覗いたAクラスの教室を見て、3人は驚愕した。

「何じゃこりゃ?!」

「凄すぎ!」

「はあ、一真は真面目に受けてたらここだったのか」

「んま、あれやってこの教室搔つ攫えばいいだけの話だね」

「さすが元学年主席ということが違うにや〜」

「だね当麻」

この学園が注目される理由の一つにある、試験召喚システム。

試験の点数がそのまま強さに影響する召喚獣を呼びだし、それを使ってクラス間競争である“試験戦争”というシステムがある。

それを使用し、AからFまで異なる環境を施し、簡単に“良い設備がほしければ奪い取れ”のシステムのもと、日夜勉学に励む者達。

当然エリートであるAクラスは、それ相応の高待遇。

そして、彼ら2人が所属するFクラスは……

「なんか、近づいただけで格差があるのがわかるね？」

「ああ……さっきはああ言ったが、もう嫌気がさしてきた」

「当麻さんも同意します」

「それはそれとして、早く入ろうよ。よし、それじゃまずは明るく行こう」

見るからに、建て付けの悪そうな戸を開くと……

「すみません、ちょっと遅れちゃいました」

「早く座れ！ この蛆虫野郎ども！！」

教壇にいたのは教師ではなく、彼らの悪友である坂本雄二。

見るからにガラの悪そうで、かつては悪鬼羅刹と呼ばれた男。

「いきなり挨拶だな。そんなところで何やってる？」

「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がって見た。何せ俺がここの最高成績保持者……つまり、代表なんぞな」

「ほうっ……でも傍から見たら、お山の大将気どりのゴリラにしか見えんな」

「あっはは、それ面白いくくくく」

「何だよこのモヤシ野郎に間抜け不幸、サラダにしてやろうか？」

ボキリと指を鳴らす雄二と、木刀を構える一真とゴムナイフとスタンガンを構える当麻。

竜虎相対す、という雰囲気はクラスは沸いた。

「そんなものに頼らないとケンカも出来ねえのか？」

「黙れよ。腕力なんて時代遅れだったこと、その身を持って教えてやる」

「いつペン死ねクソゴリラ」

クラスが同じで面識がある上に、文月学園の問題児フォースと称されるだけあって彼ら4人は仲が良い。

当然、こういったやり取りも割と一般的だった。

「あんた達、去年から良く飽きないわね？」

「げっ！ しつ島田さん!？」

「ちよつと吉井、何よその“げっ！”って？」

現在教室の中での紅一点、島田美波が呆れたように乱入してきた。去年から何かと痛い目あわされてる明久は、傍から見ても分かるほど顔を青ざめた。

「よつ島田、お前もFだったのか？」

「はろはろ」。ウチまだ日本語の読み書きが苦手だから」

「帰国子女ならではの弱点だな」

「当麻さんと同じですね」

「お前は日本語が苦手なだけだろ馬鹿」

その場に顔を連ねているのは、ほぼ全員バカの代名詞を受けて当たり前な者達。

しかも全員が男で、ただ1人女子が居ると言うだけのムサっ苦しい空間。

「それはそれとして、島田が居てくれてよかった」

「え？ そっそう?」

「だよね。こうもムサっ苦しい上にカビ臭い空間だから、ほんのちよつとだけ膝があらぬ方向にiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!--!!」

いつのまにかひっくり返され、4の字固めに処され悲鳴を上げる明久。

いかにもへし折らんと言わんばかりに、ギリギリと嫌な音を立てつつ力を入れる美波。

そして、そのスカートの中に注がれる視線。

「やっぱりお前もいたのか、康太」

「康太がいれば面白いニヤー」

「……………よろしく」

「趣味についてとやかく言えた義理じゃないけど、犯罪はやめとけよ?」

彼の言葉もどこ吹く風と、主に美波のスカートに視線を注ぐ少年、土屋康太。

通称“寡黙なる性職者ムツツリーニ”。

「あいたたたた……………」

それから程無くして解放され、膝を擦る明久。

「お前も学習しろよ。だからバカなんて呼ばれんだろ?」

「相変わらず朝からにぎやかじゃのう。一真と当麻も相変わらず、明久の世話を焼いておるようじゃな?」

「ん? よう秀吉。えーっと……………」

「席は好きな所に座っていいそうじゃ。どれ、あそこにちょうど4つ程席が空いておるし、そこに移ろうかの」

目の前にいる、翁言葉で話す美少女……………いや、美少年である木下秀吉。

荷物をまとめ、一真と明久と当麻を伴い空いている3つの席へ。

「なっ、何だ? 座布団、綿がほとんど入ってないのかよ? しかも畳、破れてる上にキノコまで!」

「この卓袱台、痛みまくってるよ? 鞆置ただけでぐらぐらする

し、良く見たら天井クモの巣はってる！」

「先ほどから、隙間風が酷いのう。それに埃っぽいから、喉に悪いぞい」

「ほんとと最悪だニヤァ」

殆ど廃屋同然の教室、腐った畳、綿のない座布団、足の折れた卓袱台、隙間風が吹くツギハギの窓。

最低の中の最低ともいえるカビ臭さ満載の空気に、改めて顔をしかめる一真と明久と当麻。

「まあそれはそれとして、今年一年もよろしく頼むぞい」

「ああ、こちらこそ今年もよろしく。やっぱ付き合いが長く、気の合う幼馴染って良いもんだな、秀吉」

「いいにやーそういう関係」

「そう言ってくれて何よりじゃ。姉上も一緒なら、もっと面白かったのじゃがな」

「冗談言うな。あいつと一緒にだなんて、考えただけで怖気がする」

「にやはははは」

秀吉と幼馴染だけに、彼の姉である木下優子とも当然幼馴染という間柄であり、面識はあった。

が、彼は秀吉とは親しい物の、優等生で何かと衝突しやすい優子を苦手としている。

「改めてみると、酷いよね？」

「ああ。Aを見ただけに、格差があまりにもひどすぎる………そういうえば秀吉、優子はAクラスなのか？」

「姉上はワシと違って、優秀じゃからのう。なんじゃ、姉上が気になるのか？」

「そりゃあ……あいつには散々怒鳴られてるから、同じクラスだったら気が気でならないよ。何より本性知ってるだけあって、ろくでもない事になるのは目に見えてるし」

「多分、朱里もだニヤァ」

「素直じゃないのう」

と、笑う秀吉に一真は懐に手を入れて、ある物を取り出そうとした。

「ねえ一真、本性つて？」

……が、そこで興味津々で質問してきた明久に、一真は一旦手を止めてにやりと笑みを浮かべた。

それはだな……と切り出そうとした一真を、秀吉が沈痛な顔で制した。

「やめておけ一真。以前その事で、全身の関節が壊れる寸前にされたの忘れたか？」

「……すまん明久、俺の命の為にも忘れてくれ」

「え？ それつて……よくわからないけど、一真も苦勞してるのかな？」

「その通り」

明久も通じるものがあつたのか、すんなりと頷いた。

話が終わった処で、一真は持ってきている学生かばんを開き、そこからエアガンを取り出す。

もちろんマシンガンやライフルと言った、そういう大型の物を。さらに学ランの中から改造トンファー、ポーチからスタンガン、腰のベルトからナイフを取り出した。当麻も同じように自分の武器を出している

「さて、先生が来るまで武器の点検でもするかな？」

「同意見だニャー」

「海外ならともかく、日本で堂々とやる事じゃないのう」

「別に改造してる訳じゃないんだから、年齢制限やらを守れば問題ない」

「当麻さんは、ナイフとスタンガンと薬品だから問題ないにゃー」

「さっきそれを人に向けた者の言うセリフじゃないぞい、しかもト
ンファーは改造じゃろうて」

「良いんだよ秀吉、どうせ雄二なんだから。一真の改造は……」

「ごめんフォローできない当麻はいうことが無いけど」

「明久、ちよつと来い」

ガラッ！

「HRを始めますので、席についてください」

そこで、初老のさえない男性教師が入ってきて、全員が席に着く。
こうして、文月学園の学生生活が始まった。

第3話 天才！問題？五人組！！（前書き）

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんと大神君は引っかけりませんでしたね。

神竜一真の答え

『問題点……鍋を自分で作ろうとする馬鹿の浅はかさ、デパートに買いに行け』

合金の例……作るのが無いからなし』

教師のコメント

問題なのでそこ突っ込まないでください。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（ すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても

破神当麻の答え

『一真と同じ』

教師のコメント

自分で考えなさい

第3話 天才！問題？五人組！！

第2話

天才！問題？五人組！！

2年Fクラス、初日のHR

「えー、おはようございます。Fクラスの担任を務めます……」

担任らしい教師は、薄汚れた黒板に視線をやり手を伸ばそうとして……視線を皆の方に戻した。

「福原慎です。よろしく申し上げます」

「「「チヨークすらないんかい！！！！」「」」

「後で申請しておきますので、授業には間に合つはずです」

全員が改めて、ここが最悪の環境であることを実感した。

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？ 不備があれば、申し出てください」

不備という言葉に、全員がありまくりと言わんばかりに名乗り出た。と言つより、どこが完備されてるのかむしる聞きたいと言わんばかりに。

「俺の座布団、綿が入ってないんですけど」

「我慢してください」

「俺の卓袱台、脚が折れてます」

「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」

「窓が割れてて、隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

1つ1つの質問を丁寧に応えていく福原教諭。

しかし大半が大きく分けて“我慢してください”か、“自分で何とかしてください”の2択のみ。

重ねて言うが、ここは学力最低クラスのFクラスの教室である。

「では必要なものがあつたら、極力自分で調達する様にしてください」

「これがFクラスか……」

「面倒だニヤー」

「それじゃあまず自己紹介からしましょうか」

と言われ、まずは廊下側の一番最後に座っている秀吉が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属してある。今年1年、よろしく頼むぞい」

とても男とは思えないその可憐な姿に、男で埋め尽くされたその空間は癒しの空気に包まれた。

余談だが、その容姿から“女装が似合う男子生徒ランキング”から不公平の意見が多数出たため、候補から外されたという話あり。

「……土屋康太」

次にムツツリー二事、土屋康太。

本名は知られておらず、異名であるムツツリー二の名は割と知られている存在である。

「大神祐輝です。海外にいつていて振り分け試験が受けられなかったので無得点扱いでこのクラスにきました。よろしくお願いします。」

次に超絶イケメンの大和大輝、全員が何故いるのかと言った顔をしたが、ちゃんと理由を言ったのでわかった。後こいつは、NOリア充の敵妻帯者だ。

「島田美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど、読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は……」

一旦区切り、明久をちらりと見てから一言。

「吉井明久を殴る事です」

当人は先ほど受けた4の字固めのダメージが再発したのか、膝を抑えガタガタ震えていた。

そのあとは、ただ単に名前を告げるだけの作業が進んでいく。

「破神当麻だにゃー、その一真とはサッカー日本代表で一緒だにゃー、あと水野朱里と幼馴染だにゃー」

「水野朱里だとお……!」

「その一真と祐輝のほうかひどいにゃ今年一年よろしくにゃ」

そうやって当麻の自己紹介が終わる。めんどくさい振り入れやがってと思いながら一真はせきを立つ

「神竜一真、現サッカーU22日本代表、その木下秀吉とは幼馴染で破神当麻とは代表仲間」

「まあそれなりに仲良くさせてもらっておるぞい。姉上共々な」

『木下優子とだとお！！？』

木下優子と言えば、秀吉と瓜二つの双子であり、現在Aクラスに所属する優等生。ちなみに水野朱里もだ。

ほぼ全員が一真と当麻に対してカッターを構えるが、一真が学生かばんからマシンガン（エアガン）を取り出し、木刀を手にし、学ランの中を見せる。当麻は手にマジもののナイフを持っている

「ちなみに武器が好きで、ていうか中学の少しだけイタリアにいてマフィアのボスをやってました。刑務所にぶち込まれた経験もあります。今は違いますけど」

「俺はただの武装趣味だニヤー」

「いや、お前俺の側近だろ」

「とんでもない事をサラリと言うでない二人とも」

「どんだけ周りが心配したと思ってるの？」

「ちなみに秀吉とは親友ではありませんが、こいつの姉木下優子とは他人以上知り合い未満程度ですので、誤解のない様お願いします」

「俺はちよつと違うけど恋愛対象じゃないニヤー」

元マフィアのボスで武装していると全員の萎縮してしまった。先ほどのやり取りもあってか本気で殺されかけない、と全員が本能で察知し、逆らわないことを誓ったのは別の話。

「まさかと思うけど、それ本物じゃないよね？」

「きまつてるだろ、ここ日本だぞ？銃は偽者だ！ それより明久、次はお前の番だぞ？」

「あっ、そうだったね」

次は明久の番となり、軽く咳ばらいをした。

彼は出だしが肝心だと言わんばかりに、気さくにふるまう事に。

「え〜っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでください
いね」

『ダアアーーーーリイーン！！』

男らしい野太い声の大合唱が、Fクラスの教室に響き渡った。

当然明久はめちやくちや笑顔をひきつらせ、混ざらなかつた秀吉と
一真と当麻も苦笑い。

「……失礼、忘れてください。とにかく、よろしく願います」

「なんつー不快な大合唱だ」

「確かに、当事者でないワシも鳥肌が立ったぞい」

「さすがの俺でも嫌になつたぞい」

ガラッ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ？」

そこへ、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。その姿に、男子生徒全員が意外を通り越したかのように驚いた声上がる。

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんもお願ひします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします！」

途中から尻すばみな自己紹介を終えて、小柄な体を縮み込ませた。

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

「何でここにいるんですか？」

傍から見れば失礼な質問ではあったが、ほぼ全員（一真と明久と当麻と雄二を除く）がそう思っていた事だった。

彼女は容姿も人目を引く程で、テストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主でもある。（まあ一真には勝てないが）当然こんな場所に来るべき人間ではなく、最高設備であるAクラスに入っている物と誰もが思う事。

だからこそ、この質問はある意味必然なものだった。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決

まる。

その試験は難しいという評判だが、途中退席は0点扱いにされるという厳しいテストである。もちろん受けて無くてもおなじである

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

瑞希の言い分を聞いて、1人がそう言いだした。

それを皮切りにざわつき始め、次の言い訳が飛び交う。

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見て、一真は一言。

「……想像以上にバカが多いみたいだな」

それを聞いて、明久と秀吉さらに当麻までうんうんと頷いた。

「で、ではっ、今年1年よろしく願いします！」

瑞希は逃げるように、明久と雄二の間の空いてる席に着いた。

彼女は席に着くや否や、安堵の息をついて卓袱台に突っ伏してしま
う。

その姿に一真は明久と当麻に目配せをして、あの事を聞くことにし
た意思表示。

「よう姫路、さっきの自己紹介だが、体調は大丈夫か？」

「あつ、神竜君に破神君に……よ、吉井君！？」

一真の声に反応して振り向いた先の明久の顔を見て、瑞希が驚いた。その反応に、明久は何かまずかったかとおろおろし、一真はその様子からある事を察した。

「姫路、明久が不細工ですまん」

が、そこへ雄二が割り込んだ。それも明久への罵倒込みで。

「そ、そんな……えつと？」

「坂本だ、坂本雄二。それよりこのバカの顔を見て、体調が余計に悪くなっただろ？ 友として謝っておく」

「友が言うセリフに聞こえないぞ？ それより何いきなり割り込んで来てんだよ？」

「俺も一真と同意見だニヤー」

「代表としてクラスメイトを気遣って何が悪い？」

表情が“明久の幸福を邪魔する為だ”と言っていた事は、当然一真も当然も察していた。

ちなみに明久は、その罵倒で悲しそうな顔をしている。

「そつ、そんな事より、吉井君は全然不細工ではありませんよ？」

「え？」

「目もパツチリしてるし、顔のラインも細くてきれいだし、その、むしろ……」

「まあ確かに、悪くはないかもな。そういえば、俺の知人にも明久に興味がある奴が居た気がする」

雄二のその言葉で明久は嬉しそうに、瑞希は驚いて、一真と当麻はまさかと言った様な表情に。

「え？ それは……」

「そつ、それって一体誰ですか!？」

明久の声を遮るかのように、瑞希が声を荒げた。それも必死そうな表情のオマケつきで。

「姫路、落ち着け。身体に障るぞ？ しかし、随分と必死だね？」

「え？ そつそれは……」

「ははっ、姫路さんも色恋沙汰には結構敏感なんだ？」

「そつその……はい。やっぱり恋をするって素敵な事だと思いますから、つい力が入ってしまっ」

明久が微笑ましそうに瑞希を見て居る傍らで、雄二と一真と当麻は半ば呆れたように明久を見ていた。

「ねえ雄二、話の続き聞かせてよ？」

「え？ ああ、そうだな。確か、久保……利光だったか？」

「男かよ!」

久保利光 性別（ /オス）

現在Aクラス所属 学年次席

「おい明久、さめざめと泣くな。当麻声を殺して大笑いすんな」

「いや、よりにもよって男に恋愛感情持たれてるかも知れないなんて、普通こうなると思うぞ？」

「当麻は失礼にも程があるが……」

「……まあ、確かにな」

パンパン！

「はいはい。その人たち、静かに」

バキィッ！ パラパラパラ……

「してください……ね？」

本人としては、軽くたたいたつもりだろう。

だが、壊してしまった事は事実の為、少々気まずそうな態度に。

「え〜。代えを持ってきますので、皆さんは自習をしていてくださいね」

「どれだけ酷い設備なんだよ!？」

「これがFクラスです」

福原教諭の台詞に、何度目かの改めて設備のひどさを理解させられる面々だった。

「全く、こつも埃っぽい上に湿気だらけじゃ、俺の大事なコレクシオンも痛んじまうな(にゃー)」「」

「きゃっ!」

一真と当麻が取り出した武器の数々を見て、瑞希が軽く悲鳴を上げた。

まあ普通、一介の学生の荷物から武器(しかも超危険)が出てくる事自体非常識の為、無理ないかもしれない。

「ん？ ああ、これ、殺傷能力あんま無いよだよ。俺こついうの好きだから」

「俺は死なない程度にやってるニヤー」

「そうなんですか？」

「それより振り分け試験の時、大丈夫だったか？ あれから明久が酷く心配しててさ」

「吉井君が……ですか？」

明久と瑞希は振り分け試験の時隣の席で、一真、当麻も明久から事情を聞かされていた。

その為一真も当麻も瑞希の事情は知っていたし、明久の瑞希に対する気も当然気づいていた。

「うん。体調が悪そうだったし、いきなり倒れるからびつくりしたよ。保健室の様子を見に行った時には、もう帰っちゃってたからさ」

「何だ、お前らだけ驚いてないと思ったら、そんな事があったのか？」

「ちょっとびつくりだね」

「うん……ねえ雄二、ちょっと良い？」

「あ？」

明久は雄二を伴い、廊下へ。

瑞希が怪訝そうな顔をして見送り、一真に問いかけた。

「吉井君と坂本君、どうしたんでしょうか？」

「何だ、明久が気になるのか？」

「え？ いつ、いえ、そういうわけでは……」

「はいはい。まあ俺で手伝えることがあるなら言いなよ、協力してやるから」

「え？ あの、あつ、ありがとうございます」

一真と当麻それと祐輝は2人が出て行った廊下をちらりと見て、すくっと立ちあがる。

秀吉はそれを見て、幼馴染特有の勘を働かせた。

「なんじゃ、またお主ら5人で悪だくみかの？」

「まあな。ちよつと面白い事になりそうだ」

「俺は面白かったら何でもいいニヤ」

「僕は一真が一緒ならなんでもする。」

「やれやれ……まあお主らしいのう」

たがいに笑いあつて一真達は気取られない様廊下へ。そしてゆっくりと建て付けの悪い扉を開いて……

「つまり、姫路の為だろ？」

「そつそつという訳じゃないけど……でも、姫路さんには酷い環境だから、改善してあげたいって気持ちはある」

「素直じゃねえな。まあどうせ、試召戦争はやるつもりだった。世の中学力こそがすべてじゃないって事、その証明がしてみたくな」

それを聞いて、一真達はこそこそするのをやめにして、思いきり戸を開けた。

「何だ？ 俺を差し置いて、随分と面白そうな話をしてるじゃないか。俺もやらせろよ！天才の銀はがし！！」

「そんな面白い話なんで俺を誘わないかニヤ」

「僕も力になるよ！」

「一真、当麻、祐輝！」

「俺達にも一枚かませろよ。そんな面白そうな話、この俺達が乗らない訳ないだろ？」

明久はそれを聞いて感激し、雄二も不敵な笑みを浮かべた。

「全く、お前らも物好きだな……っと、先生が来た。入るぞ」

「それじゃFクラス代表のお手並み、拝見と行こうか？」

「ああ、任せておけ」

一真達は、雄二に向けてグツと親指を立てた。

雄二もそれに倣い、同様に親指を立てる。

「それより明久、試召戦争を提案したからにはお前も頑張れよ？」

「うっ……」

「ちよつと酷すぎないかい？雄二」

「まあそれぐらいしないと駄目だニヤー」

「“あの事”があるから無理ないか……じゃあさ、俺とコンビ組まないか？」

「改めて言うが、お前も物好きだな。明久とコンビを組みたがるなんて」

「その方が色々面白そうだから良いんだよ、俺と明久は相性がいい」

「まあそうだね一真と明久は相性がいいから」

「俺達は二人にくつついて動くニヤー」

吉井明久、坂本雄二、神竜一真、破神当麻、大神祐輝。

この後、文月地区で知らぬ者なしと言われる程の問題児組として、一躍名を轟かせる事になる

その第一歩が今踏み出された事は、五人の中、誰一人として気付く事はなかった。

第4話 マフィアは戦争には巻き込まれる(前書き)

この間この小説にはじめて感想が来て、感謝感激です！

第4話 マフィアは戦争には巻き込まれる

第4話

マフィアは戦争には巻き込まれる

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまふ事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希、大神祐輝の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね。

神竜一真の答え

- (1) サルを木から叩き落す
- (2) 弱り目に日本刀

吉井明久の答え

(2) 泣きつ面蹴ったり

破神当麻の答え

(1) 河童の島流し

教師のコメント

君たちは鬼ですか、

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね

「Fクラスは、Aクラスに“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

壇上に自己紹介の為立った筈の雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は当然非難轟々の嵐を巻き起こした

「勝てるわけがない！」

「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」

「姫路さんが居たら何もいらさない！」

選りすぐりのバカだからこそそのFクラスが、逆の意味での選りすぐりのAに戦争を仕掛ける。

試召戦争は負ければ設備を1ランク落とされるのだから、更に最低になる事を考えれば自殺行為に当たるそれに、非難の嵐が吹き荒れるのは当然だった。

だが雄二は、その非難の嵐に怯む事もなく、代表らしい堂々とした姿を崩す姿勢が見られない。

ある程度治まった処で、不敵な笑みを浮かべ口を開く。

「皆がそう思うのも無理もない。だがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこそその発案だ。今からそれを説明してやる」

自信に満ちたその発言に、クラスはしんと静まった。

不敵な笑みを崩さないまま、雄二はある個所に視線を向けた。

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

恥も外聞もなく、低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、必死に顔と手を振って否定し始める少年。

顔に付いた明らかな覗きの証拠を隠しつつ、前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがああの有名な沈黙なる性職者ムツリーニだ」
「……………！！（ブンブン）」

ムツリーニと言う名に、クラスがざわめいた。

その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑を持ってあげられており、その正体は謎。

……とされていた人物が、目の前にいる。

「バカな、奴がそうだと言うのか？」

「だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムツリーの名に恥じない姿だ」

ただ1人、瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。

「姫路と大神の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」

「えっ？ わっ、私ですかっ!？」

「うんがんばるよ絶対に」

「ああ、主戦力だ。期待している」

その容姿と共に知られている彼と彼女の成績を考えれば、もっともな話である。

「そつだ、俺達には姫路さんに大神が居るんだつた！」

「彼女なら、Aクラスにも引けを取らない」

「ああ。彼女が居れば何もいらぬ大和は消えて欲しいが」

「木下秀吉だつているし、俺も当然全力を尽くす。」

次に、学力ではあまり聞かない物の、優等生である双子の姉と演劇

「ちょっと雄二！ どうしてそこで全く関係ない僕の名前を呼ぶのさ！？ しかもなんか、変な設定までつけられてるよ！！？」

「神竜と破神の事は知っているみたいだから良いとして、明久を知らないなら教えてやる。こいつは“観察処分者”だ」

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

誰かのその発言は、明久の心に深く突き刺さった。

「ちっ違っよっ！ ちょっとお茶目な16歳につけられる愛称で…

…」

「そうだ、バカの代名詞であり、一真と当麻と祐輝の腰巾着同然の雑魚だ。ハンデにはちょうどいい」

「肯定するな！ それに自分から降っただけで、そのセリフはないよね！？」

「まあ落ち着け明久。これから挽回してけば良いだろ？」

「そうだニヤー」

「つま、がんばろうよ明久。」

一真と当麻と祐輝になだめられ、一先ずはと席に着く明久。

それに構う事なく、政治家の演説を思わせるような堂々たる態度で言い放った。

「とにかくだ！ 俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。皆、この境遇は大いに不満だろう！？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

雰囲気を押され、瑞希も懸命さが見て取れるように小さく拳をふりあげる。

その姿に明久が和んでる所に、雄二の一言。

「明久には、Dクラスへの宣戦布告の為の死者になって貰う。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者って、大抵酷い目に遭うよね？しかも今字が違わなかった？」

「大丈夫だ、だまされたと思って行ってみる。俺は友人を騙す事はしない」

「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

下位勢力との試召戦争など、面倒でしかない。だからこそ、そんな面倒事を持ってくる奴に危害を加えない訳がないだろう。

結局雰囲気の流れ、明久は意気揚々と出ていった。ある程度時間がたったところで、雄二が一言。

「とまあ、ああいうバカだ。皆も危なくなったら、あいつを囮にしてさっさと逃げるように」

「やっぱりか……仕方ない、俺も行ってくる」

「俺もいくニャー」

「僕も行こう」

「お前らも物好きだな」

「お前が酷過ぎるだけだ」

数分後

「騙されたあつ!!」

そのしばらくの後、明久が教室に転がり込んできた。

Dクラスにつかみかかれ、ぼろぼろになった姿を見た雄二は一言。

「やはりそう来たか」

「やはりって何だよ、使者への暴行は予想通りだったんじゃないか！　一真達が来てくれなかったら、今頃どうなってたと思ってるんだ!?!」

「それ位予想できないで、代表が務まる訳ないだろ」

「少しは悪びれるよ!!」

「まあ落ち着けよ。こいつが酷いのは今に始まった事じゃないだろ？」

そこへ木刀とトンファーを持った一真、ナイフとスタンガンの当麻一真に借りたエアガンの祐輝が戻ってきて、明久を宥めた。

明久と違い無傷のその姿に、雄二は一言。

「殺してないだろうな？」

「問題ない。コレクション見せれば、大抵の奴は怯える」

「やりたかったニヤ」

「これは思わぬ収穫だな。生贄ではなく、お前を行かせるべきだったか？」

「生贄って言った!?!　今生贄って言ったな!?!」

内容を考えたら、当然の表現である。

「吉井君、大丈夫ですか？」
「大丈夫、吉井？」

制服までぼろぼろにされた明久に、瑞希と美波が駆け寄った。

「あ、うん。平気だよ、心配してくれてありがとう」

「そう、良かった……ウチが殴る余地は、まだあるんだ」

「ああっ！ もうダメ、死にそう!!」

冗談と分かっていても、一真達はその言葉に戦慄を覚えた。
そしてうめき声を上げ始めた明久に、手を差し伸べる。

「……ほら、立てるか明久？」

「え？ うん、ありがとう」

「そんな事より、今からミーティング行っぞ？」

と言う雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ。

そして、屋上にて。

「で、明久。時間は伝えたのか？」

「うん、今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼ご飯だね？」

「じゃあ明久、今日くらいはまともな飯食えよ？」

「そう思うなら、パンでもおごってくれと嬉しいな？」

彼、吉井明久は生活破綻者である。

彼は1人暮らしであり、親からの仕送りを元手に生活しているが…
…仕送りを後先考えず趣味に費やす為、本人いわく“清貧生活”を

送っていた。

「あれ、吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、一応食べてるよ？」

「水と塩、もしくは砂糖じゃ食べるとは言わん。全く……ほれ」

一真は取り出したパンを、明久に投げ渡した。
それを見て、明久は表情を輝かせる。

「賞味期限切れだけど、良いか？」

「あつ、うん。食べられるなら」

「お前、明久の奥さんみたいだな？ 何かと世話焼いてる事と言い」

「それは身近にズボラが……」

「一真よ、その先はならん！！」

「そうだにやー、俺もひどい目にあつたニヤー。」

「大変なんだね君達も……」

一真が口を滑らせようとしたところで、秀吉、当麻の制止が入った。
そしてそれを哀れむ祐輝

その事に気づいて、ホッと胸をなでおろした。

「……そっそうだったな。すまん秀吉、助かった」

「ズボラが、どうかしたのか？」

「いや、何でもない。それよりさっさと食っちゃまおう」

「そっそうだにやー」

「そっそうじゃ。戦争に向けて、力をつけねば！」

多少不自然そうに、一真と秀吉と当麻は話をそらした。
その姿に疑問符を浮かべるも、皆は食事に。

明久は一真からもらったパンを、少しずつ味わい噛みしめていた。

「久しぶりに固形物を食べるって、幸せだね……」

「全く……彼女でも作って、生活全般を管理してもらった方が良くないか？」

「一真が管理してやれよ。明久みたいなバカに彼女なんて無理だろ」

「雄二、せめて即答で言わないで！！……うつつ、何だか変わった味だね？」

「いや、それお前の血の味だ」

色がドス黒いのは、明久が血の涙を流しているからである。

ふと一真が瑞樹に視線を向け、瑞希が何か決心した様な表情をするのを見て、ほほ笑む。

「……あの、良かったら私が、お弁当を作ってきましたよっか？」

「え？……ほっ、本当に良いの!？」

「はい。明日の昼でよければ」

「へえっ、良かったじゃないか明久。女子の手作り弁当なんて、殺したい位羨ましいぞ」

「一発殴らせるニヤァ」

「うん！……でも、後半が全然笑えないよ？」

冗談だとは分かっているけど、一真と当麻だからこそ笑えない明久だった。

「ふーん。瑞希って、随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！その、皆さんにも……」

「え？俺達にも？いいのかわ？」

「はい、嫌じゃなかったら」

女の子の手料理を断る外道など居る訳もなく、全員が喜んだ。作る当人は、9人分となると大変なのに、嫌な顔一つしない。

その様子に明久は、再度彼女に再度関心の視線を向けていた。

「それじゃ雑談はそこまでにして、そろそろ本題に入らないか雄二」
「ん？ ああ、そうだな」
「気になっておったのじゃが、なぜDクラスなのじゃ？」

まず真つ先に、秀吉が疑念をぶつけた。

それもそのはず、段階を踏んでいくならEクラスが妥当であり、目的はA。

「簡単だ。姫路に問題がない今、Eなら正攻法でも勝てるが、Dクラスは難しい。それに初陣だから派手にやって景気つけたいし、Aクラス攻略の為に必要な要素がDクラスにはある」

「成程。つまりこれは、最初のステップってわけだな？」

「ああ。ここにいるメンバーは最強だ、お前達が俺を信じて協力してくれるなら勝てる！」

雄二の確信した表情による言葉に、全員が頷いた。

そして一真と明久、当麻と祐輝は、拳を打ち合う。

「それじゃやるか、明久」

「うん！ 僕達コンビの力、見せてやろう！」

「代表として、頼りにさせてもらっぞ。一真と祐輝たちのコンビだけ！」

「ひどい……！」

Dクラス VS Fクラス

今年度初の試験召喚戦争が、幕を開ける

「ほおっつ、今年の2年は1学期初日から試召戦争やるってのかい？ 面白いじゃないか、承認してやりな」

「承知いたしました」

「さて、どうなるかね？ 見せて貰おうじゃ……ん？ Fクラスと言えば、例のガキどもが居るクラスかい？」

「はい。吉井明久、神竜一真、破神当麻、大神祐輝、坂本雄二……“観察処分者”と、その候補達です」

「そうかい、それはますます面白そうじゃないか……見せてもらおうよ、ガキども」

第4話 マフィアは戦争には巻き込まれる(後書き)

この調子で連ちゃん投稿いつきまゝス。

第5話 死神マフィアの力(初級)(前書き)

連ちゃん投稿どこまで続くか！

第5話 死神マフィアの力(初級)

第5話

死神マフィアの力(初級)

問題

以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my grandmother had used regularly .
』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です。祐輝のみ(僕もふざけたい) 』

神竜一真の答え

『 これは私の祖母が愛用していた本棚です(真面目に久々に書いた) 』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

しかし、神竜君は素直に喜べないのはなぜでしょうか？大神君変わらないでください。

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『 * 』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で。

破神当麻の答え

『一真に任せるニヤー』

教師のコメント

君は神竜君に依存しすぎです

試験召喚戦争 Dクラス対Fクラス

「よし、Fクラスの…げっ！ あれは、さっきの！ まさかあいつ、
やっぱ神竜一真と破神当麻に大神祐輝か！？」

「うつ、ウソだろ!? 何であいつらが先陣なんだよ!?」
「くそつ、騙された! そうだとわかってたら、中堅に回ってたのに!」

DクラスとFクラスの先遣部隊の衝突。

……だがDクラス先遣部隊は、その先頭に立つ少年達の姿に恐れ、即座にパニックに陥ってしまう。

「すごいね。一真と当麻の姿を見た途端、皆動揺しちゃってるよ?」
「このどこから見ても立派な青少年に対して失礼な……」
「普通どこから見ても立派な青少年は、武器を持ち歩かんと思うのじゃが」

その後ろに従えるは、彼らの相棒の吉井明久と幼馴染の木下秀吉。先遣隊長を買って出た一真は、手を掲げて号令を。

「よし、やるぞ! 行くぞ野郎共! アーユーレディ?」

『イエーイ!!』

「うつし、ヒューウィーゴー逝け!!!」

『レッツパーリッツ!!! おっしゃー!!!』

「くっ……ひっひるむな! 所詮はFクラスなんだ。俺達はDクラス、勝てるぞ!!!」

『おっ……おお!』

「さあ、Dクラスの諸君! 楽しんでいこうぜ!」

「Fクラスみんな負けても大丈夫だから楽しんでいこう!」

「全員まとめてぼこぼこニヤ!」

向こうも先遣隊長が負けじと、号令を上げるが……

やはり、尻込みしてしまい意気消沈。

「では、始めてください」

学年主任の高橋女史の立会、彼女を中心に召喚フィールドが展開される。

先陣を切ったのは、Fクラス

「Fクラス先遣隊長神竜一真、行くぞ！ 召喚獣召喚、サモン！」

一真の足もとに幾何学的な図形が現れ、その後に召喚獣が現れた、改造学ランにサッカースパイク手にはガンブレードのデフォルメ一真。

「やっぱり一真のつて、サッカースパイクにゲームのような武器なんだねなんだね？」

「俺と言えばサッカーと二次元と殺人武器だ。それ以外が出たら、召喚システムの方に欠陥があると断言できる」

「神竜君、問題発言……」

「よし、一真に続くぞ！ 吉井明久、出る！」

「さらにいくニャー破神当麻出る！」

「僕も行こう、大神祐輝いつきまーす！」

高橋女史の声は、即座に明久達にかき消された。続いて全員が召喚獣を次々と召喚。

「くっ……ひっひるむな！ 相手は所詮はFクラス、俺達Dクラスなら敵じゃない！」

尻込みしているのがわかる先遣隊長の号令で、Dクラスも応戦。まず1人が、一真の召喚獣めがけて襲いかかった。

「神竜一真、その首もらったあ!!」

その召喚獣に一真の召喚獣はまずガンブレードを構え、柄の引き金をゆっくりと引いた。

放たれた弾丸は敵召喚獣の腕を弾き、武器を落とした所をすかさず左手に握られたガンブレードを構え、何発も撃ちこむ。

「そつそんな……!?!」

「お前らはミスをした。俺の弾丸は必ず当たる」

そのままにより敵召喚獣は持ち点0となって消えていった。それと同時に

ドンっ!!

と言う効果音を上げて現れるは、チンパンジー……もとい、生徒に畏怖をもって“鉄人”称される漢。

補習室の暴君にして、生活指導の鬼と呼ばれる西村教諭の姿。

「てつ鉄人!?!」

「戦死者は補習室へ集合!!」

先ほど一真にやられた召喚獣を操る生徒が、あっという間に担がれてしまった。

「さあ来い、この負け犬が!!」

「いつ、嫌だ! 鬼の補修は嫌だあああ!!」

「安心しろ。“趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎”と言う、立派な模範生に仕立て上げてやる！」

「たっ助けて!!! 誰か……助けてええええええ!!!」

死に物狂いで逃げようとするも、びくともせず。

そのままその生徒は、補習室へと連行されていった。

その場に残った、自身にも起こりうる最悪の未来……その戦慄を残して。

「哀れな……じゃが、これは戦いじゃ。躊躇えば、次は我が身やも知れん」

「じゃあ俺のは遠距離型に変えるから、後方援護に回る。明久と秀吉と当麻は俺のガードを、皆は大輝を中心に今のうちに各個敵をたけ！」

「あっ、ああ。よし、やれるぞ！」

「神童たちが居れば、おそるに足らずだ!!!」

「よしお前ら楽しんでいけ!!!」

『イエっサーマイボス!!!』

一真の号令と活躍で一気に士気が上がった傍らで、犠牲者が出たDクラスはいきなり動揺。

それもそのはず、一歩間違えばあなっていたのは自分かもしれないのだ。

「なっ、なあ……逃げないか？」

「そっそっだよ！ あいつと戦う位なら、俺もっFクラスの設備でいい！ 鬼の補修が確定されるなんて嫌だ！」

「そうよ！ あんなのがFにいるなんて、聞いてないわよ!!!」

「だっ、だったら誰か、五十嵐先生と布施先生を呼べ！ 確かにあ

いつは恐ろしいが、所詮はFクラスなんだ。消耗させれば後はこっちの物だ！」

召喚獣は、召喚者が最後に受けたテストの点数で、強さが決まる。そして消耗に応じて点数が減っていく、0点になれば戦死。

他にも細かなルールはあるが、ここでは割愛。

『神竜一真 総合科目4956点』

『破神当麻 総合科目2920点』

『大神祐輝 総合科目4871点』

「流石、すごいう。まるで熟練の技じゃ」

「秀吉、俺を誰だと思ってる？ それより中堅部隊を何人か呼んでくれ。明久、当麻お前達は俺のガードだ」

「うん、わかった」

「任せるのじゃ」

明久も召喚獣を出し、秀吉はいったん後退。

ふと、秀吉が立ち止った。

「そついえば一真」

「ん？ 何だ秀吉？」

「何故、明久とのコンビなのじゃ？ 成績や付き合いで言えば、ワシの方が上、コンビネーションじゃと当麻や祐輝じゃというのに」

「俺の召喚獣の特性と、明久の“観察処分者”の利点……まあそれは、すぐわかるか」

Fの兵隊を倒した敵召喚獣が、一真の召喚獣めがけて襲いかかってきた。

「よし、もらった!!」

「明久、頼む!」

「ええ!?! …… 援護は頼むよ!?!」

それを、改造制服に木刀と言う装備の明久の召喚獣が食い止めた。敵召喚獣が、そのまま力押しで押し切ろうとしたところで……

「明久」

「うん」

明久が受け流し、敵召喚獣が体勢を崩したところで一真の召喚獣がガンブレードを構える……。

「鉄人、補習室1人追加でーっす」

「一真決め台詞言っちゃってくれニヤー」

「はいはい当麻。桜炎双閻流、桜、五式“桜吹雪”俺に見つかったら最後、死ぬまでのカウントダウンだ!」

と、笑顔で宣言したと同時に、敵召喚獣を頭から切り裂いた。

「西村先生と呼ばんかバカ者が!」

「俺の事より、戦死者が逃げようとしてますよ?」

「ひっ!」

「ちいつ、逃げられると思うな!! 戦死者は1人残らず補習だあああ!?!」

人間とは思えないスピードで駆け出し、そのままとらえ補習室へ。その場に断末魔の名残にも似た戦慄を残して……

「流石は観察処分者。動きに精密さがあるから、相手の隙を作るにはこれ以上ないパートナーだ」

「え？ どういう事？」

「お前は召喚する機会が多いだろ？ それにフィードバックもあるから、通常より高精度な動きが出来る。俺は精密攻撃が得意だから、お前とは相性が良い」

「??? ……よくわからないけど、でもこれならいけそうだね！

一真が居てくれて助かった」

「油断するな明久……ちつ、まずい！」

一真の視線の先には、2人の教師の姿。化学の五十嵐教師と布施教師。

「全員分隊を維持して、敵を確実に撃破する事を考えろ！祐輝！お前が前線の指揮を取れ！」

「了解一真！」

「雑魚に時間をかけるな！」

戦線は拡大され、あちこちでは個別にぶつかり始める。

DクラスとFクラスでは、単体での戦闘はあまりにも分が悪く、押され始めていた。

「さて……明久、化学は？」

「……聞かないで」

「まったく、死ぬなよ……」

「明久、一真よ！ 援軍じゃー！！」

そこへ秀吉が美波をはじめとする、中堅部隊の援軍をひきつれ登場。

「ちいつ、合流は絶対にさせるな！」

「言った筈だぜ？ 俺の弾丸は当たる……それは」

一真の召喚獣が両手のガンブレードを構え、辺りを見回し始める。そして、一真が軽く息を吸い……。

「動く多数の的だろうと、例外じゃないんだよ！」

左手に握られたガンブレードが、敵召喚獣の足を。

右手に握られたガンブレードから放たれた弾丸は、敵召喚獣の武器を破壊。

しかも全て命中し、大半が行動不能に陥った。

「よし、今のうちに下がれ！ ……ちときついわ、これ」

「すっすごいね。本当に全部当たってたよ？」

「射撃に関しては、俺にミスはない……それより先遣は中堅と交代だ！ 補充テスト受けるぞ！ 祐輝そっちも引かせる！」

「了解！」

神竜一真 化学 329点

大和大輝 化学 461点

「まずい、無事な奴は神竜と大和に攻撃をしかける！ 奴をここで止めるんだ！！」

「危ない、一真、祐輝！」

一真の召喚獣を狙った敵召喚獣を、明久の召喚獣が対抗。大輝は一瞬で敵を切り裂く

召喚獣のガンブレードが火を噴き、敵召喚獣の腕に当たって武器を落とした。

神竜一真 化学 312点。

大和大輝 化学 423点

「俺に勝てるわけ無いだろう?」

「さすが一真と祐輝!」

「いったん戻るぞ今のうちに補給だ!!!」

先遣部隊は補給に。

秀吉は、中堅部隊と合流してDクラスと交戦。

Fクラスの教室にて。

「それで、明久とのコンビはどうだ?」

補給テストを受けている最中、代表の雄二からの言葉。

「予想以上にしっくりくる。あいつの観察処分者の肩書き、俺とのコンビなら最強に出来るな」

「成程。流石は一真だ、1+・1京を、10にも20にもできるか」

「さり気の人にけなすんじゃない。しかも何で片方の桁が違うんだよ?」

「坂本ー! 吉井副隊長から伝令だ!」

全く……とぼやきつつ、テストを進める一真。

最も彼は、学力はAクラスにふさわしい程度持っている。

「あのお……」

「ん?」

そこへ、この戦争の切り札であり、現在全科目のテストを受け直している最中の瑞希が声をかけた。

最後に受けたテストは振り分け試験の為、途中退席した彼女は現在全科目0点。(一真と大輝は次の日に受けている)なので現在、テストを受け直している最中だった。

「吉井君、大丈夫でした？」

「あいつなら大丈夫。俺とのコンビネーションで自信をつけた筈だから」

「本当ですか？ 良かった……」

「ははっ。まああいつとはこの学園からの付き合いだけど、そう簡単にやられやしない……」

ピンポンパンポン

『連絡いたします！ 船越先生、船越先生。吉井明久君が、体育館裏で待っています。教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！』

「……と信じたいな。可能性、恐ろしく低いかも知れんが」

「あっ、あははっ……」

「よし、これで戦線拡大阻止は大丈夫だろ。さて、そろそろ中堅部隊と合流するぞ！」

船越教諭 45歳独身

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。

吉井明久 本日2回目の生贄となる。

生存確率 0・0（数ヶタ省略）01%

「……つくづく思う事だが、あいつ明久の人生と命をなんだと思ってるんだ？ よりにもよって船越女史の生贄に捧げるだなんて、正直容赦ないを通り越してるだろ」

「あっ、あの……」

「……明久、もし生まれ変わりがあるとしたら」

「神竜君！ 吉井君はまだ死んでませんよ！？」

数分後、身心ともに憔悴しきった姿で補給試験を受ける明久の姿があったという。

第5話 死神マフィアの花(初級)(後書き)

さあどんどん行くぞ！

第6話 あれれ？Dクラス制覇してた？（前書き）

問題

以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ $?$?
の中から選びなさい

? $\sin A + \cos B$? $\sin A - \cos B$? $\sin A \cos B$
 $\cos B$? $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X = \frac{\pi}{6}$

(2) ?

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\frac{\pi}{6}$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です

神竜一真の答え

(1) $X = 30^\circ$

(2) ? たぶんね

教師のコメント

惜しいですが、ニアミスです。

象限における角度は『 $^\circ$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてください。
後選択問題に変なものをつけないでください。ちがいますし

土屋康太の答え

(1) X 〓 およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

破神当麻の答え

(2) 1から4のどれか

教師のコメント

後で職員室に来るように

大神祐輝の答え

『あゝ面白いことが思いつかない!!!!』

教師のコメント

君までギャグに走らなくてもいいんじゃないでしょうか。

第6話 あれれ？Dクラス制覇してた？

第6話

あれれ？Dクラス制覇してた？

一真がテスト中に寝てしまい時間が飛ぶ。

Fクラス	姫路瑞希	現代国語	339点
	VS		
Dクラス	平賀源二	現代国語	129点

「え？ あ、あれ？」

「ご、ごめんなさい！」

FクラスVS Dクラス、姫路瑞希の召喚獣の一撃により、Dクラス代表戦死

この瞬間、試験召喚戦争はFクラスの勝利となった。

「おいおい、一撃かよ。流石は姫路、我らが切り札だ。おぞましい・・・」

「まったくだニヤー」

「すごいねほんとに」

「いついえ、そんな・・・」

先ほど明久と共に、平賀に攻撃を仕掛けようとした当麻と祐輝は、先ほどの光景を思い出して茶化す。瑞希もほめられ、顔を赤らめた。

「ほら、明久も……あれ？」

「す、ストロップ！ 僕が悪かった！！」

先ほどまでいた筈の場所にはおらず、雄二に腕をひねりあげられている明久。

その足元には包丁が落ちており、祐輝たちはどうしてこうなったかを即座に理解した。

「あの放送は雄二の指示だから、明久がああなるのは仕方ないけど……」

「大神君たちは、吉井君には優しいですね？」

「あいつには何故か、通じるものがある様な気がしてな……皆の様にいじる気にはなれただけだニヤァ」

解放されて、顔を青ざめた明久がよろよると退却。

一真は呆れるも、駆け寄ってポンポンと肩をたたく。

「大丈夫かい？」

「うん、まだ大丈夫……生爪はがされるよりは、ね」

「そうか……さて、そろそろしめと行こうかニヤァ？」

と言う当麻の言葉で、雄二をはじめとするFクラスはDクラス代表へと視線を向ける。

敗残軍としてへこたれる中、ゆっくりと力なく立ち上がる代表の平

賀源二。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて、信じられない」

「彼女は試験の時、体調不良で途中退席したんだ。だからFなんだよ」

「そうだったのか……じゃあ神竜達さえ倒せば楽勝だと甘く見た時点で、俺達の負けは確定してたんだな」

さて、ここからは終戦後のルールが適用される。

試験召喚戦争において、勝者が下位クラスだった場合は敗者のクラスの設備を交換する事が出来る。

そして負けた勢力は、3ヶ月経たなければ次の戦争を起こせない。勝てば英雄の様に扱われる代表も、負ければ戦犯として手酷い扱いを受ける立場……つまり。

「……ルールに従って、クラスは明け渡そう。ただ今日はもう遅いから、作業は明日からでいいか？」

彼はFクラスの最低設備で、クラスメイトに恨まれながら過ごさなければならぬという事。

その表情からは、これから受けるだろう恨みと罵倒への不安しか見てとれなかった。

「いや、その必要はない」

……が、雄二のその一言が、それを一気に払い去った。

「え？ それは……どういう事なんだ？」

「Dクラスには、ある事をしてもらいたい。それを吞んでくれれば、

設備は見逃してやる」

「……話を聞かせてくれ」

雄二に伴なわれ、Dクラスへと歩を進めていく代表。それに続いて、祐輝や当麻、明久は駆け出す。

「で、代表は何を御所望するつもりだ？」

「言っただろ？ Dクラスには、Aクラスを倒すためのステップとして必要な要素があると。それはあれだ」

窓際に歩み寄った雄二が、ある個所を指差した。

それは、Bクラス用の室外機。

「俺達の合図にしたがって、あれを動かなくしてほしい。タイミン
グは、俺が指示する」

「……わかった。上手くやれば、嚴重注意だけで済みそうだ」

最低設備の下で、3ヶ月もの間恨みと罵倒をぶつけられる事を考えれば、まだいい方。

そう考え、平賀氏は呑む事に。

「でも、室外機なんて壊して、一体何の意味が？」

「さあな、代表には代表の考えがあるんだろ。ダメだったら思いきり罵倒してやればいいんじゃない」

「祐輝、黒くなってるそれもそうだね。今回の事で戦争のコツともわかった気もするし、次も頑張らないと」

それを見ていた明久と祐輝の会話が終わった処で、雄二が号令。本日は解散となった。

「さて秀吉俺達も一真起こして帰るかにやー？」

「そうじゃの。ならば代表に明久、祐輝お疲れ様なのじゃ」

「ばいニヤラー」

「ああ、今日はゆっくり休んで明日のテストがんばってくれ」

「じゃあまた明日」

明久に雄二、祐輝と別れ、秀吉と一真（起こされた）、当麻は帰宅準備を整え帰宅。

ちなみに秀吉と一真と当麻の家は、お隣さん同士である。

「よもや、ワシらがDに勝つとはのう。一真と当麻と祐輝による物も大きいじゃろうが、流石じゃ」

「ははっ……俺達だけっていうの、確定なんだな？」

「いや、明久も立派に戦ったとは思っぞい。だがやはり、一真達と比べるのう」

何事も、フィニッシュを決めた者が映える物である。

それに援護の面でも、彼による戦果は大きい。

「それにしても、疲れたな。なんか食べて帰るか？」

「そうじゃな。集中攻撃ともなると、疲れる物かの？」

「当たり前だ。集中状態を維持するって、すごい疲れるんだよ」

「俺は明久の次に制御がうまいからニヤー」

「あら、一真に秀吉、当麻も。今帰り？」

「当麻と一緒に帰ろう」

秀吉に近い質の声にちよつと抜けたアニメ声、振り向くと、そこには……

「よう朱里、何だ秀吉、いつの間に着替えたんだけ？」

「一真よ。ワシら姉弟が揃うなりそうというボケをするの、いい加減やめてもらえんか？」

「いや、これって双子だからこそのお約束だろ。そう思わないか、優子」

「アタシはこつち！」

「あはは、笑えるねえ」

「まったくだにゃー」

「はあ」

秀吉の双子の姉にして、一真のもう一人の幼馴染、木下優子。そして当麻のお幼馴染、水野朱里
Aクラス所属の優等生であり、教師達から一真達と真逆の意味で覚えの良い模範生である。

「こんなところで何してるんだ？ もう殆どの生徒は帰ってる時間なのに」

「職員室で明日配る資料の整理を頼まれたのよ。それより、どうだったの？ 試召戦争は」

新学期早々行われた試験召喚戦争は、当然話題にもなる。

「くつくつく、負けるわきゃねえだろ。ちと苦労したけど、俺達の勝ちだ」

「当然だニヤ〜」

「じゃあ明日からは、教室が近くなるのね」

「やった〜！！」

「ああ。まあ今日は遅いから、明日から入れ替えだ」

目的はAクラスだと言う事は、伏せておいた。

優子と朱里がAクラスだと言う事もあり、へたに察知されればこれ

からに支障が出る。

そう考えての上で、先ほどのやり取りを聞かなかった事に。

「そうになると、明日からは大騒ぎね」

「まあ最低クラスがいきなり2つ上のDを破ったって事は、大きな波紋になるだろうな。俺達からしたら当たり前だが」

「全く、余計な騒動の火種を作ってくれたものね。まあ学校からしてみれば、好都合なのでしょうけど」

「いずれ一真は国単位で戦争をしそうでならないニヤ」

元々学力低下の解決の為のシステムが、試験召喚システム。

テストの点数こそが全てであり、優等生こそが正義が文月学園の理である。

だから現状に甘え、ぬくぬくと過ごしていれば寝首を掻かれる。

そのいい教訓になるだろう。

「そういう意味では、俺達の決起も無意味じゃない訳だ」

「当然だニヤ、俺達は最強だニヤ」

「調子に乗らないで！ ろくすっぽ努力もせず、不満だけを声高に掲げる様な人たちが調子に乗る事まで、肯定する気はないわ！」

「そつよ！馬鹿の集団の癖に！」

「それは最もだけど、立場と扱いは人を変えるって言うし、明日からは違うかもしれないだろ？、って言うか成績は俺のほうが上だし」

「俺は下だけどニヤ」

優子と朱里とて楽しんでAクラスに所属する才女になった訳ではない事は、一真達とて重々に理解している。

少なくとも、Fクラスのバカ共とは違うという事は。

「アタシも、もっと頑張らないと、いつかあんたをぶちのめしてやるんだから!」

「ならまず、家の中を下着姿でうろつくのはやめ、その関節はそっちに……」

文月学園に、断末魔が響き渡った。

そして、その帰り道

「いつてー……復活に時間がかかるまでやることないだろ」

「そうだにゃ〜死ぬかと思っただぜい」

「うるさいわね、アタシの評判に傷がついたらどうする気よ!？」

「その前に問題児とはいえ、堂々と同級生に暴力をふるう時点でおかしくないか(にゃ)？」

怒りのオーラを纏い、先ほどやられた個所を摩る一真と当麻を睨みつける優子と朱里。

実は彼女達、学園では模範的優等生である事で有名だが、プライベートではドがつく程ズボラだった。

「それに言われたくないなら俺が来た時位まともな格好してくれ。」

100歩譲ってジャージ位は」

「同意見だニヤ〜」

「いや、それもどうかと思うのじゃが」

木下姉弟とは幼馴染と言う間柄で、しかも家が隣なので彼は遊びに行く事が多い。もちろん朱里の家も

だから、優子、朱里の下着姿を見た事は1度や2度ではない。

「まあ見慣れた上に寸胴だから、大して面白くも何ともないけど」
「その意見も同意するニヤ」
「それは腕と足がいらないと解釈しても良いのね？」
「申し訳ございません」
「ん？ 一真、当麻よ、あれは明久ではないか？」

秀吉の視線の先には、とぼとぼと歩いている明久の姿。
流石に一真と当麻と秀吉以外に暴力的な姿を見られるのは勘弁なの
か、優子と朱里もそれを聞いて殺気を納めた。

「あつきひさ、どうした？」

「辛気臭い顔するんじゃないニヤ」

「ん？ ああ、一真に当麻に……あれ、秀吉？ どうして女子の制
服着てるの？ 後その人は」

「ワシはこっちじゃ。それはワシの姉上じゃ、そしてこっちが水野
朱里じゃ」

「姉上つて、じゃあもしかして木下優子さん？ へえつ、確かに秀

吉そっくりの美少女だね。水野さんも」

「ワシを基準にするでない」

「「「ぶつくくくく」」」

「「（ギロ）」」

「「（シユキーーーーーン）」」

秀吉とは仲が良くても、優子とは縁の薄い明久。ましてや朱里はま
ったく面識が無かった

基本遊ぶのは明久の家である事が多い為、彼女達とは面識がなかった

「彼が“観察処分者”の吉井明久君？ へえつ、どんな極悪人かと

思ったら、意外とまともそうね」

「そうね」

「極悪人って……ねえ、僕の評判って一体どうなってるの？」

学園1の危険人物と名高い一真、その参謀当麻の相棒なのだから、そういうのも無理もない。

「それより、どうしたんだ明久？ 偉く落ち込んでるようだけど？」

「あつ、うん。ちょっとシヨックなことがあってね」

「シヨック？ ……何があった？ できることならすんぞ？」

一真がかけより、明久と向き合う。

それを優子が、顔を赤くしてそれを凝視し始める。

「……」

「フムツ、そういえば、姉上の部屋に一真と明久のあつ、姉上つ、違っ！ その関節は、そつちに曲がらな……」

「そつや朱里の家にも…まっまっつてくら…！」

訂正、優子と朱里が秀吉に関節技をかけつつ、その光景を凝視し始める。

「姫路さんに、好きな人が居るって話を聞いてね」

「ああつ、その事が」

「あいたたた……なんじゃ、随分と面白そうな話ではないか？」

「「姫路さんって、あの姫路さん？」」

恋の話ともあって、木下姉妹（笑）と朱里もそれに駆け寄った。

秀吉と当麻は先ほどやられた関節技の痛みで、よろよろと遅れての到着。

「それが誰かかっていうのが、わかっちゃったから」
「おっ、そうなんだ。んで、どうなんだ？」

一真と当麻はにやにやとし始め、優子と秀吉と朱里はその様子を見て一真と当麻の考えに感づいた。

（姫路さんって、まさか吉井君の事を？）

（うむっ、明久に話しかけられ動揺しておったり、お弁当を作ろうかと提案したりとかの）

（そうなんだ。彼も“観察処分者”なんて言われてる割には、意外とやるわね）

勘づいてからは、2人してこそそこそと内緒話。

美人姉妹の内緒話と言うのも絵になる光景だが、そこは割愛。

「でも意外だったな……まさか姫路さんが、雄二の事が好きだなんて」

「ああ、そりゃ確かに……………」
「はい？」
「お前馬鹿か？」

一真と秀吉、優子が明久の口から出た答えに、素っ頓狂な声を揃えてあげた。当麻と朱里は物も言えない

「ちよつと待て。今なんだった？」

「だから、雄二だよ。驚くのも無理ないかもしれないけど」

「一体なぜ、そのような答えに至ったのじゃ？」

「さあ？ でも、姫路さんも雄二と話してる時一生懸命だったし、あそこまでだったらクラスメイトとして、応援してあげないかね」

と、明久は自分の家の方向へと走り去ってしまった。

その場に残された人間は……

「あれって多分、坂本君に吉井君の事を相談してた場面に出くわした……そう考えても良いのよね？」

「うむっ、確実にの……姫路も気の毒にのう。自身の行動が、これ以上ない程裏目に出るなどは」

「明日は違う意味でも、大きな波紋が起きそうだな」

そして帰りに不良に絡まれたが、一真と当麻による公開私刑が行われた。

第6話 あれれ？Dクラス制覇してた？（後書き）

眠い。でもがんばる。

第7話 破滅を呼ぶ死の弁当（前書き）

問題

以下の文章の（ ）（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であって、（ ）（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よく出来ました

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

神竜一真、破神当麻の答え

『キ グダムハーツの主題歌』

教師のコメント

君達の髪形の理由が分かった気がします。

大神祐輝の答え

『某おっさんの技である』

教師のコメント

2億冊ですからね。

第7話 破滅を呼ぶ死の弁当

第7話

破滅を呼ぶ死の弁当

「あれ？ どうして？」
「ん？ どうしたの？」

一時限も終わり、折角だからと元Dクラスの教室へと出向いた優子と朱里。

そこにいたのはFクラスの筈なのだが、元の通りのDクラスの面々中をのぞいてみたら、通常通り過ごしている光景があるだけで、引越しの準備には到底見えない。

そして何より、目の前にいるDクラス代表もいつも通りである事。誰も彼に対し、恨みや侮蔑の視線を向けてはいない。

「Dクラスは負けた筈なのに、なんで明け渡す準備をしてないの？」
「ああっ、設備の入れ替えは免除してもらったんだ。ある取引をしてね」

「ある取引？ ……そう。それなら、邪魔してごめん」
その言葉に引っかかりを感じて、優子と朱里は一路Fクラスへ。その去って行った姿をみて、話し相手であった平賀源二は一言。

「もしかして、神竜と破神と付き合ってるって言う噂、本当なのかな？」

「どうしたの、代表？」

「いや、何でもない。それより、テストの勉強しないと」

事なきを得たとはいえ、Fクラスに負けた敗残勢力であることには変わりはない。

なので来るべき次に備え、勉学に励むようになったという。

そして、旧校舎にて。

「なっ……何ここ？ Fクラスって、こんなに酷いの？」

教室に出向くなり、優子はその光景に顔を顰めた。

設備に差がある事や、それによりFクラスは最低である事は知っていた……が。

開け放たれている扉から見える光景は、Aクラスである優子には衝撃的なものだった。

確かにこれでは、今すぐ変えたくなくても無理もないかもしれない。

「ますます怪しい……何で、この設備を取り換えなかったの？」

キノコの生えた腐食畳、脚の折れた卓袱台、ぼろぼろの座布団。

中には卓袱台を木工ボンドで修理していれば、窓をビニールとセロテープで修繕している生徒の姿も。

「ん？ 姉上、朱里何故ここに？」

その中の2人、弟である秀吉が気付いて駆け寄ったそれを聞いて、幼馴染である一真と当麻も同様に。

「何だよ優子、朱里Aクラスの一員様がこんな汚い所に何の用だ？」
「まさかの、皮肉かニヤァ？」

「何の用じゃないわよ。一体どういう事？ 折角だからって顔出してみたら、設備を入れ替えていないなんて」「
「代表の意向だ。詳しくは俺も知らん」

その言葉に、優子と朱里は引っかかりを感じた。

……が、所詮はよそのクラスである自分に、ばらす訳がないとあきらめる事に。

「うあゝ……」

「あの、大丈夫ですか吉井君？」

「本と災難だったねー明久」

「うっ、うん……貞操は守る事が出来て、良かった」

ふと、卓袱台に突っ伏して唸り声をあげている男子と、それに心配そうに見守る女子と男子の姿が目に入った。

「ん？ あれは、吉井君じゃない。どうしたの？ テスト疲れっただけじゃなさそうだけど」

「昨日の放送についてだ」

「ああっ、船越先生に男女の会合の呼び出しをしたって話よね？」

全校放送であった為、優子と朱里も例の放送は聞き及んでいた。偉く酔狂なマネをと思ったが、状況的に考えればそういう作戦なのだろうと、即座に考えつく。

「作戦とはいえ、明久も災難じゃったのう。偉く目をつけられておった様じゃし」

「ああ。祐輝の近所のお兄さん（39歳独身）を紹介して、事なき

を得たらしいけど」

「Fクラスにも色々あるのね……それより」

優子は少し視線をずらし、明久の席の隣の席に座る瑞希と祐輝にピントを合わせた。

幸せオーラに身を包みながら、明久を微笑ましく見守る姿とそれに近づけない彼を見て一言。

「確かに、見ればわかるわね？ 同じ女性として、羨ましい程に、大神君なんか話そうとしてるのに近づけてない」

「そうじゃのう。何故あれで坂本に好意があると、断定できるんじゃないだろうか？」

「わからん。けど明久の場合、言える事はただ1つ」

コホンッと咳ばらいをし、一言。

「鈍感な人間と言うのは、総じて自信を持っていない人間の事だと思う（にゃ）」「

「成程のう。可能性を考えつく事は出来ても、自信の無さ故に否定してしまうと言った処じゃろうか？ 確かにそれでは、上手くいく訳がないわい」

「見た目はそれなりにまともだから、傍から見ればお似合いなものもつたいない」

「そうね」

はあっ、と5人そろってため息をついた。

Fクラスのテスト漬けの午前が終わり、昼休み。

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！ 今日ラーメンとかつ井とカレ

「と炒飯にすっかな？」

「あつ、じゃあウチも一緒にいい？」

「さて何に突っ込もうか」

「突っ込んだら負けニヤー」

雄二の言葉に、美波が駆け寄った。

その近くで話していた明久と一真、秀吉と祐輝、当麻も同意。

「それじゃ僕は、贅沢にソルトウォーターでも」

「……奢ってやるから、塩水を贅沢と言うのはやめる。そんなじゃそのうち倒れるぞ？」

「今日は俺もこないだの試合のギャラが入ったからおごってやるニヤー」

「ぼくもいつてくれたらおごるよ？」

「だって、新作ゲームや漫画は毎月出るし、発売日に手に入れるのが当たり前じゃないか」

「けどそんな生活がバレたら、確実に1人暮らしをやめさせられるぞ？」

「うっ……でも一真と当麻は代表の収入があるし祐輝はバイトがあるからから、そんな生活ができるんだよ。」

「その代わり親がいないため、仕送りなし、わかったか？明久」
「はい……」

普通に考えて、明久の生活は一定水準を遥かに下回る。

仕送りをしているにもかかわらずこれでは、意味がないと思われるも文句は言えない。

「お前ら、本当に夫婦みたいだな」

「そうよねー。神竜って世話焼きなのは知ってるけど、ダメ亭主と世話焼き女房にしか見えないわ」

「確かにのう。世話焼き気質、ここに極まれりじゃ」

「「確かに」」

「……………同意」

6人6様の反応を見せる中で、1人の少女がその空気を崩した。

「あつ、あの、皆さん？」

「ん？ どうした姫路……………つて、あれ？ そのお重箱は？」

「あの、昨日の約束の」

と、恐る恐る手に持った重箱を差し出す瑞希。

それを見て、全員歡喜の声を上げた。

「へえつ、本当に作ってきたのか。しかも重箱にだなんて、大変だ

つたじゃないか？」

「いえ、そんな事は……………だから、御迷惑でなければ」

「迷惑なもんか。ねっ、雄二！」

「ああつ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？ よかった」

ほにゃ〜ツとした笑顔で、喜ぶ瑞希。

「むーっ、瑞希つて意外と積極的なのね」

その中で、明久を睨みつける美波。

「折角の姫路の手料理、こんな汚い所で食う物じゃないな」

「そうじゃの。屋上で食べると言うのはどうじゃ？」

「そうだな。今日は天気も良いし、ちょうど良い。それじゃ先行つて場所を確保してくれ。飲み物買ってくる」

「あつ、それならウチも行く。1人じゃ持ち切れないでしょ？」

雄二と美波は、一路1回の売店へ。

その残りは、明久が瑞希から弁当を受け取って、屋上へと歩を進めた。

「結構重いね。こんな量、作るの大変だったでしょ？」

「その……がんばりましたから。それに、喜んでいただけならこれ位は……」

「なんか、姫路さんの旦那さんになる人が羨ましい」

「えっ！？ でっでしたら、その……」

その会話を、傍から聞いてる一真達は。

「……なあ、秀吉」

「何じゃ？ あれで本当に気付いてないのかと言う疑問なら、ワシもちょうど同じ事を考えておったぞ」

「そうか……空気的には見ててほのぼのするけど、実際には姫路が気の毒なんだにゃー」

「うーん、明久ちよっとこれはないね」

傍から見れば、ほのぼのとした恋人らしい雰囲気的光景。

事情を知る者として、どうしても姫路が気の毒に見えてしまう一真達だった。

「どうにかしてやりたいのう」

「明久自体、既に姫路の相手は雄二だと確定……おーいムツツリー
二、階段の下で低姿勢になるな」

「……………！(ブンブン)」

その後屋上に到着し、シートを広げて陣取り完了。

「風と日差しが心地いいね。それにお弁当も楽しみだな」

「ああ。こんな好条件で女子の手料理を食べるなんて、俺達健全なる男子高校生にとって最高の贅沢だ」

「うむっ、男として心から同意じゃ」

「……………（こくこく）」

「当麻さんも同意です」

「僕もだね」

『妻帯者はうらやましがんな！！！！奥さんに作ってもらえ！！』

「あの…………あんまり、自信がないのですが」

期待が渦巻く中、瑞希は中央に置かれた重箱のふたを持ち上げる。

そして、瑞希作のお弁当の全容が、今明らかに！

「……………おおっ！！……………」

今、6人の男の声が一つとなった。

「すごいなあ。流石は姫路さん、料理までできるなんて」

「うむっ、良い嫁さんになりそうじゃ」

「そっそんな……………」

「じゃあ早速つて、あっ！！」

その破滅の足音は、誰一人気付かなかった。

「ずるいぞ、ムツツリーニ！！」

しかし、それは着々と近づいていて…………

「……………（パクッ）」

今、それは明らかとなる。

バタンツ！！ ガタガタガタガタ……

彼らの身に降りかかる、大いなる災厄の姿に。

「……………ってちょっと待て、何でミステリー風味なんだよ!？」

「何がですか？」

「いや、こつちの話。そんなことより、どうしたんだムツツリーニ
!？」

楽しくほのぼのとした箸の昼休み。

しかし今、戦慄が走ろうとしていた。

「つつ土屋君!？」

姫路瑞希作のお弁当の一品、海老フライ。

それを口にした途端、豪快に倒れ小刻みに震え始めた男、ムツツリ
ーニ。

「どっ、どっしたのムツツリーニ!？」

「何があつたのじゃ!？」

「まずいにゃー」

「わからん。海老フライを食べ……まさか」

一真は海老フライをとり、匂いを嗅ぎ始めた。

即座に顔を青ざめて、めまいに似た感覚に襲われる。

「……とりあえず、何を入れたかを聞かせてくれないか？」

「何と言われましても、普通に作りましたよ？ 隠し味に“硫酸”を入れた位で」

「普通に……ん？ 硫酸？」

「ひゃ〜こわ」

不吉な単語を聞きとった一真と当麻は、その海老フライを畏怖の視線で見つめる。

「どうやって手に入れたかが気になるところだけど、どうしてそんな物を？」

「ちよつと、酸味が欲しいと思ひまして」

「……なあ姫路、俺の知識に間違いがあるかもしれないから、硫酸の特性を教えてくださいませんか？」

少々罪悪感に晒されつつ、一真は内容説明に。

秀吉と明久と当麻は、その姿をまるで勇者の様に尊敬の意を以て見詰め始める。

「おう、待たせたな。へー、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ？」

手に飲み物の缶を抱えた雄二が、瑞希の弁当に手を伸ばす。

そのうちの卵焼きをつまんで、一口。

「あつ、雄二！？」

「まずいにゃー！！」

「やつやばい！！！！」

食べた途端、缶をぶちまけて倒れた。

それも、ムツツリー二と同じく小刻みに震えるのも同じに。

「……………で、卵焼きは何を？」

「えっと、クロロ酢酸を……………」

「……………パンとお茶を買ってくる。明久、当麻、祐輝、手伝ってくれないか？」

「うん、わかった」

とんだランチタイムとなっていました。

数分後。

「……………まさか、姫路にこんな欠点があったとは」

「……………意外」

被害者2名は、殺菌作用のあるお茶を大量に飲みながらの会話。顔色も悪く、小刻みに震え続けたまま。

「……………すみません」

「気にしなくて良いよ、姫路さん。誰にだって失敗はある物だし」

「そうだぞ姫路。失敗を言ったら明久なんか、土下座どころか死んでも詫びきれない量あるんだ」

「失礼な！当麻も声を殺して笑うな！！」

瑞希への明久のフォローを、雄二が茶化す。

それを見て、瑞希もようやく落ち着いたのか笑みを浮かべた。

「でもうまそうなのは事実だし、筋は良いとは思っよ？ だから明久の家で練習すればいいじゃないか。いっそ花嫁修業の一環って感

じで」

「はっ、花嫁修業……ですか!？」

「え!?! ちょっ、一真! 何を勝手に……」

「女の子が世話しに来てくれるつてのに、何の不満があるんだよ? そもそもお前の生活破綻ぶりを考えれば、その方がずっといいだろうが」

「残念だけど僕もそう思うよ明久」

明久とて、健全な男子高校生である。

そういう事に理想を抱くなど言われても、無理な相談である。

「でっでも、そこまで酷くは……」

「あの生活のどこをどうしたらそう言える? ガスや水道は止まってるわ食える物は何にもないわ、生きてる事自体が不思議なくらいだ」

「ははははは」

「失礼だなあ。何にもないってことはないよ」

「砂糖に塩、サラダ油だろ。今でも思い出すだけで吐きそうだ」

その他全員も同意したように、多少顔をしかめて頷いた。少なくとも、現代人の食生活じゃない。

「確かに、世話する奴が居た方が良いな」

「そうじゃな。とても“現代の人間がやる”生活とは思えん」

「……………同感」

「明久そのうち死ぬよ?」

雄二、秀吉、ムッツリー二、当麻、大輝も、その方が良いと肯定が、雄二とムッツリー二の目は笑っていなかった。

「ちよつ、そんな勝手に！」

「それにだな」

「え？」

一真がニヤリと笑みを浮かべ、皆に聞こえないように声をひそめ始める。

それを見て、秀吉も混ざり始めた。

（チャンスでもあるだろ？）

（チャンスつて、姫路さんは……）

（それはあくまで明久の勘じゃろ？　ここで頑張れば、あるいはの可能性も含まれるじゃろつて）

（一真、秀吉……けど、姫路さんの都合もあるし、それに男の1人暮らしの部屋にだね？）

「あの……吉井君さえ迷惑でなければ、お願いしてもよろしいですか？」

あっさりと了承された事に、明久は驚き一真達はうんうんと頷きあった。

（よし、チャンスだ明久。良い雰囲気を作つて、押し倒せ！）

（うっ、うん。わか……らないよ！　最後の余計だよ！）

（大丈夫だ、お前ならできる。お前なら姫路を押し倒す事が出来る、自分を信じる！）

（いや、青春ドラマみたいなノリで言われても困るよ！）

動揺はしてはいても、明久の脳内ではシミュレートされていた。しかし、その空気を破る者が。

「ちよつ、ちよつと、何言ってるのよ瑞希！ 吉井は1人暮らして
って言うのに、行ったら何されるかわかった物じゃないわよ！？」
「考えてみれば、ケダモノの檻にウサギを放り込むような物だな」
「……………」

美波の剣幕を見て、にやりと笑みを浮かべる一真。

ピンッ！ と、閃いた素振りを見せ、美波にある宣告を面白半分
で告げた。

「じゃあ島田も一緒に行けばいいだろ？ 何かやろうとしたら、
いつも通り関節外せばいい訳だし」

「え！？ なっ、何でウチが！？」

「その前に僕、了承してないんだけど……その二人！腹を抱えて
笑うな！！」

パンを食べつつ、まったりとした時間だけが過ぎて行った。

パンが無くなり、ある程度時間もたったころ。

「それで試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」

「ああ。Bクラスにも、Dクラスと同様に俺達がAクラスに勝つた
めの要素がある。俺たちじゃ真正面からぶつかった処で、勝ち目は
ないからな」

Aクラスは当然、この学園選りすぐりのエリート達。

試召戦争は代表を倒す事が勝利であるが、Aクラス代表はそれすな
わち学年首席。

Fクラスの戦力では、困った処で返り討ちに遭う事は容易に想像が
つく。

「それで、どうする気だ？」

「Bクラスとこの戦争のシステムを使って、Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

「システム？」

「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか明久？ ムツツリーニ、ペンチ用意しておけ」

「え！？ えーっと……」

いきなり話を振られた明久は、どぎまぎし始める。
それを見て瑞希が、こっそりと耳打ち。

(吉井君、負けたらランクを1つ落とされるんですよ)

「あつ、そうそう。で、下位クラスが勝ったら設備を入れ替えが出来るんだっただね？」

「そうだ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する」

「成程な。設備交換免除を条件に、BクラスにAクラスへ宣戦布告させる。そのあとで俺達は連戦を匂わせる通告をし、一騎打ちの条件を呑ませる……か？」

雄二が頷く。

明久も今の話を聞いて、納得するように頷くが……

「しかし、上手く行くのか？ 向こうとしては試召戦争の方が確実なのは事実だ」

「また俺が調べようかニヤ？」

「嫌それじゃあ駄目だろ、僕は何とかして相手を説得するしかないと思うんだけど」

「そうじゃな。じゃが実力者の一真、祐輝、当麻は当然として、姫路の事も既に知れ渡っておるじゃろうし」

「それに関しては考えがある。それよりもまずは、Bクラス戦だ」

いずれにせよ、Bクラスを倒さなければ意味がない以上はと、話は締め。

雄二は明久と一真を交互に見て、一言。

「明久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告して来い」
「断る！ 雄二が行けばいいだろ」

「やれやれ、それじゃジャンケンで……」

「ちよつと待て」

「俺達がいくニヤー」

2人の間に入ったのは、その手にはアサルトライフルが握られている一真と当麻。

その姿に、若干2人どころか、瑞希をはじめとする他のメンバーも恐怖を感じた。

「俺達が行くよ。Bクラスの代表、あの根本って聞いたことあるから」

「と言うか俺が調べたニヤー」

「根本だと!？」

根本恭二

とにかく評判が悪い男で、目的のために手段を選ばない事で有名。

“カンニング常習犯” “ケンカで刃物はデフォ装備” “球技大会で一服盛った” とまで言われる程。

「そうだとしたら、妙な事をされないように牽制した方が良い」

「そうか。確かに明久じゃ、インパクトに欠けるな……」

「だったら雄二が行けばいいだろ。でも、それじゃ一真達っていつもの……」

「じゃあ明久も来るか？ 心配しなくても、コレクションとこれ位なら貸してやるよ」

と言って、一真は懐から自動拳銃とスタンガン（20万ボルト）、ナイフを取り出し、明久に手渡した。

「……また、僕は危険人物として知れ渡るのかな？ 365度どう見ても美少年なのに」

「バカとしてなら知れ渡ってるぞ？ ちなみに5度多い」

「うむつ。実質5度じゃな」

「2人とも嫌いだ！」

そして放課後。

「それで、明日の午後からかの？」

「ああ。根本の姿もきつちり確認したし、色々と脅したからまず問題ない……と信じたいな」

「うむつ。卑怯な手を使われて負けると言うのは、納得できんからの」

「その辺は参謀の俺の腕の見せ所ニヤー」

家がとなりなので、自然と一緒にになる一真と秀吉と当麻。

その帰り、明日からの試召戦争と……敵側の代表である根本の卑怯な手段への警戒について、話し合っていた。

「まず狙われるとしたら、一真と姫路と当麻と祐輝じゃな」

「俺らとはとかく、姫路が心配だな……ん？」

ふと、一真が目を向けた先には……

「……あれは」

「ん？ どうし……」

「しっ！」

秀吉をひつつかんで、物陰に隠れる一真と当麻。口をふさぎつつ、もう片方の手で目標に指差した。

「改めて、警戒した方がよさそうだな」

「うむつ。事によっては、の」

と、こっそりとその場を後にしようとした所で……

「一真、秀吉、当麻！ あんた達何やってるの！？」

「え？ 優子？」

「ん、ああ朱里かニヤー」

「おおつ、姉上、朱里。どうしてここに？」

「そんな事はどうでもいいわよ！ 何であんた達、こんな所で抱き合ってるの！？」

ふと、一真と秀吉は自分達の現状を省みる。

“ある物”から隠れる為に、秀吉を抱き寄せる形で……。

「言ったわよね一真？ 秀吉と妙な事をしないでって」

「妙な事って、ワシも一真も男じゃぞ？」

「その所為でアタシが一真と付き合ってるって、迷惑な噂が流れてるのよ！」

「迷惑って、それが幼馴染に言う事か？ それに俺だってもう、お

前みたいな寸胴に……あつ、ごめんなさい。訂正するからその関節
をそれ以上……」
「ははは、」

断末魔が響き渡った。

第7話 破滅を呼ぶ死の弁当（後書き）

よしとめよう。感想を入れてくださいと作者は作者は土下座します

第8話 死神マフィアの力（中級）（前書き）

問題

以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good? better? best

bad? worse? worst』

神竜一真、大神祐輝の答え

『good? better? best

bad? worse? worst』

教師のコメント

その通りです。まさか神竜君が他のことを何も書かずに正解するとは

吉井明久、破神当麻の答え

『good? gooder? goodest

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『bad? butter? bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっばい』

第8話 死神マフィアの花(中級)

第8話

死神マフィアの花(中級)

第二回試験召喚戦争

Bクラス VS Fクラス

「いたぞ、Bクラスだ!!」

「高橋先生を連れて居るぞ!!」

昼休みのチャイムが鳴り終わると同時に、戦いは始まった。

前線指揮は前回と同じく神竜一真、先陣を切るは吉井明久と木下秀吉、破神当麻、大神祐輝。

「ねえ一真、今回は前に出ないの?」

「いや、今回は俺が前に出るのはまずい」

「一真は、今回は雄二の策で後ろだよ。Bクラスは文系だから一真が前に出れないんだ。」

「それに一真は前線だとやりすぎるからのう。銃で人を殴ったり。」
「うるさいぞ秀吉！」
「ほんとのことだから仕方ないニヤー」

Bクラスはまず、10人前後に対しFクラスはほぼ総力。
今回は廊下を制することが先決ともあり、勢いが大事だからだ……
が。

『Bクラス 野中長男 総合1943点』

V S

『Fクラス 近藤吉宗 総合764点』

『Bクラス 金田一祐子 数学159点』

V S

『Fクラス 武藤啓太 数学69点』

『Bクラス 里井真由子 物理152点』

V S

『Fクラス 君島博 物理77点』

Dクラスとは格が違い、ほぼあっさりと大半が押し切られてしまっ
た。

「援護する、やられそうな奴は下がれ！」

やられそうになった召喚獣を、一真の援護射撃でフォローし撤退を
指示・

『Bクラス 工藤信二 物理165点』

V S

『Fクラス 神竜一真 物理798点』

「え!？」

「今回ちと調子が悪かったからこの程度だが、物理なら得意中の得意なんだよ」

「うっ、ウソだろ!？ 調子悪くてこれかよ!？」

元々、一真のような召喚獣は、出鱈目だ。

教科ごとに武器が違うと言うだけでおかしいのだがそれよりもその点数による能力に頼りがちなになるところも、完全に無視してフィリングによる能力を使わない戦いが多い。

そのため、一真の召喚獣は、どんな武器でも最高の戦いをする。ちなみに今回は太刀だ。それなら一真の最強の力が存分に発揮される。

「桜炎双閻流、炎、三式不知火!」

一真の召喚獣が、敵に真正面から突っ込んで、重い一撃を浴びせる

「よし、1人撃破!」

「Bクラス、真田由香。神竜一真に数学勝負!」

「させないニヤー破神当麻が代わりに受ける!」

「サンキュー当麻!」

『Bクラス 真田由香 数学166点』

V S

『Fクラス 破神当麻 数学121点』

「調子悪くない?当麻」

「何とかやれない事もないかにゃー」

点数を見て、敵Bクラス的女子は笑みを浮かべた

「でも点数は勝ってる!」

「甘い!」

敵召喚獣が当麻めがけて飛びかかるのを。楽勝と言わんばかりに武器を振り下ろすのをかわして、足払い。

「え!?!」

「隙だらけだぜい!」

そこをすかさず、敵召喚獣の腕をナイフで切り落とした。

それにより落とされた召喚獣の武器は、当麻が吹き飛ばした

「よし、あいつを狙え!」

「よし来た!」

「俺もだ!」

そのまま物流に吞まれ、Bクラス的女子は哀れ補習の餌食となった。

「やったな相棒」

「やったニヤー!」

「よし、神竜たちに続け!」

そのまま一真と当麻はハイタッチ。

それに勢いを付けて、Fクラスは奮起!

「古典で神竜一真に勝負を仕掛ける!」

「テーツージーン補習室一人つかい！」

『Bクラス 鈴木次郎 古典210点』

VS

『Fクラス 神竜一真 古典740点』

「はっおら、蜂の巣だ!!」

そういつてガトリング砲をぶっぱなす一真。敵は蜂の巣になり、鉄人のそうくつへ連れて行かれた。後ろから一真が狙われる。

「Bクラス根岸太一 古典で神竜一真に勝負を… やらせない! 大神祐輝、いきますサモン!」 っち!

『Bクラス根岸太一 古典289点』

『Fクラス大和大輝 古典512点』

Bクラスの召喚獣は、一瞬で祐輝のビームライフルで打ち抜かれた。

「サンキュウ祐輝!」

「いや、お礼は後だ! はやくこの状況を打解しないと」

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」

「おいおい、大丈夫か?」

「はい……平気、です……」

そこへ、息絶え絶えだがFクラスの勝利の女神登場!

「来たぞ、姫路瑞希だ!!」

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！ Fクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込めます！」

「律子、私も手伝う！」

瑞希が現れた途端、Bクラス陣営は表情を引き締める。

まず、10人程度の戦力しかいないのに、2人がかりで勝負。

『Fクラス 姫路瑞希 数学412点』

VS

『Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学189点&151点』

「あつ、腕輪！」

「腕輪？ ……それって確か、何点かオーバーしたら、特殊能力が付加されるって言う？」

「まあ、姫路ならおかしくはないか」

瑞樹の召喚獣が、腕輪を付けた左腕を向けると、腕輪から光線が放たれる。

そのうち1体を炎でつつみ、もう1体も大剣でなぎ払い、戦闘不能へと追いやった。

Bクラス前線戦力現在6名。

「姫路も着たことだしあれやるか。オイお前ら！アユーレデイ？」

『イエース！』

「……よし行くぞ！ヒューウィーゴー！」

『レッツパーリイイイ！！！！』

相変わらずこいつらはのりがいい

「よし、このままBクラス教室まで押し切るんだ！」

「みつ、皆さん、頑張ってください！」

「「「「おおーっ！！！！」」」」

2大主力の激励（効果割合 瑞希9：一真達1）で、士気は大幅アップ。

「さて……姫路、このまま前線の指揮頼む。秀吉、明久、当麻、祐輝！一旦戻るぞ！」

「え？ はっはい、わかりました」

前線は一旦瑞樹に任せ、一真達は一旦後退。

秀吉達は事情を知っていた故に納得したが、明久はまだ一真も自分も補給が必要な程ではない為、疑問顔。

「どうしたのさ、一真？」

「そろそろ根本が動くころだと思ってな」

「そうだね」

「めんどいニヤー。俺と一真は特に」

「雄二に何かあるとは思えんが、そろそろなんらかの手段を講じる頃じゃ」

「急ごう」

「そつだニヤー」

5人は駆け足で、Fクラスへ。

教室の扉を開けるや否や、そこに広がっていた光景は……

「……やってくれやがったな」

穴だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンと消しゴムと言う光

景。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

そこへ、代表である雄二が割り込んできた。

「雄二、これは一体どういう事だ？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために、教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。4時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するつてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

時間的には、こちらの作戦通りに事が進み、そのころには教室へ押し込める戦況から始められるはず。

Fクラスとしては、好条件ではある。

「確かに、それなら姫路が万全の状態で始められるから、俺達としては都合が良い……が、どうにも解せないな」

「ああ。確かにあの根本がそんな協定を結ぶなんて引つかかるが、今回もクラス全体と言うより姫路の個人戦力がカギとなる以上、乗った方が勝率が高くなる事は事実だ……一応、用心してくれないか？」

「ああ。明久、秀吉、お前らは前線に戻れ。俺は雄二と一緒に、シ

ヤープや消しゴムの手配をやるから、当麻、祐輝、あいつのこと調べといてくれ」

明久と秀吉が頷くと同時に、教室を飛び出して行った。当麻と祐輝はその場でパソコンを取り出し、ハッキングを開始する。2人を見送ると、近衛隊および雄二と共に教室整理を始める。

「それで、代表閣下はどういう思惑だとお考えで？」

「補給手段を断つ為だけに、こんな向こうに不利な条件を出すとは思えん……何かがあるな」

「ああ……ムツツリー二と合流して情報収集に」

「それはダメだ。姫路に次ぐ主戦力のお前に何かあれば、士気が落ちる。あいつらはここでやるし」

舌打ちをして、片付けと手配に戻る一真。

それらが終わり、4時となって協定通り一旦休戦。

「……で、一体何があった？」

「わかりません。気づいたら、廊下倒れてまして……」

「おいおい、まるで散々殴られた後で廊下に頭から叩きつけられたかのようなケガじゃないか!? すぐ寝かせないと! 姫路、ハンカチか何か濡らして持ってきてくれ!」

「はっはい!」

終戦と同時に戻ってきた戦友達と、文字通りぼろぼろにされた明久の姿があった。

「全く、戦争じゃからと、本当にケガする必要はないというのに……」

「ちょっト当麻さん怒ったかな」

「僕はそろそろ切れる寸前なんだけど」

「ああ……根本のヤロー、手段を選ばないにしても程があるだろ。そういえば、島田はどうした？」

「服に着いた血を洗うと言って、どこかへ行ったぞい」

「ふーん、服を洗う……ん？ 血？」

その一言で、何が至らせたかはわからなかったが、何があったかは容易に想像がついた一真達だった。

余談だが、一真と当麻は明久の姿に異様なまでにデジャヴを感じ、その痛みがフィードバックされているかのように背筋が冷えたという。

「……それで、戦況は？」

「顔が青い事は置いておくとして、相手を教室に押し込んだところで休戦時刻じゃ」

「その辺りは、予想通りだな……だとしたら、やっぱり解せないな」

「じゃが、今の処は明久を除くとこれといった目立つ被害もないぞい」

瑞希に看病して貰っている、今だ目覚めぬ明久に目をやっての発言である。

「うっ……」

「ああ、気がついたか明久？」

「……」

「ん？ ムツツリーニ。何か変わった事があったか？」

「……………（コクリ）」

気がついた明久に駆け寄ろうとした一真に、いつの間にかいたムツツリーニがそれを遮った

彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、警戒に当たっている。

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」

「……………（コクリ）」

「狙いはAクラスじゃないだろうから…………… 大方、漁夫の利を狙うつてところか？」

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。俺達が勝つとも思っていないだろうし、Dクラスを使えば難しい事でもないだろう」

と言っや否や、明久、一真、瑞希、ムツツリーニ、当麻、祐輝を伴い教室を出る。

その途中、美波と須川の2名も加え、一路Cクラスへ。

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は居るか？」

「私だけど、何か用かしら？」

扉をあけると同時に、名乗りを上げた雄二に応えたのは、1人の女生徒。

「っー！」

その姿を見て、一真は昨日の光景を思い出した。街中を、ある人物と共に歩くその姿。

「ああ、Fクラス代表として……………」

「ちよつと挨拶に来たんだ。Cクラスの代表は美人だと聞いたから、是非ともお近づきになりたいと思ってな」

「なっ！？…………… あっ、ああ。へえっ、聞いた通りに活動的な美人

じゃないか。ぜひとも、仲良くしてほしい」

「ちつ……あらそう？　ありがとう。小山友香です、よろしく」

「そうだ、小山、あそこにいる、俺たちと戦っている、Bクラスの代表様とその近衛部隊がいるのはどうしてだ？」

「ちよつと用事があってね。」

「そうか、ならそれは試召戦争の話じゃないんだな？」

「ええ、まあ」

「そうか。ならいいやじゃあね〜」

そうして、Fクラスの面々は帰っていった。

「作戦失敗か」

奥の方からBクラス代表、根本恭二が小山に歩み寄った。

「どうやら彼、私達の事を知ってたみたいね？　神竜一真、破神当麻、大神祐輝、Dクラス戦や今日と、随分と目立つ戦果をあげたらしいじゃない？」

「関係ないな。たかが危険人物がどうあがこうが、俺達の勝利の算段はもう出来てるんだ」

そう言っつてニヤリと笑みを浮かべ、ある封筒を取り出した。

一方、Fクラス面々は。

「どうしたのいきなり？」

「あいつ根本の彼女だ。Cクラス代表だったのは、今初めて知った」

「そうだったのか……危なかったな」

試召戦争に関わる一切の行為を禁じる。

その条文はこれが狙いだっただのかと、雄二は舌打ちをした。

「それでどうすんだよ？ これじゃBクラスに勝ったとしてもCクラス戦だ。分が悪すぎる」

「それに関しては考えがある。心配するな」

「ある意味一番性質が悪いな。根本のクソヤローめ……さて、明日はどんな汚い手を使ってくる？」

彼は頭の中で、勝った暁に行くペナルティについて、模索を始めていた。

第8話 死神マフィアの力(中級) (後書き)

作者は、感想を、心よりお待ちしたいので、今回から質問をちょっとしてみたいと思います。

今日の質問

作者は、今「ギルティ クラウン」という、アニメにはまっているのですが、みなさんは、どんなアニメが好きですか？

第9話 やってしまった。怒りを買った。

第9話

やってしまった。怒りを買った。

「今から昨日言った作戦を実行する」

「作戦って、Cクラス対策のか？」

「ああ、その為には、秀吉にこいつを着てもらおう」

現在午前8：30、Bクラスとの戦争再開にはまだ早い時分。

教壇に立ち、そう宣言した雄二は文月学園の女子制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじや？」

「いや、そこは構うべきだと思うが、雄二の狙いはわかった。秀吉に優子になりすまして貰ってCクラスを挑発、攻撃の矛先をAクラスに向けさせるってところか？」

「その通り。お前ならまだしも、面識がないCクラスでは見破る事は不可能だ」

優子と秀吉は二卵性双生児だが、パツと見では家族ですら見分けがつかない程似ている。

ちなみに一真と当麻はふざけて間違えたりする物の、実際は2人を完璧に見分ける事が出来る唯一の存在。

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。明久をはじめとするFクラス男子は、その着替えの光景に絶句。ムツリーニもすごい速さでカメラのシャッターを切り、その光景に釘付けとなる。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあ？」

「……さあな？」

秀吉、雄二が疑問符を浮かべ、一真は呆れたようにその面々を見ていた。

それから雄二、秀吉、明久、一真、祐輝、当麻の6人は一路Cクラスへ。

ある程度まで近づいた処で、雄二、一真、祐輝、当麻、明久は身を隠す。

秀吉は姉になりすます事に、気を重くしつつCクラスへ。

「ねえ、大丈夫かな？」

「秀吉なら大丈夫さ。増してなりすますのが優子なら、さぞや面白い事になるだろうよ」

「随分と楽しそうだな？」

何かと痛い目あわされてる優子になりすましての悪戯に、一真も期待を抑えきれない。

さて、どんな挑発をしてくれるのかなと、期待を込めて秀吉を見つめる。

深呼吸をし、表情を引き締めてCクラスの扉を開くと、まずは一言。

「静かになさい、この薄汚い豚ども！」

「おおつ、優子だ」

「え！？ 優子さんって、あんなふうなの？」

「……本人には内緒な？ 全身の関節壊されちゃうから」

以前一真は優子の家での姿をバラしかけて、全身の関節を壊される寸前にされた事があった。

それを言ったら、秀吉もそうなのだが……。

「な、なによアンタ！」

「話しかけないで！ ブタ臭いわ！！」

「おーおー、やれやれ、もっとやれ。優子はもっと高飛車にやるぞ？」

「すごく楽しそうだね」

「どうやらこいつ、普段木下優子に痛い目あわされてるクチらしいな」

にやにやと笑いを抑えきれない顔で、こっそりと囁し立てる一真。

それを見て、何やら妙な事に感じた雄二と、複雑そうにそれを見る明久。

「あんだ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数良いからって、良い気になるんじゃないわよ！ 何の用よ！」

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 増してブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ！」

「なっ！ 言うに欠いて、私達にはFクラスがお似合いですって！」

!？」

「おおつ、良い具合に冷静さを失ってるな。流石は優子だ」

「いや、あれ秀吉だよ？　というか小山さんの中では、Fクラス」
豚小屋みただね？」

「否定はできないがな」

楽しそうにそれを見る一真、少々呆れたように一真にツッコミを入れる明久。

雄二や祐輝も、それを苦笑しながら見つめる。

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。ちよつと試召戦争の準備もしている様だし、覚悟しておきなさい。近いうちに、私達が薄汚いブタの貴女達を始末してあげるから！」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はCクラスの教室を出ていく。それと同時に、Cクラスから小山代表のヒステリックな声が響き渡る。

「これで良かったかのう？」

「ああ、本当に優子かと思ったくらいだ……本人には内緒な？」

「わかつておる。こんな事が姉上にはれたら、ワシも生きた心地がせんわい」

「だったらあそこまでやるなよ……まあ楽しませてもらったから良いけど」

2人とも、どこかすつきりした顔だった。

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！　Aクラス戦の準備を始

めるわよ！！」

「上手くいったな。流石は根本の彼女、ヒステリックな事で」

「ある意味お似合いかもね」

「ああ。性質が悪い者同士、嫌な組み合わせではあるがな」

明久、秀吉、一真、当麻、祐輝、はうんうんと、寸分変わらず頷いた。
6人は一路、Fクラスへ。

「さて、副司令は秀吉に任せていいか？ 俺は回復テストを受けた
後で、先生を呼ばないといけないから」

「うむっ、任せるのじゃ。呼ぶのは“木村先生”かの？」

「ああ」

そして、BクラスVS Fクラス戦、再開

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！！」

秀吉の指示が飛ぶ中での、右側と左側の扉でぶつかりあうBクラス
教室攻略戦。

代表の指示は、『教室内に敵を閉じ込める』であり、戦況的には順
調。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

始まってから数時間、事は順調に進んでいるが、ここにきて異変が
起こっていた。

「……………」

本来秀吉より先に指揮を執る筈の瑞希が、一向に何かしようとしな
い。
それが大きく響き、戦線は危うかった。

「すまん、遅くなった！ 状況を説明してくれ」

そこへ一真達が、木村教諭を伴い戦線へと復帰。
明久が状況説明を行った後に、秀吉から指揮権を譲り受ける。

「よし、秀吉と明久、姫路はこつちへ！ 明久と秀吉は、木村先生
を拉致されない様ガードしろ！ 当麻祐輝は前線突入！」

「うん！」

「承知した！」

「了解だニヤー」

物理の木村教諭のフィールド内で指揮をとり、Fクラス勢は冷静さ
を取り戻し始めた。

昨日の事で、物理が一真の最大武器だと勘違いしている以上、そう
簡単には手出しができないと見越してである。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

「ちっ……明久、“あれ”を使え！」

「わかった！」

一真の指示を受け、明久は古典の竹中教諭に駆け寄り耳打ち

「……ツラ、ずれてますよ？」

「っ！！ 少々席をはずします！」

「よし、今のうちに体勢を立て直すぞ!！」

「すまんが戦線離脱だニヤー」

「祐輝!当麻のカバー!」

文系相手では一真もリーチで分が悪く、指揮する側に回るしかない。その上、主力である瑞希の行動がおかしければ、戦況的にも危うい。

「姫路さん、一体どうしたの!?!」

「そ、その、なんでもないです」

明久が様子のおかしい瑞希に駆け寄った。

だが、それでも時は待ってはくれず、無情に戦況は変化していく。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました!」

「数学教師はどうした!」

「Bクラス内に拉致された模様!」

「祐輝!こっちは任せろ。」

「うん。分かった一真!」

Bクラスには文系が多い為、状況的にも不利となった。

「一真、あれを使うべきじゃろうか!?!」

「それはまだダメだ。姫路、頼む!」

「はっはいっ!」

瑞希がようやく動き、一步前に……

「あっ……!」

動こうとしたが、急に動きを止めて俯く。

明久はふと、瑞希の視線を追っていき……根本の手にある封筒に目を付けた。

「あれは……！」

「どうした、明久？」

秀吉と一真と祐輝もその視線を追い、根元の手握られている封筒に気がついた。

それを見て様子がおかしくなった事と、怯えたまま明久を見つめる瑞希の姿を見て、3人にはある程度の予測がついた。

(おそらく、明久宛のラブレターと言った処じゃろうな)

(ああ……あのクソ野郎、だからあんな協定を持ちかけやがったな。昨日の罠といい、やってくれる)

(ひきょうだな)

協定の内容自体は、瑞希が居るからこそFクラスにとって有利に働く。

だが動けなければ、Bクラスにとって圧倒的に有利に働く条件。

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

明久がなだめるように瑞希を戦線から外そうと説得。

その間秀吉と一真は頷きあい、一真と祐輝は明久のもとへと駆けだす。

「明久、行くぞ」

「うん！」

「僕は当麻に連絡する！」

「指揮はワシに任せるのじゃ、頼むぞ明久、祐輝！」

「あ……！」

明久と一真と祐輝は背を向けて、教室へと駆けだす。
そして……

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「へえっ、お前から皮肉聞くななんてな……協力するぜ？ 相棒」

「ああ、頼むよ。相棒」

「殺すニヤー」

「怒りがもう我慢できない」

一真が拳を差し出すと、明久もそれに合わせ拳を差し出し、打ち合う。それに祐輝と当麻が加わり

そして……。

「……あの野郎、ぶち殺す！」

根本恭二は気づかない。とある3人を本気にしてしまったことを

第10話 三神

第10話

三神

「雄二！」

「うん？ 明久に一真に当麻に祐輝か。回復試験ならさっさと席に着け」

「話がある」

「……とりあえず聞こうか」

Fクラス教室にて。

回復試験を受けている中で、ノートを広げて戦力分布を書き記す雄二。

突然戻ってきた四人に、いぶかしげに顔を向ける。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があつたんだ？」

「明久、それじゃ誤解されるだろ。つまりだな雄二、ちょっとあのクソヤローにやってみたい面白い罰を思いついたんだ。だから根本の服をはぎ取って、捨てる必要がある。そう明久は言いたかつたんだ」

「流石一真フオローが早いニヤー」

「明久が変態になったかと」

「面白い罰？ ……どんなだ？」

一真がひそひそと小声で雄二に説明。

話し終わつた途端、雄二はそれはもう良い笑顔で頷いた。

「よし、良いだろう。良い余興になりそうだ」

「そうか……じゃあそれともう一つ、理由は言えないが姫路を前線から外してもらえないか？」

「っ！ ……理由を言えない事は置いておくとしても、どうしてもか？」

「うん」

「いえないニヤー」

「絶対ね」

一真や明久、祐輝、当麻とて、無茶を行っている事は理解していた。瑞希はFクラスの最重要戦力であり、彼女が居るからこそその作戦でここまで来た。

だからこそ、それが原因で負ける事も十分あり得る話で、その責任を問われるのは代表である雄二。

普通、こんな頼みを受けられる訳などない。

「……条件がある」

「何だ？」

「明久、一真、祐輝、当麻、お前達が姫路の担う予定だった役割を果たせ。どうやっても良いから、必ず成功させる」

四人は互いに顔を向け合い、頷き合った。

「わかった。絶対に成功させて見せる！」

「俺もだ。その役割はなんだ？」

「良い返事だ。仕事は簡単だ、根本に攻撃をしかける」

「皆のフォローは？」

「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

今現在、Bクラスの出入り口はどちらもが入り乱れての、乱戦状態。そこを突破してのBクラスの広い教室の奥、そこに根本が居る。

「そつだ！ 一真の……」

「無理だ。俺もあの人数でしかも腕輪はAのときにしないと」

「あつ……そつか。じゃあ、どうすれば？」

「明久、お前は確かに点数は低いが、一真がお前を相棒と認めているように、俺もお前だけにあるムツリーニや秀吉、一真の様な秀でている部分を信じている」

「じゃあ、俺たちは戦場を引つ掻き回すかニヤー」

「行くつ。当麻」

そついうと、雄二は立ち上がり教室の外へ。

「どこに？」

「Dクラスだ。例の指示を出してくる」

「僕にしか、出来ない……あっ！」

明久が、ふと或る事を思い出した。
観察処分者である事の利点と、ある配置について。

「何か、策があつたのか？」

「うん！ 一真達は先に戻って指揮を頼む！」

「……わかった。しっかりやれよ？」

「うん！」

作戦開始、3分前

「点数が危なくなつたら下がれ！」

再び秀吉から指揮権を受け取り、指揮官として指示を飛ばす一真。
その立ち位置は物理教師のフィールド内。

「怯むな！ ここをしのぎ切れれば勝てるんだ！！！」

「一真、きつい！」

「こつちもだにやー」

「お前ら！本気でやってもいいぞ」

「よしきたああああ」

ドオン！ ドオン！

Dクラスの教室へと、明久が仲間数名と英語の遠藤教諭を連れて行ってから聞こえる轟音。

それが鳴り響く中で、一真は指揮官として奮起を続ける。

「一真、祐輝、当麻！」

「雄二！ それに、近衛隊！」

代表の雄二をはじめ、近衛部隊が合流。

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？ 神竜達はそろそろギブで、頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？」

作戦決行が待ち遠しくてたまらない、そう思うには十分という程根本を睨みつける一真ら三人。
秀吉も同様で、姫路を汚い手で脅す方法が使われた以上、何としても勝ちたいと思っている。

ドオンツ！ ドオンツ！

「お前ら相手に姫路を頼る必要なんてないさ。それに神竜も、指揮に専念してさえいれば十分だ」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお……さっきからドンドンと、壁がうるせえな」

「人望ないな。余所のクラスから嫌がらせなんて」

音が大きくなっていき、時間もそろそろ作戦決行時間。

雄二に視線を向け、頷くのを確認すると一真達はDクラスへと歩を進め始める。

「何だ、神竜一真、破神当麻、大神祐輝ともあろうお方が脱走かよ

「？」

「わざわざ雑兵どもに構ってたら、疲れるだけだ」

「ゴミの分際で余裕ぶっこいてんじゃねえ！ まあ負ける瞬間を見ないだけ、ラッキーだろうがよ」

ゲラゲラと笑う根元に一発ぶち込みたいと思う一真だが、一先ずは自重。

一旦Bクラス前から離れ、Dクラスへ。

それを確認した後、雄二は号令をあげた

「……体勢を立て直す！ いったん下がるぞ！」

「どうした、散々フカしておきながら逃げるのか！」

一真達は木村教諭を伴い、Dクラスの戸を開く。

「だああああああっしやあああああああ！！！！」

ドゴオっ！！！！！！

「ンなっ！！」

と同時に一真の目に入ったのは、明久の召喚獣がDとBの教室の壁をぶち抜く光景。

次には、根本の驚いた声。

現在向こうの戦力の大半は、雄二率いるFクラス本隊を追って、教室から出払っている。

その為、代表の防備は薄い。

「くたばれ、根本恭二イー！」

明久をはじめ、美波達Fクラス遊撃隊は根元を打ち取るべく、駆け出す。

だが近衛部隊に阻まれ、足をとめた。

「は、ははっ！ 驚かせやがって！ 残念だったな！ お前らの奇襲は失敗だ！」

「下がってる！ こいつらは俺が片付ける」

そこへ割り込んできたのは、壊された壁から入ってきた木村教諭を伴う一真。

明久達は先程壁を破壊する為に立ち合わせた遠藤先生を伴い、一真達から離れる。

「なんだ？ おまえ1人で近衛部隊とやりあう気か？」

「ああ。Fクラス神竜一真、Bクラス近衛部隊全員に物理勝負を申し込む。サモン！」

一真の掛け声と同時に現れる召喚獣。

その召喚獣の腕につけられている腕輪を見て、近衛部隊は驚くも…

「たかが太刀で、これだけの人数相手に勝てるか！」

「たかが？ ……その言葉、後悔させてやる！！」

『Fクラス 神竜一真 物理598点』

VS

『Bクラス 近衛部隊 物理平均198点』

「点数は関係ねえ、近衛全員で神竜を打ち取れ！」

「「「「「おおおーっ！」「」「」」」」

一真の召喚獣が太刀を構え、振る。近衛部隊の召喚獣ではなく、その陣形のちょうど中心に。

「はっ！ どこを切つてやがる!？」

「……………桜炎双暗流”桜、三式、満開！そして、“空間爆発！”」

そういつた途端、一真の召喚獣の腕輪が輝く。

それと同時に……

「え?」

切った部分が、敵召喚獣全員を巻き込む爆発を巻き起こす。

所々で召喚獣の悲鳴が響いては、戦闘不能となり消え去っていった。

一真の召喚獣が持つ理系の腕輪の特殊能力その一“爆発”

切った部分を起点とし、半径2メートルの爆発を引き起こす能力。

その破壊力はBクラスで防げる訳もなく、爆煙が晴れる頃には近衛の召喚獣は影も形もなくなっていた。

「うっ、ウソだろ!？ 近衛部隊が、たった一撃で……………?」

「ゴミと言われた分、利子付けて返してやる……………覚悟しろ、根本恭二」

「うっ、うわああっ！」

ダンっ！ ダンっ！

エアコンが停止した故に、涼を求める為に開け放たれた窓。そこから2人の人影が飛び込み、逃げようとした根本の前へと立ちはだかる。

「え？」

入ってきた人影は、ムツツリーニと体育の教師。

屋上からロープを伝って侵入してきたムツツリーニは、根本恭二へと歩を進める。

「悪いが、ここは貰うぜムツツリーニ？」

「すまないがこいつには」

「格の違いを見せないとニヤー」

「……………（コクリ）」

近衛部隊は全員が沈黙、ムツツリーニが現れ完璧に逃げ場を失った。

「Fクラス神竜一真、Bクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」

「Fクラス破神当麻、Bクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」

「Fクラス大神祐輝、Bクラス根本恭二に物理勝負を申し込む」

『Fクラス 破神当麻 物理529点』

『Fクラス 神竜一真 物理693点』

『Fクラス 大神祐輝 物理438点』

V S

『Bクラス 根本恭二 物理203点』

「俺達に狙われた時点で、この運命は既に決まっていたんだ」

「守り神” 大神祐輝、“スターダストスラッシャー!”」
“破壊神” 破神当麻、“バースト”」

そう言つて、祐輝の翼から、8本のレーザーが、当麻の投げワイヤーナイフが一本一本爆発する。

「“死神” 神竜一真、桜炎双闇流、闇、二式、暗閃、“人炎爆発”」

今言葉によつて、根元の召喚獣は、内部から爆発した。

「お前の間違いはただ一つ。俺たちを…」

「“本気にさせたことだ!”」

一真がの召喚獣が太刀をゆつくりと下ろし、そのまま解除されたフィールドと共に消えていった。

「すごいよ! 一真たちにあんな火力が加わるんなら、もう天下無敵じゃない?」

「精密攻撃と爆発に、レーザー、内部爆発……考えられる限りじゃ、最恐最悪の組み合わせね」

「ああつ。危ない物に危ない物をだな」

「おいコラ! 明久以外は罵倒が混じってるじゃねえか!」

「最悪のほめ言葉だニヤー!」

「もはや褒められてないよ!」

今ここに、Bクラス戦はFクラスの勝利をもつて、終結した。

第11話 終了のBクラスそして…（前書き）

問題

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え

『B-E-N-Z-E-N』

教師のコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように

神竜一真、破神当麻の答え

『祐輝任せた（ニヤァ）』

教師のコメント

君も後で職員室に来るよつに。

第11話 終了のBクラスそして…

第11話

終了のBクラスそして…

終戦後のBクラスにて。

「明久よ、随分と思いつた行動に出たのう」

「うう……痛いよう、痛いよう……」

「大丈夫か？」

「にはははははははHっは」

「当麻笑いすぎ」

痛みのフィードバックで、両手を抑えて呻いている明久。

召喚獣でやったとは言え、鉄筋コンクリートを壊したフィードバックは、相当なもの。

「ま、でもお前らしい作戦だな」

「で、でしょ？ もっと褒めても良いと思つよ？」

「後の事を考えず自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠まわしにバカって言つてない？」

「そんなことないよ、明久は結構がんばった」

「おかげで俺達が攻撃できたニャー」

明久の作戦は当然問題にならない訳もなく、放課後は職員室で過ごす事が決定。

初犯でなければ、留年や退学も大いにありうる事である。

「ま、それが明久の強みだからな」

そこへ雄二が歩み寄って、明久の肩をバンバンと叩く。

明久の方は、バカが強みと言われ多少ショックを受けていたが……。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。な、負け組代表？」

「では不貞腐れたクソヤロー君、覚悟は良いかね？」

「人をはめようと脅した罰だ（にゃー）！！」「」

「……」

雄二と一真達の視線の先には、先ほどまでの強気がウソの様に大人しくなった根元が床に座り込んでいる。

それを見る一真は、実に楽しそうだった。当麻と祐輝は、一真を心配そうに見ていた。

「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵な卓袱台をプレ

ゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に対して、周囲が騒ぎ始める。
Fクラスは当然として、敵側の面々も。

「落ち着け皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここが
ゴールじゃない」

「ここはあくまで通過点でしかない……そういう事だろ？ 代表」

「ああ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうと思っ
ている」

「本当ならどつちもやってやりたいくらいなんだがニヤー」

一真と当麻の補足も合わさり、Fクラスの面々は雄二の性格を理解
し始め、納得した表情となった。

Bクラスも3ヶ月間ボロボロの教室に縛られる可能性からの脱却と
もあり、雄二に視線が集まる。

「……条件はなんだ？」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざ
わりだったんだよな」

と、普通に聞けば雄二の言葉は酷い言い様だが、彼はそれだけの事
をやってきた。

その証拠にFクラスどころか、Bクラスの面々も誰1人としてフォ
ローしようとしてない。

「そこで、取引だ。Aクラスに行って、試召戦争の準備が出来てる
と宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやって

も良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

訝しげに尋ねる根本に、一真は冷たく言い放つ。

「ああ……だが残念な事に、お前にはさつき最悪の罵倒をされたんで、それ相応の罰を受けてもらう」

「そういう事だから、Bクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」

「根本がこれ着ないと、この教室とばいばいだニヤァ」

「残念だったねBクラスのみんな」

そう言つて雄二が取り出したのは、秀吉の変装の為に用意しておいた女子制服。

雄二の方も、どこか楽しそうにしていた。

「ば、バカな事を言うな！ この俺が、そんなふざけた事を！」

「Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！」

「任せて！ 必ずやらせるから！」

「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」

懐から木刀を取り出そうとした一真だが、Bクラス面々の主張に手を止めた。

慌てふためいていた根本だが、その面々の同調にさらに慌てふためき始める。

「やっぱり随分と評判が悪いな、お前は」

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、よるな変態ぐふうっ！！」

逃げようとした根本だが、Bクラスの面々が取り押さえ腹部に一撃。

「とりあえず、黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

「手間が省けた。明久、早速着付けに入ろう」

変わり身の早さに、雄二もあっけにとられた。

が、すぐに気を取り直した一真は、明久とで早速着付けに移り始める。

「……男の服を脱がすって、思った以上に苦痛だな」

「うん……けど、これも目的のため」

2人してゲンナリとしつつ、服を脱がしていく。

まあ男が男の服を、それもクズ相手なのだから無理もない。

「うっ、うっ……」

「ん？ 明久、ちょっと離れるニヤ」

「うん」

うめき声を上げる根本から明久を離し、エアガンを取り出す。

「寝てる」

「がふうっ!!」

一発で、急所を突いた。

根本の服をすべて脱がしたうえで、一真と明久は女子制服をあてがう。

「うーん……これどうやって着せるんだろ？」

「その前に、順序はどうなんだ？」

だが男子制服と勝手も違う為、全然わからず難航し始める。

「私がやってあげるよ」

「そう？　じゃあ折角だし、可愛くしてあげて」

Bの女子相手に、明久はそう提案するも……。

「それは無理、土台が腐ってるから」

だが否定する様に手を振って、笑顔でそう言い放った。

「酷い言い様だな……それじゃ明久、さっさと根本の制服捨ててから手を消毒しよう」

「一真、そっちの方が酷いよ……じゃあ、よろしくね」

「そうだ、これ消毒液だ。着替えさせたら使うといい」

「ありがとう」

消毒液を渡した後、2人してBクラスを後に。

それから明久が根元の制服を探り、ある封筒を取り出した。

「あつたあつた」

嬉しそうに封筒をポケットに入れて、用がすんだ制服は近くにあったゴミ箱へ。

彼は家まで女子制服の着心地を楽しむ事になるだろう。

そして2人は、手の洗浄および消毒を行った後Fクラスへ。

ヒューパタ

「あっおい当麻」

「きつ、貴様は神竜！ よくも俺にこんな事を！！」

第一印象を言い合っていると根本が気付いて突っかかるうとするが、付き添い2名に取り押さえられる。

一真と当麻は懐にやった手を戻し、笑顔で御苦労さまと労う。

「すまない神竜、これから撮影会があるから急がないといけないんだ」

「きつ聞いてないぞ！？」

「それはそれは。写真が出来たら送ってくれ、2度と舐めたマネをしない様しつかり管理するから」

「俺にもニヤー」

付き添いの2人が笑顔で頷く傍らで、根元は忌々しげに神竜と破神を睨みつける。

「神竜一真、破神当麻この恨みは必ず返してやる！！」

「無駄口をたたくな！！ ほら、キリキリ歩け！」

「くっ……覚えていろ、絶対にこの事を後悔させてやる！！」

と、見事にお決まりの台詞を残して、去って行った。

「さて、帰るか？」

「うむっ……ところで一真よ、しばらく家に泊めてもらえんかの？」

「え？ 何で？」

「……今朝の事じゃ。あれが姉上にばれたら、ワシは車椅子か寝た

「いつ、いきなり声をかけるなよ優子……びっ、ビックリした」
「ほんとに死ぬとこだったニヤー」
「？ なんだかよくわからないけど、ごめん」

その様子を見て、まだCクラスからの宣戦布告はないらしい。
そう安著し、深呼吸。

「いや、こっちも悪かった」

「そう。それじゃ一緒に帰りましょ？」

「あれ？ 一緒に？」

「あんだ達を3人で居ると誤解されるから。5人一緒の方がわかりやすいのよ」

一真は優子より、秀吉の方と仲が良い。当麻は別
実は噂の大半は秀吉を優子と誤認してのものだった。

「お前も大変だな」

「全部アンタ達の所為でしょ！」

「その言い分はあまりにも理不尽じゃ姉上」

多少機嫌が悪そうな優子を伴い、靴箱へ。

「で、Bクラス戦はどうだったの？」

「勝ったけど、どうかしたか？」

「……設備の入れ替えは？」

「さあ？」

「代表の一存だニヤー」

優子の質問を、のらりくらりとかわす一真と当麻。

「……もしかして坂本君は、Aクラスが狙いなのかしら？」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。でも戦争は勝算があるからこそ仕掛けるものだろ？」

「そうだけど……じゃあ、大丈夫かしらね？」

Aクラス代表にして学年首席、霧島翔子。

彼女に太刀打ちできるのは、Fクラスにおいては姫路瑞樹と一真と祐輝。

単科目で言えば、保健体育でムツツリー二と当麻と言ったところ。

しかしそれ以前に、Aクラスの戦力は当然Bクラス以上。

ハッキリ言って、雲の上の存在。

「まあ出来れば、静かにして貰いたいわね。Cクラスも殺気立ってる様だし」

「……そうだな。そうしたいところだな」

「……そうじゃの」

「……まあこわいにゃー」

「「？」」

Cクラスという単語を聞いた時点で、3人は狼狽し始めた。が、何の事かわからず、その場は適当にごまかされる。

「そうじゃ姉上、しばらくじゃが友人の家に泊まる事にしたぞい」

「そう？ ……なんか怪しいわね？」

「俺も泊まるニャー」

「へー、そうなの」

その次の日。

「……優子、どういふ事が理由を説明して」

「そっそれは、アタシにもどいふ事がさっぱり……まさか！」

「そっだ！優子あの感じだと」

Ｃクラスからの宣戦布告で、優子と朱里はその理由を知ることになった。

その日から一真、当麻、秀吉は背筋に殺気を感じるようになった。

第11話 終了のBクラスそして…（後書き）

パソコンと自身の事情により、週に一度の更新になると思います。

今日の質問

みなさんの、好きな曲はなんですか？

第12話 決戦ナンバーA（前書き）

問題

ゲームセンターにある、設置型サッカーゲーム。WCCFの正式名称を答えなさい

神竜一真 破神当麻 吉井明久 坂本雄二 大神祐輝の答え

『ワールドクラブチャンピオンフットボール』

教師のコメント

まさか、あなた達がまじめに答えるとは！！まったくいつも答えればいいのに……

姫路瑞希の答え

『この問題、何の教科の問題ですか？』

教師のコメント

すいません！あの5人にまじめに答えさせる問題だったので、何の教科でもありません。

第12話 決戦ナンバーA

第12話

決戦ナンバーA

補給試験も終わり、本日いよいよAクラスへの宣戦布告を控えた日。秀吉と当麻は姉と幼馴染の脅威から逃れるべく、一真の家で命の保護と勉強会。

「すまぬのう……」

「悪いニヤー」

「いや……考えてみたら、お前らの姿がないのは不安を煽られるから」

彼らはクラスを救うある作戦の副作用に怯えつつ、日々を過ごしていた。

「さて、今日はいよいよAクラスへの宣戦布告だ。あの卓袱台と腐った畳、座布団とお別れか」

「もしくは、敗北してあれよりもひどくなるか……じゃの？」

「一発博打だにゃー」

「オー怖い」

試験召喚戦争は、下位勢力が敗北した場合は設備を1ランク下げられる。

Fクラスが最低であるから、負けた場合は具体例はない。

「まあ泣いても笑っても、今日で運命はきまるんだ。頑張ろうぜ？」
「そうじゃの……むっ、一真よ。あれは明久と祐輝ではないか？」

秀吉の視線の先には、交差点に差し掛かっている明久と祐輝、実はこの二人家が近い。

「ん？ おーい明久ー！祐輝ー！」

「あっ、おはよう一真、秀吉、当麻」

「おはよう3人とも」

ドンっ！

「わっ！」

そこで、明久は誰かとぶつかり尻もちをついた。

「あいたたた……ごっごめんなさい」

「あっ、こっこちらこそ……っ！ 君は、Fクラスの吉井君！？」

明久がぶつかった人物は、明久に気がつく顔と顔を赤らめた。

その熱のこもった視線を向けられた明久は、背に妙な寒気が走る。

「なんだ、どうした？」

「どうしたのじゃ？」

「貴様、Fクラスの神竜一真！？」

一真と秀吉が駆け寄ると、久保は一真の姿を見るや否や、敵意をこめて睨みつけた。当麻と祐輝はあっけに取られている

「ん？ ああ、確かAクラスの」

「いかにも、学年次席の久保利光だ」

指でメガネを直し、キリツとした佇まいを見せる久保利光。

Aクラス所属、学年次席にして同性愛趣味を持ち、吉井明久（ ）に好意を抱く男。

その目は、明久に熱烈な視線を向けている。

「ほら明久、立てるか？」

「あつ、うん。ありがとう」

「なっ！？ ……なんて羨ましい」

「何ポーっとしてんだ？ あんたこの時間、いつも教室で予習してんだろ？現学年次席。」

「っ！ ……そうだったな。では、失礼する」

名残惜しそうに明久を見て、その次に一真を射殺す様な視線で見る久保氏

「…………おのれ神竜一真！」

と、密かに呪詛をぶつけて、去って行った。

彼の姿が見えなくなるや否や、明久は急にほっと一息をついた。

「どうした、明久？」

「気の所為か、久保君に会ってからの妙な寒気が、治まった気がするんだけど……？」

「それはお前が正常である証拠だ」

「うむつ、むしろ喜ばしい事なのじゃ。気にするでないぞい」

「ははあれはやばいね」

「末期症状ニヤー」

秀吉達がうんうんと頷くのをみて、首を傾げる明久だった。

その様子を見て、一真は言い様のない感情が腹の中で渦巻くを感じた。当麻と祐輝が心配しているのを見てその感情も消えうせたが、

「それよりも一真よ。やはり久保には嫌われておるのう」

「だろうな。相棒と宣言してるから、面白くないだろうことは理解できるけど」

「それに加えて、校内ではお主と明久の絡み合う本が、ベストセラ―として出回っておる始末じゃ」

“バカとマフィアとバラの世界”（明久×一真 本人許諾なし）

文月学園の腐女子の間では、ダントツのベストセラ―として人気の一品である。

「……僕と、一真が？」

「ちなみに2番目が明久と雄二で、3番目は一真と当麻その後に一真と雄二、当麻に大輝と続くそうじゃ」

「おえつ……何であるゴリラ野郎が出て、お前が出てこないんだ？
そして何故俺こんなに出る回数多い それにどうしてお前がそんな事知ってる？」

「ワシに聞かれても困るぞい。演劇部で女子部員がその手の話をしておるのを聞いたのじゃ」

朝から知りたくない世界を知ってしまい、吐き気が治まらなくなった一真達だった。

そして、Fクラス教室にて。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している」

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「でもまだ早いぞ? そういうのは、終わってから言うもんだ」

「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ!!」

雄二の宣言で、Fクラス全員が歓声を上げた。

「おおーっ!」

「そうだーっ!」

「勉強だけじゃないんだーっ!」

Dクラス、Bクラス相手に勝利した自信が、彼らを奮起させていた。全ては雄二のシナリオ通りに事が進んでいる事も、それを大いに助長させている。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」

主要メンバーは既に耳にしており驚きはしなかったが、他はざわめき始めた。

「どういう事だ？」

「誰と誰が一騎打ちするんだ？」

「それで本当に勝てるのか？」

当然、いきなりこんなことを言われれば、動揺するのも無理もない。だが雄二はそれに構わず、机をたたいて皆を鎮める。

「落ち着いてくれ、それを今から説明する。やるのは当然、俺と翔子だ」

「バカの雄二が勝てる訳ない……」

ヒュッ！（カッターが投げられた音）

カシンッ！（カッターがエアガンとナイフに弾かれた音）

トンッ、カラカラ！（カッターが畳に落ちる音）

「一真、当麻、祐輝、邪魔をするな」

「明久の言い分も最もだろ。カッターを投げる暇があったらさっさと説明しろ」

雄二の視線の先には、エアガンを構えた一真と祐輝ナイフを構えた当麻。

その銃口は、カッターの射線に向いていた。

「……まあ、その通りだ。まともにより合えば勝ち目はないかもしれないが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？ まともにより合えば、俺たちに勝ち目はなかった。今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝

ちは揺るがない……俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる！」

「「「おおおー！ー！ー！」」」

信頼の証として、全員が雄たけびを上げた。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？ 何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は小学生程度、方式は100点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

試験召喚戦争は、テストの点で雌雄を決する物である。

だからこそ、テストの点を用いた勝負であれば、方法次第では採用される。

「でも同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ 幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「じゃあ、この作戦のからくりは一体何なんだ？ もったいぶつてないで教えるよ」

「それもそうだな。それはある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

確実に間違える問題。

それを聞いて、全員が静まった。

「その問題は……“大化の改新”！」

「大化の改新？ 誰が何をやったみたいなお問題、小学生でやったか？」

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純に年号を問う問題だ、その問題が出たら俺達の勝ちだ」

「大化の改新……蒸しご飯だから645年だニヤー」

「ああそうだ。これは当麻でも間違えないどころか明久でも間違えない。」

ちなみに神竜一真は、日本史を大得意科目の科目の1つとしていた。ちなみに明久は、それを聞いて顔をそむけたのは別の話。

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！ これは確実だ、だからその問題が出たら俺達の勝ちだ！ はれてこの教室とおさらばだって寸法だ！」

そこまで断言するあたり、信用する価値はある。

そう結論付けるには、十分な自信を持つ雄二の姿だった。

「あの、坂本君？」

「ん？ なんだ、姫路」

「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

それを聞いて、明久は訝しげに雄二を見た。

姫路瑞希にも好かれていて（明久視点）、学年首席の霧島翔子とも良い関係かもしれない。

それを彼が許せるかは……

「ああ。俺と翔子は“幼馴染”だ」

答えは“N o”である。

「総員、狙えええ!!」

その言葉に明久は激高し、号令を上げた。

それを受けてクラスメイト達は、アサルトライフルやマシンガン、ゴムナイフを雄二に向けて構え始める。

「なっ!? 何故明久の号令で急に構える!？」

「黙れ男の敵! Aクラスの前に貴様を殺す!!」

「俺が何をしたと!？」

「待て! それ全部俺と当麻のコレクションじゃねえか! いつの間にか抜き取った!？」

一真と当麻がいつも持ち歩いてるボストンバッグとベルトが、いつの間にか空となっていた。

「ごめん一真、当麻、でもあいつを抹殺するにはこれが良いんだ!

「だったら弾代含めてレンタル料1人1000円出せ!」

という言葉に、全員が一真と当麻に向って千円札を手渡す。

(明久を除いて)人数分ある事を確認したら、ゆっくりと自分の席に座った。

「一真、当麻! てめえ俺を助ける為に止めたんじゃないのか!？」

「これをコレクションなしでどう止めるってんだよ? 流石にけりじやこの数はむりがあるぞ?」

「この役立たずが!」

「良いかみんな、射撃というのはだな?」

「何射撃の講義始めやがんだ!? しかもいつの間にお前まで構えやがった!!!?」

いつの間にか木刀を持ち、それを雄二に向けて構える一真。その手をそのままに、射撃についての講義を始めた。

「そつそれより、一真と当麻だつて木下優子と水野朱里と幼馴染だろ!?」

「ちよつ、それは今関係ないだろ(にゃー)!」

明久を除く級友が彼にも殺意を向け、半分が一真と当麻と祐輝にも銃を構えた。

「ちよつ、ちよつと待て! 優子とはもう何でもないぞ!」

「俺は朱里をそんな風に見たこと無いにゃー」

「もうつて、まさか一真、木下優子さんといい関係だったとか!」

「それは違うのじゃ明久。一真は姉上にフラれておるのじゃから、そんな事ありえん当麻もそんな関係ではないのじゃ」

時が止まった。

「ひつ、秀吉? 一真、今にも崩れそうなんだけど……?」

「え? ……あつ、すつすまぬ……」

「秀吉…一真はデリケートなの忘れたかニャー?」

「一真!つやばい。一真の持ってきている布団に入れよう。」

古傷をえぐられ、その場にうずくまってしまう一真。

その姿を見て、原因を作った張本人は罪悪感を感じる。

「……まあ、その、なんだ……一真、すまなかった」

「……………昔だよ。気にするな……………つどうせ俺は、ごじょごじょ」
「そつか……………幼馴染だからって、それが良い関係であるとは限らないんだね」
「みんなきをつけるにゃー、一真は超デリケートだニャー」

その姿に何も言えなくなり、全員が銃を下した。

「あの、吉井君？」

「ん？ 何、姫路さん？」

「吉井君は、木下さんや水野さんや霧島さんが、好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし……………えっ、どうして姫路さんは僕に向かつて攻撃態勢を取るの！？ それと美波！、どうして君は僕に向かつてなんて危険な物を投げようとしてるの！？」

攻撃態勢を取る瑞希と、教卓を持ち上げて明久めがけて投げようとする美波。

その2人に問い詰められ、明久の命は風前のもしび。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃間違えてウソを教えたんだ」

「それが、大化の改新かの？」

「そうだ。アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！ そうしたら俺達の机は……………」

「……………システムデスクだ！……………」

その傍らでは、テンションは最高潮だった。

「今から宣戦布告に行くぞ、ムッツリーニと秀吉も用意しろ」

「っ！すまんがわしはかんべんしてくれんかのせめてもの侘びに一真をおこさないといかんのじゃ」

「俺も何とかしないとニヤァ」

「ふーン、じゃあ頼んだ」

明久、瑞希、美波、ムツツリーニ、祐輝を伴った雄二は、一路Aクラスへ。

「本当にすまんかった」

「いや、良い……もう吹っ切ってたはずなんだけどな」

「すまぬな……さて、雄二達は大丈夫じゃろうか？ 特に姫路が心配じゃ」

「ああっ、あの噂か？」

霧島翔子と水野朱里は、言いよって来る男性を軒並み断っている。

その事から、同性愛主義者という話が囁かれていると言う。

「所詮噂だろ？ 幾ら言いよって来る男を軒並み断ってるとは言え、安直過ぎる噂だと思うがな」

「それもそうじゃが、万が一という事もあり得るぞい」

「いや、万が一が一般的になってる方がおかしくないか？ 幾らこ

の学園は変人が多いとは言え」

「言われてみれば、そうじゃな」

その後、戻ってきた雄二達から勝負方式が伝えられた。

10時より始め、一騎打ち7回で4回勝った方の勝ち。

教科選択権は、Fクラス4回でAクラス3回。

Fクラス VS Aクラス

バカ対エリートの戦いが、今始まる。

第13話 最強のAクラスVS最弱のFクラス(前書き)

問題

『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希の答え

『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント

その通りです

神竜一真、破神当麻、大和大輝の答え

『魏、呉、蜀』

教師のコメント

先生も三国志は好きです

土屋康太の答え

『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

『香川、徳島、愛媛、高地』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

第13話 最強のAクラスVS最弱のFクラス

第13話

最強のAクラスVS最弱のFクラス

「改めてみると、すごいな」

「だよな」

「つまあ、これが俺らのものになるならいいんじゃないかニヤー」

巨大サイズのプラズマディスプレイ、人数分用意されたシステムデスクにリクライニングシート。

パソコンや個人用エアコンや冷蔵庫まであり、その中身も学園側で管理。

「しかも担任が美人で才女の高橋女史と来れば、破格もいい所だ」

「私の担任するクラスになりたかったのなら、振り分け試験を趣味で休まなければ良かったのです」

「ご最もで、まあこれからここは俺らのモンだが」

立ち会いとなるのは、Aクラス担任であり学年主任である、高橋女史本人。

「では、両名とも準備は良いですか？」

「ああ」

「……問題ない」

それぞれの代表が、決意表明。

「それでは、1人目の方、どうぞ」

「わしがいこう」

「アタシから行くよ」

Fクラスから真っ先に名乗り出たのは木下秀吉。対するAクラスはその幼馴染である木下優子。

「科目は何にします？」

「ちよつと待って」

「？ ……どつ、どうしたんだ、優子？」

「ちよつと話があるんだけど、良いかな？ 一真も」

「えっ！？ あつ、姉上？ せめて、この勝負が終わってからで構

わんかの？」

「じゃあ一真は後でいいわ。大丈夫よ、すぐ終わるから」

逃げようとした秀吉を取り押さえ、そのまま優子は教室の外へ連れ出す。

助けを求める秀吉に、一真は頭を下げた。

「全員秀吉に合掌……」

「アンタ達、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシがCクラスの人たちをブタ呼ばわりしてる事になってるのかなあ？」

「それは、姉上の本性をワシなりに推測して……あ、姉上！ ちがつ、その関節はそつちには曲がらなっ……！！！」

ガラガラガラ！

「秀吉、急用ができたから帰るってさっ」

「世間一般では、急用じゃなく救急と呼ぶんじゃないか？」

一真にとって、それは死刑宣告だった。

「……せめて、話し合う余地くらいは欲しいんだが？」

「なあに？」

「……いえ、何でもありません」

せめてもの抵抗だったが、優子の良い感じの笑顔に二の句を告げられなくなった。

ついでだがAクラスの面々に、過激派筆頭の意外な一面を垣間見た。

「で変わりを出して欲しいんだけど」

「いやうちの不戦敗でいい」

雄二も優子の恐ろしさにきずいたらしい

「ではまずAクラスが一勝」

Aクラスに一勝目がささげられる。

「そついえば当麻の声が聞こえないわね」

「一真もさつきから聞こえないんだけど」

優子と朱里が異変に気づいたらしい、祐輝が雄二にアイコンタクト

で何かを伝える。

「それはいええないな。Fクラスのためにも」

「ふーん、そうじゃあ次の人お願いできる？」

そういつて出てきたのは小さくてかわいいなぜか大人びた少女。

「うちもう出てきたか“柴崎彩夏”元2年学年次席」

「えっ雄二、二年の学年主席ってどういうこと？」

「あいつはとある事件で留年したのさ、さて明久逝って来い。」

雄二が明久を指名する。そして明久がうるたえるがすぐにかっこつけだしてやり取りがおこなわれる。

「ふっ雄二それは僕に本気を出せということなのかい」

「ああそのとうりだお前の本気を見せてやれ」

「ツままさか吉井君、君はもしや……」

彩夏がうるたえ始める

そして

「僕は実は左利きなんだ」

くしばらくお待ちください

「いたい美波、ただでさえフィードバックで痛んでるのにそれ以上痛めつけないで、ていうか雄二僕を信用してるんじゃないのか」

「信用？何それ食えんのか？」

「この野郎！」

Fクラス名物吉井明久と坂本雄二による公開漫才が行われた。

「あはは、吉井君君面白いね、一真君も面白いけど、いや彼の場合
はかっこいいかな？」

ピキッと空気の凍る気配、Fクラス全員が一真に対し攻撃姿勢をと
る。一真は一応Aクラスには見られてない

「やめろお前ら！今の一真に何かしたら死ぬぞ！」

雄二の声がかかり全員攻撃姿勢をやめた。と思われたが一部が攻撃
して、吹き飛ばされた。Aクラスは何をしているんだろうと恐れた

「では、3人目のかたどうぞ」

「……………（スック）」

「じゃあ、ボクが行こうかな？ 1年の終わりに転入してきた工藤
愛子です、よろしくね」

Fクラスからは、ムツツリーニ事土屋康太。

Aクラスからは、ショートカットのボーイッシュな女の子が出て来
た。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね。でも、ボク
だってかなり得意なんだよ？ ……キミと違って、実技だね」

その言葉に、Fクラスの面々は沸いた。

そのうち、明久も例外ではない。

「そのこのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？」

「是非ご教授を……」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんていらなのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「島田に姫路、って明久！」

明久蘇生中しばらくお待ちください

「っは！」

「セーフ！」

「それじゃあ一真君かな（ぼそ）」

試召戦争で精神的に死に追い込まれた人物は、おそらく後にも先にも明久だけだろう

「そろそろ召喚を開始してください」

「はい。サモンっと」

「……サモン」

DにBと、出番がなかった忍び装束に2本の小太刀を持つムツツリ
ー二の召喚獣。

そして愛子の召喚獣は、セーラー服に巨大な斧を持ち、その腕には腕輪も装備されていた。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

愛子の召喚獣が、腕輪を光らせて踏み込む。

斧が雷光を纏い、高得点で得たスピードで距離を詰め飛び上がった。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん」

「……………加速」

「え？」

突如ムツツリーニの召喚獣の姿が消え、相手の射程外に。
そして…………

「……………加速、終了」

ムツツリーニが呟いてから一呼吸置き、愛子の召喚獣が倒れた。

『Fクラス 土屋康太 保健体育572点』

VS

『Aクラス 工藤愛子 保健体育446点』

「そ、そんな……………！ この、ボクが……………！」

相当ショックを受け、愛子は床に膝をついた。

「これで2対1ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ！」

「それなら、僕が相手をしよう」

Fクラスからは姫路瑞希、Aクラスからは学年次席である久保利光。

「ここが一番の心配所だな」

「ああ……………事実上の、学年次席争いってところか」

振り分け試験でリタイアこそしたものの、そうでなければどちらが学年次席の座でもおかしくはない。それほど点数はほとんど同じだった。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

と進言したのは、久保利光。

総合科目は学年順位がそのまま影響する。

「ちょっと待った！ それは……」

「構いません！」

「姫路さん……」

「信じてやれよ明久、Fクラスの姫路瑞希をよ」

『Fクラス 姫路瑞希 総合科目4409点』

VS

『Aクラス 久保利光 総合科目3997点』

「ま、マジか!？」

「いつの間にこんな実力を!？」

「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……!」

至る所から驚きの声が上がった。

点数差400点オーバーなのだから、無理もない。

「ぐっ……! 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」

「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

瑞希が礼をした後に、下がる。

祐輝に背を軽く叩かれた明久は、一步前に。

「御苦労さま、姫路さん」

「……はい」

「……もしかして、杞憂？」

ただ1人、その光景を見て安心しつつ羨ましげに見ていた人が居た。

「これで2対2です。次の方の1人、どうぞ」

圧倒的勝利の上、敗北も殆ど運による物という結果。

Fクラスがここまでやるとは思っていなかったのか、高橋女史も若干焦りの表情を浮かべる。

「私が行きます」

そういつて出てきたのは、水野朱里ここでFクラスの秘策が適用される

「当麻頼む。」

雄二が呼びに行き耳につけていたイヤホンをはずす当麻。それを見て朱里が驚愕する。

「さっ坂本君まさかさつきからとうまが喋らなかつたのって」

「ああそうだ。ちなみに一真はそこでゲームしてる」

名前があるんだから！」

「はいはい、おら、さっさとやんぞこら！銀はがし！」

一真は心なしか言葉が乱暴になっている。明久は雄二に聞いた

「どうしたの一真？なんか言葉遣いが荒いような」

「あれはあいつが集中してんのさ、あいつは集中するとああなるんだ。近所の不良どもからは「集中モード」なんて呼ばれてる」

「教科は何にしますか？」

大半の生徒が物理で来ると思っているだろう。しかし、一真の得意なのは物理ではない。一真の本当に得意なのは

「日本史でお願いしますよ。高橋女子？くはハッハハハハあつはつはハはハア。」

「つは！あなたの得意科目は物理でしょ？嘗めてんの？」

「ちげえよ、俺の本当に得意な科目は“日本史だ”バーカあーはははははは！！！」

『日本史 Fクラス 神竜一真 995点』

VS

『日本史 Aクラス 山口怜奈 421点』

『はい？』

会場にいるほぼ全ての人間が疑問の声を発する。

「995！ありえん」

「何て点だ！」

と、頭をなでる。そうしているうちに怜奈は泣き止んだ。

「まったく大勢の前で泣くなよ、泣き虫」

「うっうるさいわね、目にゴミが入っただけよ」

「そういうことにしときますか」

そういつて一真は笑顔ではなれていった。そこにはぽかーんとした怜奈がいて

「やっぱりかっこいいな。一真は」

それは友達である、優子と愛子、それに彩夏以外には聞こえなかった。

そして先ほどの優子の言葉で一真は倒れ三途の川へ、それを見た明久が叫びながら蘇生させ、優子のへの視線が変わったのは別の話。

「最後の方、どうぞ」

「……はい」

「俺の出番だな」

最後は当然、互いのクラスの代表同士。

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。

少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ、高橋女史は教室を出ていく。そして、Aクラスの面々はどよめいた。

「上限ありだつて？」

「しかも小学生レベル、万点確定じゃないか」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

2人の代表は、一旦自分達の陣地へと戻る。

まず雄二に声をかけたのは、明久

「雄二、後は任せたよ」

「ああ、任された」

明久が差し出した拳と、雄二の拳が重なる。

次にムツツリーニが歩み寄り、ピースサインを雄二に向けた。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（ふっ）」

口の端を軽く上げた笑みを浮かべ、ゆっくりと戻っていく。

次は瑞希が歩み寄った。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ」

「はいっ！」

次に当麻が、雄二に向かって手を差し出す。

「絶対にかつニャー」

「ああ」

パンツと、手をぶつけた。

次に祐輝

「いつもみたいな奇跡、期待してるよ」

「任せとけ。」

そういうと祐輝は満足げに自分の席に戻っていった。

最後に一真が歩み寄る

「負けんなよ、雄二」

「ああ。一真、お前と明久と一緒に成した功績には、随分助けられた」

「なあに、俺がやりたいからやったまでだ……頼むぞ、代表」

そして、いつもの5人で拳をぶつけた

所変わって視聴覚室。

「では、最後の勝負、日本史テストを行います。制限時間は50分、満点は100点です」

その様子はAクラスの巨大プラズマディスプレイに映し出され、他の面々はそこで待機。

「不正行為などは即失格になります。良いですね？」

「……はい」

「わかつているさ」
「では、始めてください」

そして、問題は始まった。
Fクラスの面々は、ディスプレイに映し出される問題を凝視し始める。

勝利のカギを、懸命に探すために。

<<次の()に正しい年号を記入しなさい>>

()年 平城京に遷都

()年 平安京に遷都

()年 鎌倉幕府設立

()年 大化の改新

「あつた……あつたぞ！」

「じゃあ、ウチ等の卓袱台が……」

「うん！ 最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ！！」

「うおおおおおおお！！！！！！」

Fクラスの面々が、歓喜の雄たけびを上げた

「ん、何かが引つかからないか？みんな」

一真の声で全員が考える。

<日本史勝負 限定テスト 100点満点>

『Aクラス 霧島翔子 97点』

VS

『Fクラス 坂本雄二 53点』

Fクラスの卓袱台が、みかん箱になった

「総員、武器をとれ！ これよりあのゴリラ野郎を処刑するぞおお
おおおおおおおおおおおおおおお！！」

「作戦は殴りこみニヤー！あのゴリラを処刑するニヤー！！！！」

「さすがに僕も許せないさっきまでの感動のシーンを返せー！！！！」

「一真達に続け！ 期待と信頼を裏切ったあのバカ野郎に、僕たち
の怒り全てをぶつけてやるんだ！！」

「！！！！おおおおおおお！！！！！！」

Fクラスの面々は、怒りの雄たけびを上げ視聴覚室へと

先陣を切るのは神竜一真、続くは吉井明久、その後ろに破神当麻、
大神祐輝。

全員の手には神竜一真と破神当麻のコレクションが握られていた。

第13話 最強のAクラスVS最弱のFクラス(後書き)

次で、今週ラストです。(明日投稿)

第14話 終結俺たちの第一次試召戦争！！（前書き）

作者風邪をひきました。正直つらいです。

問題 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さんに大神君。優秀ですね

神竜一真 破神当麻の答え

『？孤独 ？処刑 ？剣 ？死 ？恐怖』

教師のコメント

君達の将来があらゆる意味で心配を通り越して不安です。

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

第14話 終結俺たちの第一次試召戦争！！

終結俺たちの第一次試召戦

争！！

「雄二、てめえゴラああ！！」

視聴覚室の扉が開かれ、Fクラスの武装集団が押し寄せる。

「4対3で、Aクラスの勝利です」

それに構う事なく、高橋女史はそう宣言。

そのそばでは、座りこむ雄二とその傍で雄二を見下ろす翔子。

「……雄二、私の勝ち」

「……殺せ」

「いい度胸だ、殺してやる！ 歯をくいしばれ！！」

「待て明久、その前に俺の剣の奥義の餌食にするべきだ！！」

「待つニャー。その前にナイフの的あてにするニャー！！」

「いや、マシンガンで蜂の巣だろう！！」

掴みかかろうとする明久を制し、両腕や肩、背にコレクションを重
装備した一真が木刀を雄二に突き付ける。そしてその後ろには、マ
シガンとナイフの祐輝と当麻

明久はそれを見て頷き、先程一真から渡されたガトリング砲を雄二

に突き付けた。

「吉井君、落ち着いてください!」

「一真も、落ち着きなさいよ!」

「当麻、落ち着いて!」

「大神も、話しなさい!」

瑞希が明久を、優子が一真を、当麻を朱里が、祐輝を怜奈が制し、雄二から引きはがそうとした。

「大体、53点って何!? 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数じゃ……」

「いかにも、俺の全力だ」

「『ゴリラ野郎!』!」

一真は更にトンファー（改造）を取り出し、雄二に突き付けた。祐輝と当麻に明久も続く

だがそれは、美波によって阻まれる。

「吉井、落ち着きなさい! アンタだったら、30点も取れないでしょうが!」

「当麻もだよ! あんたも日本駄目でしょ」

「それについては否定しない!」

明久の声と当麻の声が、寸分狂いなく合わさった。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ!」

「くっ、6人とも何故止めるんだ!? このゴリラには喉笛を引き裂くと言う体罰が必要なのに!」

「それって体罰じゃなく処刑です!」

「いや、全員でぼこ殴りにした後、日本刀で全員で切るんだ……！！」

「待ちなさい一真！ 前半はともかく、後半が明らかに処刑でしょ……！！」

「それよりもワイヤーナイフで臓器に的あて二ヤ……！！！！！！！！」

「当麻、そんなことしたら確実に死ぬでしょ！」

「いいや軍の練習場に放り投げて、戦車に引かれるもしくは撃たれるんだ！イタリアならできるだろ！一真！早速軍に連絡を！」

「……それだ……！！！！！！」

「……それだじゃない……！！！！！！」

6人に引き留められ明久と当麻は大人しく(?)引き下がる事にかし、まだあきらめてない二人がいた。

「当麻！明久！お前らはいいい！俺と祐輝でやる……！！」

「そうだとも一真。絶対に軍の戦車に雄二が引かれるところを写メにおさめるんだ……！！！！！！」

「落ち着きなさいよ二人とも！」

「そうよ一真、大神君……！！」

「俺たちがとめられる理由がどこにある……！！」

そういうと、祐輝と一真は、マシンガンと木刀を持って、雄二に突撃する。しかし、

っ
ビッターン

っと、誰かに足を引っ掛けられて盛大にこけた。祐輝、一真ともに苛立った表情でこかした相手を睨む

「いい加減にして一真、祐輝。話が全然進まないから。」

「あ、あ、明日菜！」
「二人とも攻撃をやめなさい。」
「はいはい。」

そこにいたのは、祐輝の妻にして一真の幼馴染、十六夜明日菜だった。ちなみに祐輝と結婚してるのに、苗字が違うのは、学校でばれたら面倒だからだそう。今は、明久と同じマンションで二人暮らしだ。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

「潔いのは結構だが、あまりにも情けなさすぎるぞ？ 手を抜いて負けるなんて」

「そつだ！お前は明日から永久異端者だ！」

「絶対に明日は来ないと思うニヤー！」

「……ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

翔子の言い放った言葉で、ムツツリー二と明久が突如撮影準備を始めた。

その場にいなかった一真をはじめ、Fクラスのギャラリーは疑問符を浮かべる

「え？ どういう事？」

「霧島さんの提案で、負けた方は何でも言う事を聞くって約束をしたの」

「……成程ね」

一真は明久とムツツリー二の思惑を理解して、ため息をついた。

翔子に視線を戻すと、瑞希に視線をやった後に雄二に視線を戻した翔子が……

「……雄二、私と付き合って」

と、言い放った。

「「「……へ？」」」

一真を除き、Fクラスの面々どころかAクラスの面々も面食らった。それもそのはず、霧島翔子は同性愛主義者だと言う噂が、誰もがそれを疑わない程有力となっていた。

だからこそ、男性である雄二に冗談や酔狂とは思えない表情で告白する姿は、正直意外その物だろう。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き」

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

その姿を見て、全員が噂の真実を確信した。

つまりは霧島翔子についての噂は、一途に雄二を想っていたが故である事に。

「拒否権は？」

「雄二、んなもんある訳ないだろ」

「……その通り。約束だから、今からデートに行く」

と、雄二の首根っこをつかむ。

「ぐあつ！ 離せ！ やっぱこの約束はなかった事に……」

と、雄二は抵抗するも何故かびくともしない。
そのまま教室を出て行こうと……

「ちよつと待った」

するのを、一真が止めた。

「……何？」

「一真……すまん、恩に着る！」

「これを貸してやる」

と、翔子にある物を手渡した。

スタンガン（100万ボルト）

「襲いかかってきたら、これを使うと良い」

「テメ、何の心配してやがる!？」

「問題ない。雄二になら襲われても良い」

問題発言だったが、誰もが絶句している状態のため特に反応は来なかった。

「じゃあ逃げようとしたら使ってくれ。俺でよかったら、幾らでも協力するから」

「ありがとう。神竜、良い人」

「良い人じゃねえ！ 一真、テメ覚えてやがれ！ 生きてたらぶつ殺してやる!!」

「幸せになれ、我が友（笑）よ。ふふふ俺たちを裏切った罰だ。な

あみんなこれでいいな！」

「「「おう！！」「」」

と、再度雄二の首根っこをつかみ、2人は遠くへと去って行った。

「さて、私もね」

といきなり朱里が言い出す。と突然当麻が逃げ腰になる。

「まさか！当麻お前！！」

「くっ残念だがここは金をだすしか」

「そっそんな雄二のせいで当麻の金が！」

「おのれ雄二！」

「何言ってるのよ、私と当麻が約束したのは、負けたほうが言うことを聞く。だから金は減らないわよ」

「えっ金じゃないのかニヤー」

「もちろんよ、当麻、私と付き合いなさい拒否権なんて無いわよ」

「えっ待て離して、何で当麻さん！？ちよっちよっど？一真助けてニヤー」

「「「・・」」」

辺りが静寂に包まれる。その沈黙を明日菜が破る。

「祐輝、お買い物行きたい。夕飯が作れないから。」

「明日菜、君と僕は約束してたっけ？」

「祐輝、とぼけても無駄だぜ。この空気だったら、もう全員どんな関係か予測はつく。」

「だよね」。異端審問会、引っかかりたくないんだけどな、つま

いつか、いこつか明日菜。」
「うん。」

そういつて、祐輝と明日菜は、腕を組んで出て行った。

また静寂が包む。それを破ったのは、とある教師の声。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

「あれ？ 西鉄先生？ 俺たちに何か？」

「おい待て。今俺の名前と鉄人を組み合わせて、斬新な名字を作らなかつたか？」

「あつ、すみません。鉄人先生」

「違う、鉄人に統一しろと言ったんじゃない！ …… まあ良い、今から我がFクラスに補習について説明しようと思つてな」

我がFクラスという言葉に、ほぼ全員の脳裏にある嫌な予感がよぎつた。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から補習授業担当のこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

「……なにいつ！！？」「」「」

クラスの男子全員が悲鳴を上げた。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかつた。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言つても、人生を渡つていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言つて、蔑にしている物じゃない」

負け方が負け方だけに、グウの音も出なかった、つがとある一人だけ反応が違った。

「っは、勉強なんて退屈なだけだ。俺は頭いいからな。学年一。」

「そんなこと言っても無駄だ神竜。吉井と神竜、そして坂本に破神大神は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“危険人物”。ならばに“A級戦犯達”だからな」

「そうはいきませんよ！何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「その通り！一筋縄でいくとは思わない事ですね。村人先生。」

「……お前らには、悔い改めるといふ発想はないのか？それと神竜、勝手に斬新な名前をつけるな」

彼らには、その気は一切なかった。

というのは、ポーズだけだが。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやる」

「うえっ！？……最悪。これ以上勉強したら、1000点オーバーしちまうよ。つまやってみるか。」

「うーん……そうだね。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が新しく出来たから、やってみようか」

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はないのか？」

「「ありません！というかも脱走の準備を始めてます！！」」

呆れるように言う鉄人に、2人して堂々と言い放った

「それじゃ今日はもう終わりだし、秀吉介抱してから帰るか。みんな夫婦そろってどっかいったし。」

「そうだね。帰って何しようかな？」

「姫路誘ってデートでもすればいいだろ。これやるから、頑張れ。」

と、一真は映画のチケットを明久に手渡した。

実は“優子を誘うつもり”で買った物なのだが……。

「俺にはもう必要ないし、お前にやる。お前も誰かとくっつけ、もしたら俺が楽になる。」

「え？ でも……」

「良いから」

と、押しつけるようにチケットを手渡した。

「ねっ、ねえ吉井！ そのチケットの映画、ウチ観たかったのよ！」

「わっ私も、その映画観たかったです！ 一緒に行きませんか！？」

「え？ 何々！？ どうして2人して殺気立ってるの！？」

と、それを見るなり瑞希と美波が、我先にと明久に詰め寄った。

それを見て、一真は笑みを浮かべる……が、彼の演技だと、悲しそうに笑うのが精一杯だった。

「……良いよなあ、明久も雄二も当麻も祐輝も信じれる人がいて。」「何黄昏てるのよ？」

「ふっ親友がモテて、俺はお前にボロクソにフラれて、「集中モード」出して、危険だからもうもてることも無い。そういう気にもなるよ。俺って運ないわ〜。イタリアだったら部下に八つ当たりして

るとござぜ！たく。」

実際、その所為で試験召喚戦争に勝った側として、罪悪感を感じた優子だった。

「それにしても、まだ諦めてなかったのね？」

「俺もそのつもりだったよ……で、何でまだいるんだよ？」

「忘れてない？ Cクラスの事」

一真はすぐさま逃げようとしたが、優子に首根っこをつかまれ失敗。

「ちよっ、待て！ あんな事言われて罰なんて、理不尽にも程があるー！」

「それもそうだけど、だからと言って許す理由にはならないわ。まあ体罰は勘弁してあげるから、今日は買い物に付き合っって貰うわよ？」

「名目が名目だから嫌な予感しかしねえ！」

「あつ優子あたしもいい？」

「僕も行きたい！」

「私もいきたい！」

「いいわよ、全部こいつが買ってくれるから。こいつサッカーとバイトで結構金持ちなのよ？」

つと怜奈、愛子、彩夏が行きたいと言い出し一真は瑞希と美波に圧されてる明久に目をやると、明久も頷いた。

まあ一真が原因だと言うのは、おいておくとしてだが……。

「鉄人先生、やっぱり補習今からやりましょう！ 個人で良いですからー！」

「そうです。思い立ったが仏滅ですよ！」

「吉日だバカ。まあお前たちがやる気なのはうれしいが……まあ無理をする事はない。それに吉井も神竜も、彼女が出来れば少しは更生するかもしれんしな。先生は大いに応援してやるぞ」

普通に考えれば、ある意味男女交際を応援する様な事。だが2人には地獄へ突き落とされる様なことこの上ない。

「おのれ鉄人！ 僕たちが苦境にあると知った上での狼藉だな！？ こうなったら卒業式の日、伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！！」

「ぬるい明久！！俺は新年にあんたの家に爆弾仕掛けて爆破する！！家族もろとも死ぬんだ鉄人。ちょっと待ってる、殺人許可証もらつてくつから」

「斬新な告白だな、おい、つというか神竜、殺人許可証とはいったいなんだ？」

「つやつべ、鉄人それ以上言ったら首飛ぶからな。俺もまだまだだな。だが、」

鉄人に詰め寄ろうとしたところを、明久は美波に、一真は優子と怜奈にネクタイをつかまれ引っ張られる。

「逃げようつたつてそうはいかないわよ、吉井」

「そうよ一真。私の風評に傷を付けてくれた罪、きっちり償って貰うわよ？」

「あたしを泣かせたんだからちゃんときなさい」

「僕も皆がいるしねー」

「私も愛子と同じ理由」

「では吉井君、この際3人で良いですし、神竜君に木下さん達も同伴でいいですから行きましょう」

第一次試召喚爭編

<了>

第14話 終結俺たちの第一次試召戦争！！（後書き）

いや〜日曜までにはできませんでした申し訳ない

今日の質問

あなたの好きなライトノベルは何ですか？（バカテス以外）

第15話 例えそれが悪だとしても（前書き）

問題

次の故事成語の意味を答えなさい。

- 1 「四面楚歌」
- 2 「舟に刻みて剣を求む」

姫路瑞希の答え

- 1 「孤立して敵に囲まれること」
- 2 「古い習慣にこだわって、時流についていけないこと」

教師のコメント

流石です姫路さん

神竜一真の答え

- 1 「俺」
- 2 「学園長」

教師のコメント

君は学園長を何だと思ってるんですか！

破神当麻の答え

- 1 「一真」
- 2 「ババア（学園長）」

教師のコメント

君もですか…

大神祐輝の答え

1 「一真と雄二」

2 「あの白髪（学園長）」

教師のコメント

大神君、あまりあの二人に感化されないでください

吉井明久の答え

2 「学園妖怪」

教師のコメント

学園長に謝りなさい

第15話 例えそれが悪だとしても

そこは、倉庫だった。海沿いにある、誰もいなさそうな倉庫。そこには、とある3人の少年と、黒服を着た大男達、ざっと20人いるであろう。

男達は、少年達に対して、拳銃を向けている。少年達は、一番前の日本刀を持ちホルスターにデザートイーグルと言う拳銃、FNハイパワーと言う拳銃を持っている。後ろの二人は、左の少年が、ワイヤーナイフを大量に持ち、右の少年が、FNCと言うアサルトライフルを持っている。

ふと、男達のボスと思える人物が口を開いた。

「この当たり一帯にあの有名なSEEDがいるって聞いたからちよつとうれしくなったが、まだガキじゃねエか。さっさと帰って寝なそうしたら撃ってやらんことはない。」

男がこの場から逃げると言うが、少年達はそのつもりは無い

「はは、馬鹿だろおっさん。俺たちが帰るとでも思ってたのか？」

「だね。つま、しょうがないよ馬鹿じゃないとこの日本で悪さす

るわけないし」

「帰れというんならおっさん達ニヤァ。死にたくないならニヤァ」

「何だと？ガキだと思って帰してやるうと思っただが、やっぱりやめた。お前ら撃て！」

切れた男が仲間にも号令を掛け一瞬で撃ってくるが、少年達は、それを全て打ち落とすと、一目散に駆け出した。一人が真正面から突っ込み、もう一人は遠距離からナイフを投げ、もう一人が、移動しながら銃を放つ。

「桜炎双閻流。桜四式「狂い咲き」」

突っ込んだ少年は、一瞬で10人ほどの男達を殺していった。一人が襲い掛かってくるが、

「桜炎双閻流。閻二式「暗閃」」

一瞬で後ろに回り男を引き裂く。また3人が四方から襲ってくるが、

「桜炎双閻流。炎四式「紅蓮爆炎陣」」

男達は吹き飛びながら死んでいき、残るは後10人。

「桜炎双閻流。炎五式「炎歌」曲は、「嘘」祐輝！」

「はいはい一真。行くよ。あの日、見た空、茜色の………」

少年、祐輝が歌いだし、それにあわせて一真が動き出す。そして残り9人を倒した。

「あとはお前一人だ」

男達のボスは、恐怖で顔を歪めた。そしてがたがた震えだし、

「まさか、お、お前らあの「孤独の死神」率いるSEED最強チーム「アジエツト」か!？」

「はい正解！それじゃあ死んでください。桜炎双閻流。桜三式「満開」」

男も真つ二つに切り裂かれ消えていった。

ところ変わって、とあるビル。そこに先ほどの3人と、いすの上に座った男がいた。

「ご苦労君達。これは今日の報酬だ。またよろしく頼む」

「あんがと」

「ありがと」

「サンキューニャー」

それぞれが、袋に入った報酬をもらい帰っていった。

ここで3人について説明しよう。

3人は、先ほどの男が言ったように、国際政府防衛暗殺組織特別暗殺部隊「SEED」の一員だ。

この「SEED」は、チームに分かれて、依頼を受けた相手を抹殺する仕事についている。この間一真が間違えてポロリと要ってしまった殺人許可証とは、この組織が発行している、殺人を許可する証明書なのだ。そして3人は、この組織でもナンバーワンの実績を誇

る「チームアジェット」の三人なのだ。

いつもの見慣れた文月の町、そこには、一真、当麻、祐輝の3人が、夜の文月を歩いていた。

「今日は散々だったぜまったく。あの四人に荷物持ち兼おごりをやらされ映画を見せられ」

「俺もほとんど同じニヤ」

「そんなことがあったんだ」

3人は、そのようなことを雑談しながら帰っていた。

「今日も楽しかったな」

「まあまあ、お金ももらえるんだし」

「マフィア時代のような連中とやりたいニヤ」

3人も、今の戦いには飽き飽きしていた。

「早く帰って学校行く準備しようぜ」

「だね」

「宿題残ってるニヤ」

つと、やっぱり雑談しながら帰り、朝になり、三人そろって遅刻して鉄人に起こられるのだった。

例え、それが悪だとしても、やっていることが結果的に善なら自分は悪くない。

第15話 例えそれが悪だとしても（後書き）

今日の質問

皆さんのお勧めのじじファンの小説ってありますか？

第16話 みんなでニューエマー！（前書き）

今回最悪のできです。風邪引きました。

第16話 みんなでデュエマ！

とある休日、いきなり明久が言い出した。

「そうだみんな！デュエマしようよ！！！！！！」
「！！！！！！」
「！！！！！！」

その場にいた、一真、当麻、祐輝、雄二それにムッツリーニまでも

が驚きの声を上げた。

「明久、僕たちコーコーサーだよ？」

「まさかにやー」

「……明久、それは無いぞ」

「馬鹿の考えることは馬鹿丸出しだな」

「みんなひどい！！！」

口々に明久を非難し、明久がざめざめと泣き始める。

「つま、やってみないとわかんないじゃん」

「やる価値はあるかニヤー」

「どこにあつたっけ僕のデュエマ？」

「しゃーない、俺もやるか。」

「……まあ、仕方が無い」

口々に賛成の意を唱えたと明久はうれしそうに、

「じゃあ、僕のうちに集合で、みんなでやるっ」

そこでしばし解散となった。

30分後、改めて明久の家に集合した6人は、それぞれ自分のデュエマのデッキを持って集まっていた。

一真のデッキは、破壊と攻撃の火と闇のドラゴンデッキ、祐輝のデッキは、光一色のブロッカー祭り、当麻のデッキは、闇の戦略デッキ、ムツツリーニは、火と自然の低マナデッキ、雄二は、闇と光デッキ、明久は、火と光のデッキだ。

「もう埃かぶってたよ。」
「俺はそうでもなかったニヤァ」
「そうか？」
「オイお前らルール決めっぞ」
「ルールはこれね」

- 1、総当たり戦で行う
- 2、最下位は、一位にジューズを一本おごる
- 3、不正行為は、ムツツリー二専用の監視カメラによって発見され、見つかった場合は、持ち点をゼロとする
- 4、勝った場合は勝ち点3、負けた場合は0
- 5、元のルールにのっとって行うが、以下の変更点だけ変更する
？手札が無くなったらその自分のターンの終わりに3枚カードを引く
？殿堂入りとか関係なし

以上

「なかなかこつたルールだな」
「少しはやりやすいかな？」

「それなら早くやろうニヤー」

「……一回戦は誰とだ」

「お前からそう焦るな、今から一回戦の相手を発表する。明久」

「え」と、まず、一真vs雄二、当麻vsムッツリーニ、僕vs祐輝だよ」

それぞれが場所に別れ、デュエルが開始された。

デュエル開始後、当麻とムッツリーニには、ある変化が起こる。

「うにゃ、ムッツリーニのクリ・チャ・が多いニヤー」

「……これぐらいどうってことはない」

バトルゾーンにあるのは、ムッツリーニの低マナクリチャー（6体）ばかり。当麻のカードは、スレイヤーのブロッカー（闇）二枚のみ、今は、五ターン目だがムッツリーニのマナはもう8だ。

「これはちよつと大ピンチかニヤー。マナチャージ6マナ、悪戯人形八口、彷徨う者ブレインイーター二枚召喚だにゃー、ターンエンドだニヤー」

「……マナチャージ、フェアリーライフ四枚、マナを増やす。ターンエンド」

「いや、もうありえないニヤー、まずいニヤー」

ものすごい勢いで負け決定かと思われた当麻だが、彼の手札の中には、ちよつとした秘策があった。だが後3ターンこらえなければいけない。

「マナチャージ7マナ彷徨う者ブレインイーターと、魔城の黒鬼オ
ルガイザ！召喚だニャー、そして、

バトルゾーンにあるムツツリー二のクリーチャーを4体破壊だニャ
ー」

「……つく」

ムツツリー二のクリーチャーは、2体となった。

「……マナチャージ、ティルガベジータ召喚。ターンエンド」

「んな！、まさかそうくるとはにゃー、マナチャージ、8マナ、悪
戯人形八口を召喚ターンエンド」

後2ターンが重くのしかかる。ここをしのぎきらないと負ける当麻
は、次のムツツリー二のカードで地獄に叩き落された気がした。

「……地獄スクラッパー二枚、ブロッカーを全破壊。ティルガベジ
ータでアタック」

「つく、だがシールドトリガー発動だにゃー、デーモンハンド二枚
「つく！ターンエンド」

何とかしのいだ当麻は、次の攻撃をどう守るかが鍵となる。

「マナチャージ9マナ。操り人形ピエールを4体召喚そして、さま
よう者ブレインイーターを召喚だニャーそして、オルガイザと八口
で、アタック」

「……もう一体ティルガベジータを召喚し、ボルガウルジャックを
進化、さまよう者ブレインイーターを破壊。」

10ターン目当麻の大秘策が適用される

「10マナ、進化、悪魔神ドルバロム召喚だニヤー」

もうムッツリーニに、策はなく、当麻のドルバロムによって敗れた。

他の試合も終わっており、結果は、

×雄二vs一真　一真のドラゴンカーニバルに雄二なすすべなし
明久vs祐輝×　明久の熟練の技にブロッカーが使えず敗戦。

それから、どんどん試合は進んでいき、最終試合は、一真vs明久の一位決定戦と、祐輝vs雄二のビリ決定戦となった。

一真vs明久

この試合は、4ターン目から勝負だった。

1ターン目に明久のラ・ウラ・ギガ

2ターン目に一真のチッタペロル、明久のデ・アシス公

3ターン目に一真のコツコルピア、明久のトットピピッチ

そして4ターン目どちらもドラゴンを基本としたデッキだが、一真の方が先に動く。

「ボルシャック大和ドラゴン召喚ダブルブレイク。」

ここで、明久のシールドをブレイク。

「僕のターン、ル・パーレを召喚ターンエンド」

5ターン目

「ロマノフ一世を召喚、墓地に、ロマノフストライク、大和でアタック。」

「デアシス公でブロック」

ここで明久の最強ブロッカーが召喚される

「一真、さっきのは攻撃は君のミスだ！開眼者クーカイを召喚！！」
「っち！しまった。」

クーカイは、面倒なことに無限ブロッカーだ。

6ターン目

一真の本気が炸裂することになる。そして最後のターンにもなる

「切札サンバーストNEXを召喚！NEXで、クーカイを破壊ご、アンタップからのクリーチャー全破壊！。NEXでダブルブレイク！」

残り一枚のシールド。明久には策はなく、負けた。

結局、雄二が一真にジュースをおごり、今日はお開きとなった。

第16話 みんなでテュエマー！（後書き）

今日のことについては上下座ものです申し訳ありません。

第17話 転入生はアイドル！？（前書き）

問題

現在、ドイツのブンデスリーガーで活躍している、日本人サッカー選手を3人、フルネームで答えなさい。

神竜一真の答え

『槇野智章、宇佐美貴史、大津祐樹（俺と当麻と祐輝にこんな問題解けないわけがない）』

破神当麻の答え

『岡崎慎司、香川真司、内田篤人（これは、俺たち3人に挑戦状かニヤ〜？）』

大神祐輝の答え

『長谷部誠、細貝萌、矢野貴章（簡単すぎますね）』

教師のコメント

流石は、U22日本代表まさか3人で全選手書くとは思いませんでした。というか、これだけまじめに答えられるのなら普通の問題も答えなさい！

吉井明久の答え

『香川真司、岡崎慎司、宇佐美貴史』

教師のコメント

吉井君が正解するなんて、明日は雪ですかね

姫路瑞希の答え

『香川選手（先生、本当に何の問題ですか？ぎりぎり保健体育なき
もしますけど）』

教師のコメント

前回のWCCFに続き申し訳ないです。彼らがサッカーでまじめに
答えることは分かりました。すいません。

第17話 転入生はアイドル!?

何も変わらぬはずの平日のある日。文月学園では、一大イベントがあるような雰囲気だった。

何も知らない明久は、親友である一真に何か聞いてみた。

「一体何の騒ぎなの?一真。」

「さあ?俺も知らん。当麻、知ってるか?」

「Aクラスに転入生が来るらしいニャー」

「Aクラスに転入生?こんな時期に?でもなんでそれだけで?」

「明久。その転入生というのが、有名なアイドルらしいよ」

「へ〜。」

そう。話の内容からして分かると思うが今日は、アイドルが転校してくるらしいのだ。

「つで、そのアイドルが来るからこんなに騒いでるのか?」

「そうらしいぞ一真」

「ねえ雄二、そのアイドルってどんな人なの」

「知らないの?今有名なアイドルよ?」

ポニーテールを揺らしながら、美波がこっちにやってきた。

「明久はいつもゲームしかやってないからな。知らなくて当然だよな」

「失礼な!マンガだってちゃんと読んでるよ!」

「その台詞はアウトだ明久」

「ちゃんとラノベぐらいは読むニヤー」

「当麻もアウトだからね？」

「マンガとゲームとラノベいう組み合わせは、廃人の一歩手前だろ。」

「

「雄二それは言わないで……」

「言わないでほしいニヤー」

つと、馬鹿な話をしていると、後ろから……。

「………転入生、見てきた」

「うわっ！いきなり後ろから声かけないでよ！」

突如として背後より話しかけてきたのは、ムッツリーニ。手には、カメラが握られている。

「どんな子だったの？」

「………白。一枚三百円」

「買った！」

「………買ったな！！」「……」

「いだだだだだだだ！！！」

買おうとした所で、一真達にはたかれ、美波に右腕をへし折られそうになった明久だった。

「お主らは相変わらずだのう」

「ひ、秀吉？」

「はよ。秀吉」

「うっす」

「おはよう」

「おはようなのじゃ」
「あれ？今日は一直と当麻。秀吉と一緒にじゃないの？」
「わしは朝練で二人より早かったのじゃ。」
「ねえ秀吉。転入生見た？」
「いや。まだじゃのう」

そして明久が何かを思いついたように、

「それじゃあ、みんなでその転入生を見にAクラスに行ってみようよ」

「……頼むから、それだけはやめてくれ」

「え？何でさ？雄二も当麻も祐輝も興味あるんじゃないの？」

「明久、転入生はAクラスだ。そこにこいつらが行ったらどうなる？」

「あゝ。なるほど。Aクラスには3人の妻がいるからね。」

「籍入れてねえ（ニヤァ）！！！！」

「あはは。僕は離婚騒動になりかねない。」

明久が気がついたとおり、100%、朱里、明日菜、翔子に3人は殺されるのだ。

「まあ、とにかくみんなで行ってみようよ！姫路さんも一緒に」

「わ、私もですか？はい。私も、少しだけ興味があります」

「つま、見に行くか。」

そうして、一行は、Aクラスに歩を進めるのであった。

「それにしても、ウチの学校に来るなんて……一体どんな事情があるのかしら？」

道中、美波が言い出した。

「フム……それについてはワシも気になるところじゃ。今では日本を代表するアイドルである彼女が、どうしてこの文月学園に来たのか」

「学費が安いから……というわけでもないよな。アイドルなんだから、一応報酬は貰えているわけだし」

「僕は、この学校に来たのは、勉強の為だと思っけどな。」

「俺もそう思うニヤ」

「アイドルでもいまの時代馬鹿じゃあ渡っていけないしな」

「一真知ってるような台詞だな」

「何だよ。俺だってサツカーやってるだけじゃ駄目だと思っただからこの学校にきめたんだぜ？」

「と、話をしている内にAクラスに来たな」

「とりあえず。入ろうよ」

明久がドアに手をかけ入ろうとしたとき、急にガラガラッと戸が開き始め、出てきたのは、

「……あれ、雄二？それに神竜たちも。」

「あら、祐輝に一真達どうかしたの？」

「当麻たちじゃない。また戦争しに来た？」

「あ、霧島さん、十六夜さん、水野さん」

「おい朱里俺たちはどこの戦闘狂だよ」

明日菜、翔子、朱里だった。

「ねえ明日菜、アイドルが転校してきたって聞いたんだけど」

「……雄二、浮気は、許さない」

「がちで大笑いニヤー」
「つま、世界は狭いつてこった。恵」
「なによあんた達知り合いだったの？」
「まあな。俺たちは一応知り合いだな。っで、恵この中に俺たち以外の知り合いが約一名いるんだよな？」
そこで、3人の視線は明久に向けられる。

「えっ、僕?!」
「やっぱり覚えてない」

恵は残念そうな顔になる。

「明久、小学校のころ鈴をなくした女の子に会わなかったか？」
「え!何で一真がそれを知ってるのさ。」
「そのこの名前は？」
「え〜っと……ああ!!!!思い出した!あの時の!!!!」

明久が分かった表情になり、かなりご機嫌な恵。そして、残りのメンバーの自己紹介をしたところで事件が起きる。

「諸君、我等の使命は何だ!?!」
「『学園の平和の維持だ!』」
「異端者には!?!」
「『死の鉄槌を!』」
「男とは!?!」
「『愛を捨て、哀に生きる者!』」
「宜しい……では2・F異端審問会を開始する!!!」

異端審問会が出てきたのだ。

れてみていた。

曲が終わるとそこには残骸が

「ふゝ。終了」

「おっつかつれさん」

「じゃあ、俺たちは戻るか」

「だね、雄二じゃあね明日菜」

「ばいびくだニヤー」

「ほんじゃな」

「ご迷惑おかけしました。じゃあね恵」

「また来てね、明久」

こうして、一真達はFクラスへと帰っていった。

第17話 転入生はアイドル！？（後書き）

今回で一応、メインキャラクターは出ました。っということ、今回から、今年いっぱいまで、人気投票したいと思います。オリキャラでも、原作キャラでもかまいません。一人三表まで投票できるので投票よろしくお願いします。

第18話 波乱万丈清涼祭！（前書き）

文月新聞

『僕が小さなころ、祖父がよくこう言っていました。

“ 明久。泥棒でも何でも良い、一番を目指して精進しなさい”

今、僕は天国にいる祖父にこの事を教えてあげたいと思います。
じいちゃん……これで、良いかい？』

以上

『女装が似合いそうな男子生徒ランキング1位』

『こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキング1位』

『モテそうな男子（同性愛編）ランキング1位』

『危険人物ランキング2位』

の3・5冠を達成した、吉井明久さんのコメントでした。

『面倒だから二度とくんない！』
以上

『危険人物ランキング1位』

『敵にしたくない生徒ランキング1位』

『武器が似合いそうな生徒ランキング1位』

『学園最強の破壊者ランキング1位』

『意外とかつこいい人ランキング1位』

『働かない生徒会長歴代1位』

の5冠を達成した神竜一真さんのコメントでした。

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希、大神祐輝の答え

『クラスメイト（一真達）との思い出』

教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

写真館とかも候補になりうると覚えておきます。後、大神君特定の
人に絞らないでください

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

神竜一真、破神当麻の答え

『体の耐久力』

教師のコメント

君達は鍛えたほうがいいでしょう

第18話 波乱万丈清涼祭！

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始める季節。

文月学園では、新学年最初の行事“清涼祭”の準備が始まりつつあり、所々で活気があふれている。

お化け屋敷、喫茶店、展示会、などなど。

さて、我らがFクラスはと言つと……

「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが……」

代表の雄二は、床にごさを敷いて座るFクラスに、だるそうに言った。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので後は任せた」

彼、坂本雄二は基本興味がない事にてんで無関心なので、丸投げして後はサボる事になっている。

「んじゃ、実行委員は島田という事で良いか？」

「え？ ウチがやるの？ うん……ウチは召喚大会に出るから、ちよっと困るかな？」

「雄二、実行委員なら、美波より姫路さんや、一真、当麻、祐輝の方が適任なんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

余談だが明久は映画の帰り、美波に名前で呼び合うように言われていた。ちなみに一真達は全員寝ている。

「姫路には仕切り役は向かないだろ、しかも一真は生徒会、祐輝は風紀委員、当麻は選挙管理委員の仕事で基本的に無理だ、今回働かないと他の役員に怒られるらしい。」

「そういえば、そうだったね。“働かない長”の異名を持つてるんだっけ？」

「それに瑞希も召喚大会に出るのよ」

学園祭では、試験召喚システムのプロバガンダの為、召喚獣による大会が開かれる。

形式は2対2のタッグ戦で、今回は新技術のお披露目も兼ねている為、一層力が入られていた。

「瑞希に誘われたのよ。瑞希ってば、お父さんを見かえしたいって聞かないんだから」

「はい。お父さんったら、FクラスみんなをFクラスってだけでバカにしたんです！ 許せません！！」

「ははっ。バカなのは否定しないが、そこまで言うてくれるなんて嬉しいな。そう思わないか明久？」

「そうだね一真。それじゃ僕達も応援するから、Fクラス代表として頑張って」

「はい！」

「あー、4人とも、こっちの話が続けていいか？」

「ほんとな仲いいニヤー」
「ほんとだね」

そこへ雄二達が割り込み、脱線した話を戻そうとする。

「ああ、ごめん雄二。で、美波は召喚大会に出るって話だから、あまり負担は……」

「じゃあ補佐をつけなければいいじゃないか？」

「うーん……そうね。補佐次第ではやっても良いけど」

「そうか。ではまず皆に、副委員の候補を上げてもらう。その中から島田が2人を選んで投票したらいいだろう」

そう告げられると、教室がざわめき始める。

まあ面倒な役は御免被りたい、と思うのは皆一緒

「吉井が適任だと思う」

「やはり坂本がやるべきじゃないか？」

「前線指揮官ならやっぱり神竜だろ」

「いや参謀の破神は」

「大神がいいんじゃないか」

「姫路さんと結婚したい」

「お前らはなし聞いてたか？俺と当麻と祐輝は絶対無理だ」

所々で、候補の選別が始まった。

中には、関係ないラブコールも交じていたが。

「ワシは、一真か明久か大輝か当麻が適任だと思うのじゃが補佐じゃったら別にいつもいなくてもいいんじゃないか？」

「って秀吉、僕もそういう面倒な役は、出来ればパスしたいな〜なんて」

「秀吉、俺が一度でもがっこの学際に参加したことあったか？」

「俺達は一真と行動するからニヤァ」

「そうだね」

「そうじゃったの」

責任者となると、当然色々な責務や責任も生じる。

そうこうしていくうちに、候補が美波の手により黒板に書かれた。

『候補1……吉井』

『候補2……明久』

「さて、この2人のどちらが良いか、決めてくれ」

「ちよつと待て！ それ候補を2人にした意味がないだろ！」

「どうする？ どっちが良いと思う？」

「そうだな……どっちもクズだからな」

「お前らもバカ丸出しの発言をするんじゃない！」

一真のツッコミもどこ吹く風と、真剣に悩み始めるクラスメイト達でも結局、明久に決まることには変わりなく、しぶしぶと明久は壇上へと上がって行った。

「全く……ドンマイ明久。じゃあ俺はトイレ行ってくるから」

「早めにお願ひします」

「ああ」

一真はそう告げると、教室を出てトイレに。

それから……

「ふうーっ。すつきりした」

と言いつつ、教室の戸をあけて黒板を見てみると……

『候補1 写真館「秘密の覗き部屋」』

『候補2 ウエディング喫茶「人生の墓場」』

『候補3 中華喫茶「ヨーロッパ」』

一真の眼が点になった。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところは、候補は黒板に書いてある3つです」

「どれどれ……補習の時間を、倍にした方が良いかも知れんな」

その言葉に、全員が驚愕した。

「せ、先生！ それは違うんです！」

「そうです！ それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカな訳じゃありません！」

と、口々に明久を売り助かろうとする。

「アホ、そういうみつももない良い訳する時点で、バカも同然だ」

「その通りだ！ そもそもバカな吉井を選んだ時点で、間違いだと気付かんか！？」

「いや、アンタのその発言も教育者として間違ってると思っぞ？」

「全くお前たちは……少しは真面目にやったらどうだ？ 稼ぎを出

して、クラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

一真の主張はまたしても届かず、ため息交じりに鉄人はそういう。その言葉に、クラス全員の目が輝き始めた。

「み、皆さんっ！ 頑張りましょう！」

と、珍しく瑞希が率先して動き始めた。

「それで、どうする？ 利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「いや、初期投資の少ない写真館の方が」

「それだと、運営委員会の見周りで、営業停止処分を受ける可能性もあるぞ。と言うかここに生徒会長がいるし」

「ああ、却下する」

それに加え、クラスメイトにもやる気があふれ、意見が飛び交い始める。

「中華喫茶ならハズレはないだろ」

「それだと真新しさに欠けるな。汚い所為であり人が来ない旧校舎だと、その特徴の無さは致命傷じゃないか？」

「ウエディング喫茶はどうだ？」

「初期投資が大きすぎる。たった2日の清涼祭じゃ、儲けは出ないんじゃないか？」

「リスクが高いからこそ、リターンも大きいはずだ！」

……が、まつまりからは程遠い光景。

所々で周りを見無視し、それぞれ好き勝手な意見も出始める。

「はいはい！ ちょっと静かにして」

と、美波が注意しても、全く効果がなし

「お化け屋敷とかのほうか受けると思う」

「簡単なカジノを作ろう！」

「焼きトウモロコシを売ろう！」

試召戦争のまとまりがウソの様に、ドンドン意見がばらばらに。

見るに見かねた一真達が、マシンガン、ナイフを取り出しおよそを狙って引き金を引いた。または投げた

「「「ぎゃあああああ！」「」「」

そこからさらに、スタンガンを数本取り出し突き付けると全員手を挙げて静まった。

「ありがと神竜たち。決まりそうにないから、店はさっき上がった候補の中から選ぶからね！」

ブーイングが響くが、一真が美波にアサルトライフルを手渡そうとするのを見て静まった。

「ほらっ、ブーブー言わないの！ この3つの中から1つだけ選んで手を上げる事！ 良いわね！？」

と、強引な手で話を進める。

雄二の人選が当たりを見せた瞬間だった。

「それじゃ、写真館に賛成の人！ はい、次はウェディング喫茶！

最後中華喫茶！」

そして僅差で、中華喫茶に決定した。

「Fクラスの出し物は、中華喫茶にします！ 全員、協力するよう
に！」

「それならお茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スツク）」

「ん、料理だけだったら俺もできるぞ？ いる時間少ないが」

厨房担当を名乗り出たのは、須川とムッツリー二と一真。

「3人とも、料理は得意なのか？」

「任せておけ。提案したからには、自信くらいある」

「……………紳士のたしなみ」

「俺一人暮らしプラスバイトしてんだけど。まあ参加するぐらいは
いいか」

「じゃあまず、厨房班とホール班に分かれてもらうからね、厨房班
は須川と土屋と神竜のところ、ホール班はアキと破神と大神のこ
ろに集まって」

と、それぞれは自分の希望する班に流れ込む。

「それじゃ私は、厨房班に……………」

「ダメだ姫路さん！ 君はホール班じゃないと……！」

「そうだ姫路、2人しかいない女子はホールに回って貰わないと困
る……！」

「そうだにゃー……！！！！！！！！」

「そうだそれがいい……！！！！！！！！」

と、厨房班に回ろうとした瑞希を、一真と明久と祐輝と当麻が必死になって止めた。

「大丈夫ですよ。あれから練習しましたから」

「いや、その練習の成果の方向によつてはまずいから！」

「そうそう。それに姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんと接した方がお店として利益が痛っ！ み、美波！ 僕の背中ではサンドバッグじゃないよ!？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそういうなら、ホールでも頑張りますね」

“でも” はやめてくれ。専任の方が効率良いんだから」

“必殺料理人” 姫路瑞希、ホール決定。

「……じゃあ明久、がんばれ」

「何言つてんの一真達も働くんだよ？」

「ハア、面倒だ」

「その方が良いじゃろうな。危険人物ランキング1位から5位がうるつく店に、客が来ると思えんしの」

ちなみに明久と大輝は、一真のトバッチリである（5位は雄二）。なぜか「学園クラッシュャーズ」と呼ばれている

「じゃあウチは、厨房にしようかな？」

「それなら、ワシも厨房にしようかの？」

「秀吉、何バカなことを言ってるのさ!？ 秀吉はそんなに可愛いんだから、もちろんホールに決まってるじゃないか！」

明久の意見を聞いて、自身を挙げようともしない美波は怒りに身をまかせようとするが……。

「まあ落ち着け島田、ここで我慢すれば明久と一緒に料理ができる
だろ？」

「ううっ……そっそうね。ここは我慢してあげるわ」

と、一旦は怒りを納める事に。

だがそれは、死亡フラグだった、

「美波ちゃんだけズルいです！ やっぱり私も厨房に回って、吉井
君と楽しくお料理します！」

「明久、お前と島田はホールだ！ 逆らえば切り殺す、良いな！？」

「俺が切り殺すニヤー」

「いや僕が撃ち殺す」

「さすがは一真、ちょうど僕も同じくホールに出たいと考えてたところだよ！」

始まりの時点で波乱万丈なFクラス。

第18話 波乱万丈清涼祭！（後書き）

投票よろしくお願い島々ス

第19話 文月最低最強チーム（前書き）

清涼祭アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートに御協力ください

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

神竜一真の答え

『動き易く、品を保てて人目を引く服装』

教師のコメント

君からまともな意見が出て、意外だと思った先生を許してください。

破神当麻の答え

『メイド服』

教師のコメント

君は、うん、取り扱いません

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られる位のものを用意し、裏には口ゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても

吉井明久の答え

『ブラジャー』

教師のコメント

ブレザーの間違いだと信じています

第19話 文月最低最強チーム

「アキ、神竜、破神、大神、ちょっと良い？」

帰りのHRが終わり、現在放課後。

何やら神妙な顔をした美波から、明久と一真達は声をかけられた。

「ん、何か用？」

「どうしたんだ、島田？」

「情報なら高いニヤー」

「簡単なことなら引き受けるけど」

「うん。どっちかというと、相談なんだけど……」

その真剣な様子に、一真達は何かと思いつつも相談に乗る事に。そもそも美波が明久等を頼る事自体珍しい事の為、なおさらに。

「多分、4人が言うのが1番だと思うんだけど……その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張りだせないかな？ ほら、あの様子じや坂本が仕切らないと……」

「あー、まあ確かにな」

「でもそれは難しいなあ……さっきも言ったけど、雄二は興味ない事に徹底的に無関心だからね」

「俺らもあんまりやりたくないからニヤー」

「んまあ、雄二は何とかしてあげようよ」

1年来の悪友の為、4人は雄二の事はそれなりに理解している。だからこそ、その提案がいかに難しいかも当然理解していた。

「でも、アキと神竜と破神と大神が頼めばきつと動いてくれるよね？」

「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど」

「ううん、そんなことない。きつとアキと神竜の頼みなら引き受けてくれるはず」

「そこまでいえるには何かあるのかニヤァ？」

「いやなんか無いとそこまでいえない」

まるで確信めいた様子で、美波は言葉をつづけた。

その手にある本が握られている事に、明久も一真も当麻も祐輝もつかないままに。

「そりや確かに、良くつるんではいるけど、だからと言って別に…」

…

「あんた達、愛し合ってるんでしょう？」

「もう僕、お婿に行けない!!」

「というか、どういう経緯でそんな結論にたどり着いた!？」

「なんでにやァ!朱里が聞いてたらどうなるか!」

「いや!それは嫌だ!」

明久は泣き崩れ、一真は全身に鳥肌がたち当麻は朱里が聞いていないか回りを確認し、祐輝は首が干切れるぐらいに振って抗議。それに疑問符を浮かべながら、美波はある本を差し出した。

『バカとマフィアとバラの世界』 (一真×明久)

『マフィアと相棒の禁断の日々』 (当麻×一真)
『天才と危険と非日常』 (祐輝×一真)
『武器と拳と絡みの旋律』 (一真×雄二)
『バカと筋肉と交わりと』 (明久×雄二)
『ばかと天才と危険なバラ園』 (明久×祐輝)
『君を見つめて』 (当麻×祐輝)
『天才と嘘と危ない週末』 (当麻×大輝)
『嘘と拳の交じり合い』 (当麻×雄二)
『天才と拳とバラ園と』 (祐輝×雄二)

「……何これ？」

「これ僕達許可してないよね？」

「この前、友達にもらった物なんだけど」

「俺朱里と付き合ってるのにニヤー」

「僕なんか、結婚してるのに……」

「あのさ島田、俺が優子にフラれたって事知った上でそんな事言うのか？」

「あつ！……ごめん」

吐き気と寒気が治まらなくなったところか、最近えぐられる事が多い古傷の痛みが顔をゆがませる一真、朱里、明日菜がいることを否定されているようでショックで顔を滲ませる当麻と祐輝。明久もさめざめと泣き続け、ショックは大きい様子。

「誰が雄二なんかと！ だったら僕は、断然秀吉の方が良いよ！」

「……あつ、明久？」

そこにたまたまそばにいた秀吉が、動きを止めた。

「そ、その……お主の気持ちは嬉しいが、そんな事を言われてもワシらには色々と障害があると思うのじゃ。その、ホラ、年の差とか……」

「ひ、秀吉！ 違うんだ！ ものすごい誤解で……」

「ひッ秀吉！まさか！」

「まずいニヤー」

「いや、年の差って、俺ら同級生だろ。いや、それより何故顔を赤くするんだ！？ 明久は恵との約束、忘れたか？」

「えっ約束？え〜つと、まさか！あれのこと?!」

「そうだニヤー。」

「……………」

「明久が処理落ちしちゃった！」

結局グダグダになってしまった。

そしてそれが落ち着いたころ。

「で、一体どうしたんだ？ やけに喫茶店に拘ってるみたいだけど？」

「そう言えば、随分と深刻そうにしておるの？」

「……本人には誰にも言わないでほしいって言われてたんだけど、事情が事情だし……けど、秘密の話だから、誰にも言わないでね？」

美波の真剣な様子に、5人は顔かざるを得なかった。

そして、秘密の話を打ち明けてくれる以上、無下に断る事もするつもりは更々湧きもしない。

「う、うん。わかった」

「右に同じ」

「……実は、瑞希なんだけど……あの子、このままだと転校するかも知れないの」

「なっ!？」

その言葉には、流石に一真も秀吉も明久も祐輝も当麻も、驚きを隠せなかった。

本人どころか、教師からも話が聞かなかったことゆえ、動揺は隠せない。

「どっ、どっという事だ？ それに“このままだと”って、一体……？」

「多分、教室だろうな」

「当麻、口調が戻ってるよ」

「む、待つんじゃない、一真、当麻、祐輝。明久が処理落ちしかけてるぞ」

「このバカ、不測の事態に弱いんだから！」

「いや、いきなりこんな話されたらパニックになってもおかしくないぞ？ おい明久、しっかりしろ」

一真が明久を揺さぶり起こし、ハッと目を覚ます明久。

先程まで目がうつろだった事は、気付く者は1人も居なかった。

「一真、当麻、祐輝……モヒカンになった僕でも、仲間と呼んでくれるかい？」

「……どういふ処理をしたら、瑞希の転校からこういう反応が得られるのかしら？」

「ある意味、稀有な才能かも知れんの」

「バカなのかすごいのか分からないね(ニヤー)」

「ああ、呼んでやる。呼んでやるから落ち着け」

全員が微妙な目で明久を見つめる中で、ハツと正気を取り戻した明久。

そして本来聞くべき情報を得るべく、美波に詰め寄った。

「美波！ 姫路さんが転校って、どういう事さ!？」

「どうもこうも、そのままの意味。このままだと瑞希は、転校しちゃうかもしれないの」

「このままって……まあ、この設備と姫路の体調を考えれば、納得するなという方が無理か」

「うにゃ〜。」

「あ〜。そうだよな」

一真達が周りを見回し、頭を抱えた。

Aクラスに負けた事で設備がランクダウンし、腐った畳はボロボロのござに、卓袱台はみかん箱。

最低の設備に最悪を加えた設備になった以上、瑞希の虚弱体質を知る者としては同様の結論。

それに明久が試召戦争を提案した理由でもある為、納得せざるを得ない。

「姫路の身体と教室の設備を考えれば、ありえない話ではないの」

「そうだよな……って事は、転校は両親の仕事の都合とかじゃないって事？」

「そう言う事。だから瑞希も対抗して“召喚大会で優勝して、Fクラスを見直してもらおう”とか考えてるみたいんだけど、やっぱり設備をどうにかしないと」

ふと、3人は“Fクラスをバカにされた”と怒っていた事を思い出す。

これも当然だが、学力はあるのに最低クラスに所属している事自体も、問題としては十分な代物。

「わかった。そういうことなら、何としても雄二を焚きつけてやるさ！ 協力してくれるよね、相棒？」

「当たり前だ。俺達の為に怒ってくれてる以上、ここで立ち上がらにゃ男じゃないだろ。相棒」

「いや、仲間だろう僕達」

「もはや、ファミリーだニャー！」

「そうじゃな。ワシもクラスメイトの転校と聞いては、黙っておれん」

「それじゃまず、雄二に連絡を取らないとね？」

明久は携帯を取り出し、雄二へと連絡。

少し時間がたって……

「あ、雄二？ ちょっと話が……え？ 雄二、何してるの？ ……」

雄二！？ もしもし！ もしもーし！」

と、何やら意味不明の会話が行われたらしく、通話が切られた。

「坂本はなんて言った？」

「えっと、“見つかった”とか“鞆を頼む”とか言った」

「……何それ？」

「誰かに追われてるんじゃないか？ だから島田、その“使えない”

”って視線で見るのやめてやれ」

ここ最近、雄二は忽然と姿を消す事が多い。

その原因は……。

「大方、霧島翔子から逃げ回っているんじゃないか。あれはああ見え
て、異性には滅法弱いからの」

「そうすると、雄二と連絡を取るのには難しいね」

「そうでもないさ。むしろ、これはチャンスと見ても良い」

「「だにや（ね）」」

一真は明久と当麻と祐輝に視線をやり、頷きあう。

雄二を焚きつける為の方法を、4人して同じ方法を思いついたのだ。

「島田、秀吉、ちょっと協力してくれ」

「それは良いけど……坂本の居場所はわかってるの？」

「大丈夫だよ。何も雄二だけが、相手の考えを読める訳じゃないか
らね」

「じゃあ明久、雄二を頼む。タイミングはそっちに任せるね」

「了解」

「がんばるニヤー」

それから数分間……。

「じゃあ頼むぞ？」

「……こんなので、坂本を引っ張り出せるの？」

「大丈夫だ。おっ、来た来た」

一真の携帯に連絡が来て、それを美波に手渡す。

「もしもし坂本？ ……ちょっと待って、今代わるから」

「（頼むぞ秀吉）」

「（了解じゃ）……雄二、今どこ？」

と言った途端、すぐに秀吉は携帯の通話をオフにした。

「ホント、秀吉の声真似はすごいな。本当に霧島かと思ったぞ？」

「当然だ（一真の声）」

「……それやめてくれ、自分の声は流石に気味が悪いから」

「それ試召戦争のとき使えるんじゃない？」

それから少しして、雄二を伴った明久が戻ってきた。

「そうか。姫路の転校か……そうになると、喫茶店の成功だけでは不十分だな」

「不十分？ どうして？」

「簡単な話さ。さっきも言ったけど、莫塵やミカン箱と言った設備、健康を害する教室そのもの、姫路の学習面の成長を促せないバカ揃いのクラスメイト。喫茶店の成功だけじゃ、とても解決できない」

「そうじゃな。1つ目もそうじゃが、2つ目や3つ目も難しいのう」
「そうでもないさ。1つ目は喫茶店の利益で何とかなるし、3つ目は姫路と島田で対策を練っているんだらう？」

ふと思い出すのは、召喚大会の事。

確かに、Fクラスで優勝者が出る事があれば、その面は解決ができる。

「この前、瑞希に頼まれちゃったからね。“どうしても転校したくないから、協力してください”って。召喚大会なんて見世物にされるみたいで嫌だったけど、あそこまで必死に頼まれたら、ね？」

「ならいっそ、俺と明久と祐輝と当麻も参加するかな？ 俺達のコンビネーションなら、良い線いけると思うし」

「コンビネーションは確かに良いけど、あんたら強すぎるじゃないじゃない。そんなにアキと組んで、勝てる訳ないでしょ、アキが途中で流れ弾で死ぬじゃない」

グウの音も出なかった。

しかもトーナメントは試合によって科目が違う為、良くて決勝悪くて秒殺という極端コンビだった。

「一応エントリーはしてくれ。運良く勝ち上がれば喫茶店の宣伝になるし、一気に問題が無くなる」

「わかった。となると、2つめがやっぱネックだな」

教室の改修は、流石に生徒や喫茶店の利益では賄えない。

どうやろうと、業者の立会も必要になる以上学園のバックアップが必要になる。

「どうするも何も、学園長に直訴したらいいだろ？」

「やっぱそうなるよな。けど学園長は偏屈だって噂だし、大丈夫か？」

「あんな、ここは曲がりなりにも教育機関だぞ？ 幾ら方針とは言え、生徒の健康に害を及ぼすような状況であるなら、改善要求は当然の権利だ」

「いや、あのババアはちょっとまずいニヤー」

「まあ大丈夫なんじゃないあのぬらりひょん位」

「それなら、早速学園長に会いに行こうよ」

思い立ったが吉日というように、明久がそう提案した。

一真達も頷き、美波も嬉しそうに頷く。

「それじゃ、さっさと行くか。一応行くのは、俺と明久と雄二と当麻と祐輝……秀吉も一応来てくれないか？」

「そうじゃの。そのメンツでは、とてもお行儀よくとはいかんじゃろって」

「失礼な。じゃあ島田は、学園祭の準備計画でも考えておいてくれ」
目指すは学園長室。

明久、雄二、一真、秀吉、当麻、祐輝は、一路そこへと向かった。

『……賞品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月グランドパークに……』

新校舎の一角、学園長室前にて。

辿り着くや否や、出迎えたは言い争いの声。

「どうした、明久？」

「いや、中で何か話をしているみたいんだけど」

「うむつ、何か言い争っておる様じゃな」

「問題ないニヤー」

「だね」

それに対し、疑問に思つても今はそつちのけ。

今はとにかく、問題の解決こそが自身の最優先事項。

「とりあえず、学園長が居るとわかつたんだから、入っちゃまおうぜ
?」

「ああ。さつさと中に入るぞ」

「失礼しまーす」

「おぬしら……」

早速学園長室をノックするや否や、一真、雄二、明久、当麻、祐輝
は中へ。

秀吉も呆れつつ、それに続く。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

そこにいたのは、長い白髪と妖怪じみた容姿（笑）が特徴の藤堂カヲル学園長。

試験召喚システム開発の中心人物である。

研究者寄りなので、先程のガキ共という発言等の規格外な所が多い人物。

「やれやれ、取り込み中だと言うのに、とんだ来客ですね。これでは話を続ける事も出来ません……まさか、貴方の差し金ですか？」

それに相対していたのは、鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い、竹原教頭。

メガネをいじりながら、学園長を睨みつける。

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？ 負い目があると云う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」

「………そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう」

負い目、隠し事。

教育現場に似つかわしくない単語が次々と出てくる会話を終え、教頭は学園長室を出て行った。

「ん？」

一真はふと、教頭が最後視線をやった個所を見て、疑問符を浮かべた。

……が、めぼしい物は何もなく、気の所為かと思いい気にするのをやめた。

「んで、ガキ共。アンタらは何の用だい？」

「今日は学園長にお話があつてきました」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら、教頭の竹原に言いな。それと、まずは名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな」

一真がツツコミを入れそうになるのを、秀吉が制した。

礼儀的には、当然の事。

「失礼しました。俺は2年F組代表の坂本雄二」

「同じく、2年F組の木下秀吉じゃ」

「そしてこの4人が……こちらが2年を代表するバカで、こちらは同じく超危険人物達です」

雄二が勝手に明久と一真と祐輝と当麻を、わかりやすく紹介。

「ほう……そうかい。あんた達がFクラスの坂本と吉井と神竜と破神と大神かい？」

「ちよつと待つて学園長！ 僕たちはまだ名前を言ってませんよね！？」

「木下というと、Aクラスの木下の弟かい？」

「おいこらバ……むうううっ！！」

「ハア」

罵倒しようとした一真を、秀吉が口を塞いだ。

ここで騒ぎを起こせば、全てパーになる故に。祐輝と当麻もそれを知ってかため息だけにした

「気が変わったよ、話を聞いてやるうじやないか」

「ありがとうございます」

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノ口」

「わかりました」

まるで模範的な生徒を主させる佇まいに、5人は疑問符を浮かべた。先程の一真の様に、すぐさまボ口を出すと思っただけに。

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました」

「そうかい。それは暇そうで羨ましい事だね」

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です」

だがそれは、すぐに杞憂に終わった。

「学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます」

相当怒っているのか、所々で言動に綻びが生じ危険な単語がちりばめられている。

「要するに、隙間風が吹き込む様な教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、という訳です」

そんな慇懃無礼な雄二の話が終わると、学園長は何やら思案顔にな

えますか、ババア」

「そうですね。教えてください、ババア」

「理由なく断られて納得出来る訳ないにゃー、妖怪ババア」

「まったくそうですねよクソババア」

「まったくこれだからぬらりひよんのクソババアは」

「堂々と妖怪呼ばわりするんじゃないよぼさぼさのクソジャリ！」

「……お前たち本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」

「……申し訳ない」

学園長は呆れた顔で5人を見て、秀吉は頭を下げた。

「理由も何も、設備に差を付けるのはこの学園の教育方針だからね。ガタガタぬかすんじゃないよ、このなまっちょろいガキども」

「確かにそうですね、俺達はともかく体の弱い生徒が……」

「……と、いつもなら言っているんだけどね。可愛い生徒の頼みだ、こちらの頼みも聞くなら相談に乗ってやるんじゃないか」

それを聞いて、雄二は黙り込んでしまった。

一真達も、何かがある……そう直感で感じ取る。

「その条件って何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「ええ。俺達も出ようかと思ってました」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

優勝賞品とは、“トロフィー”と“賞状”と白金の腕輪。

そして副賞として、如月グランドパークプレオープンペアチケット。

準優勝者にも賞品はあり、これには“盾”と“賞状”と白銀の腕輪
こちらにも、プレオープンチケットは授与される。

3位入賞者には賞状と琥珀の腕輪とプレオープンチケット

そのペアチケットについて説明されると、雄二はビクツ！と身体をはねさせた。

「で、それが何か？」

「話は最後まで聞きな。あわてるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「はい、知りません」

「堂々と言っんじゃないよ！……まあ良いさね。この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」

先程聞こえた話の中に、如月グランドパークという単語があった。それに関係してるのかなと、明久達はそう決定付けた。

「回収？ それなら、商品に出さなければ良いじゃないですか」

「そうできるならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ」

「契約する前に気付いてくださいよ、学園長なんだから」

もっともな話である。

「うるさいガキだね。腕輪の開発で手一杯だったんだよ！ それに悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」

「けどチケットで良かったじゃないか。腕輪に問題があるならまだしも、それなら問題としては軽い」

そこで学園長の表情が崩れた事を、雄二は見逃さなかった。

「で、良からぬ噂ってのは？」

「如月グループは、如月ランドパークに1つのジnkクスを作ろうとしているのさ。“ここを訪れたカップルは幸せになれる”ってジnkクスをね」

「ジnkクス？……どうやってです？」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、何だと！？」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる雄二。

「どうしたのさ、雄二？」

「慌てるに決まってるだろうが！今ババアが言った事は“プレオープンプレミアムチケットでやってきた2組のカップルを、如月グループの力で強引に結婚させる”ってことだぞ！？」

「別に言い直さずとも、わかっておるぞい？」

「その2組のカップルを出す候補が、我が文月学園ってわけさ」

「学園長回収したら僕にください」

「黙れ！万年イチャイチャ夫婦が！！！」

文月学園にはその性質上、数多くのスポンサーが存在する、如月グループも当然、そのスポンサーの1つ。

「くそつ、うちの学校は何故か美人揃いで、試験召喚システムって話題性もたつぷりだからな」

「それに加えて、学生から結婚まで行けばジnkクスとして申し分ないだ。候補としてこれ以上の学校はないだろうな」

「まあそうだろうね」

「面倒だニヤー」

「ふむ。そっちの死神もそうだが、流石は神童と呼ばれていただけはあるね。頭の回転はまずまずじゃないか」

雄二と一真が神童や死神と呼ばれていた事は、あまり知られてはいない。

それを知っている辺り、流石は学園長と言ったところか。

「雄二、とりあえず落ち着きなよ。如月グループの計画は別にそこまで悪い事でもないし、第一僕らはその話を知ってるんだから、行かなきゃ済む話じゃないか」

「……絶対にアイツは参加して、決勝進出を狙ってくる……行けば結婚、行かなくても“約束を破ったから”と結婚……俺の、将来は……！」

「……どうやら、安請け合いしたらしいな。妙な所で明久よりバカだよな、こいつ」

呆れたように言う一真の意見を余所に、学園長は言葉をつづけた。

「ま、そんなワケで本人の意思を無視して、うちの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ」

「つまり、交換条件ってのは……」

「そうさね。“召喚大会の優勝賞品および準優勝賞品”と交換。それが出来るなら、教室の改修くらいしてやろうじゃないか」

一真達は、目を見合わせた。

それも、良からぬ事絡みで。

「無論、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネするんじゃないよ？」

譲って貰う事も不可だ。アタシはお前達6人で召喚大会の決勝と三位決定戦に進出しろと言っているんだからね」

考えてた事をモロに言われた為、苦虫をかみつぶしたかのような顔をする一真達。

5人の考えていた事に感づいて、呆れたように5人を見る秀吉。

「まあ落ち着くのじゃ、5人とも。幸いワシ等は6人おるし、これでチーム分けはできる」

「じゃあ僕たち6人が決勝進出と3位入賞したら、教室の改修と設備の向上は約束してくれるんですね？」

「何を言っているんだい？ やってやるのは教室の改修だけで、設備についてはうちの教育方針だ。変えてやる気はないよ」

こんな事で設備を変えては、他のクラスに申し訳が立たない。何事も例外的な特別を許せば、必ずやどこかで綻びが生じるものである。

「ただし、清涼祭の売り上げでどうにかするのは別さね。今回だけは見逃してやってもいい」

「じゃが、喫茶店を経営しつつ大会を勝ち抜くと言うのも難しい話じゃぞい。そこを何とか……」

「やめとけ秀吉。俺達はおくまでも頼む側だから、話を引き受けてくれただけで儲けものだと思え」

「そう言う事だ。ババアに譲る気がない以上、この取引に応じるしか方法はない」

「あゝ、めんどいニヤー」

「だね」

明久と秀吉は顔を見合わせ、頷き合う。

不満ではあるものの、事実だけに納得せざるを得ないと結論付けた上で。

「……わかりました。この話、引き受けます」

「ワシも、及ばずながら力になるぞい」

「そうかい。それなら、交渉成立だね」

“計画通り”という顔で、嬉しそうにする学園長。

それを雄二が見逃さず、一步前に踏み出した。

「ただし、こちらからも提案がある」

「何だい？ 言ってみな」

「俺達6人は最後に当たる物として、召喚大会は2対2のタッグマッチ。形式はトーナメント所為で、1回戦が数学だと2回戦は化学、といった具合に進めていくと聞いている」

プロバガンダの意味合いも強い以上、試合の派手さに欠ける要素は排除される物である。

特に今回は、新技術のお披露目もある以上、その辺りは念入りだった。

「それがどうかしたのかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「ふむ……良いだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それ位なら協力しようじゃないか」

雄二は先程より目つきを更に鋭くし、一真達も何やら妙な引つかかりを感じていた。

「で、ペアだけど……」

「いや、お前と明久のペアはダメだ。俺と秀吉は前回の戦争では殆ど指揮や裏方だったから、召喚獣の扱いには慣れてない」

「ああ、そっか……となると俺と祐輝、明久と雄二、当麻と秀吉がペアとしては最適かな？」

一真は明久を除くと、相性が良いのは幼馴染であり、パートナーでもある祐輝。

それに明久も、一真を除くと付き合いが深いのが雄二である。当麻と秀吉がこの中だといちばん相性がいい

「さて、そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、決勝戦まで進めるんだろっね？」

そう言われ一真は祐輝と、明久は雄二と当麻は秀吉と拳を合わせる。

「無論だ。俺達を誰だと思っている？」

「絶対に優勝して見せます。そっちこそ、約束を忘れないように！」

「うむっ、優勝して見せるのじゃ」

「ああ。やろっぜ皆」

「簡単だニヤー」

「やってみせる」

全員で、頷きあう。

「それじゃ坊主ども。任せたよ！」

「」「」「おっよっ！」「」「」「」

「任せるのじゃ！」

こうして、明久と雄二による“文月学園最低”コンビ
そして一真と祐輝による“文月学園学園最強”コンビ

さらに当麻と秀吉による“嘘つき美少女コンビ”の3つを合わせた、“文月最低最強チーム”が誕生することとなった。

「フジは男じゃとこの子」

第19話 文月最低最強チーム(後書き)

投票のほうをよろしくお願いします!!!!

第20話 問題発生！（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、ウエイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

「？かわいらしさ　？統率力　？行動力　？その他（）」

また、その時のリーダー候補も挙げてください。

土屋康太の答え

『「？かわいらしさ」　候補……姫路瑞希&島田美波』

教師のコメント

甲乙つけがたいと言ったところでしょうかね。

吉井明久の答え

『「？可愛らしさ」　候補……姫路瑞希（訂正）　木下秀吉（訂正）
島田美波』

教師のコメント

用紙についている血痕が気になるところです。

神竜一真の答え

『「？可愛らしさ」　候補……木下優子、山口怜奈、柴崎彩夏、工藤愛子、水野朱里、武本恵』

教師のコメント

全員Aクラスってどういふことですか……

坂本雄二、大神祐輝、破神当麻の答え

『「その他（結婚相手）」 候補……霧島翔子（十六夜明日菜）、
（水野朱里）」』

教師のコメント

どうしてAクラスの結婚相手の皆さん（笑）が、用紙を持って来てくれたのでしょうか？

第20話 問題発生！

清涼祭初日の朝。

Fクラスの教室はいつものような小汚さはなく、中華風の喫茶店へと変わっていた。

まあ食べ物を取り扱う店だから、小汚いと人が寄りつく訳がない。

「このテーブルなんて、ぱっと見は本物と区別がつかないよ」

そこに並べられたテーブルは、みかん箱を重ねてその上にクロスをかけた物。

演劇部である秀吉作で、小道具作りでの経験を生かした一品。

「ま、見かけはそれなりの物になったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」

秀吉がクロスをまくと、そこには汚いみかん箱。

少なくとも、食べ物扱う店では適切な代物ではない以上、イメージダウンは免れない。

「これを見られたら、店の評判はガタ落ちね」

「まあ大丈夫だろ。こんなところまで見る訳ないし、見てもきつと見なかった事にしてもらえるって」

「そうですね。態々クロスを剥がしてアピールするような人は来ませんよね」

「おいおい姫路、たかが学園祭の喫茶店で営業妨害するバカはいないって」

「つま、いたら僕達が逮捕するから大丈夫だけどね」

「いたら、委員に報告するニヤー」

少なくとも、そんな事をするメリットは全然ない。しかも、このクラスには、風紀、生徒会、選挙管理の三つの委員会の重役がいる。室内の装飾もそれなりであり、瑞希は上手く行くという期待で胸をいっぱいにして見回す。

「……………飲茶も完璧」

「おわっ!」

「むっ、ムツツリーニか……………厨房はどうだ?」

「……………味見用」

明久の後ろにいつの間にかいたムツツリーニは、木のお盆を差し出した。

その上には、陶器のティーセットとゴマ団子

「わぁ……………おいしそう」

「土屋、これウチ等が食べちゃっていいの?」

「……………(コクリ)」

「では、遠慮なく頂こうかの」

瑞希、美波、秀吉は手を伸ばし、作りたてで温かいゴマ団子を勢いよく頬張る。

「お、おいしいです！」

「本当！ 表面はカリカリで、中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところも良いのう」

「やっぱり女の子。甘い物が好きなんだなあ、3人とも」

明久の言葉にある“ミス”があつたのだが、誰1人ツツコまなかつた。

「お茶も美味しいです」

「本当ね……」

おいしさにトリップしているのか、2人の目がトロロンと垂れた。

それを見て、一真、明久、ムツツリーニ、当麻、祐輝も食欲をそそられる。

「それじゃ僕も貰おうかな？」

「ああ。たまには甘い物もよさそうだ」

「……………（コクコク）」

「甘い物は好きだニヤー」

「僕もね」

さらに残ったゴマ団子を、一真と当麻と祐輝は一口。

「……………ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず辛すぎずの味わいがとても……………ンゴパっ！！……………」

一真と当麻と祐輝と明久の口からありえない音が出て、目がグルンと垂れて白目をむく。

瑞希たちと違う意味で、一真と当麻と祐輝は、トリップした。（明

久は無事)

「あ、それはさっき姫路が作った物じゃな」

「見たなら止めてよ！ 一真と当麻と祐輝がなんかぐったりとして動かないんだけど!？」

以前姫路の料理を食べてない明久は、初めて体感したその破壊力に絶句した。

「うーっす。戻ってきたぞ……って、どうして一真達が倒れてるんだ？」

そこへ雄二が戻ってきた。

「あ、雄二。おかえり」

「一真達はじゃな……」

「ん？ なんだ、美味そうじゃないか。どれどれ？」

ゴマ団子を見るなり、雄二は“明久の食べかけ”を、何の躊躇いもなく口に運んだ。

「……大した男じゃ」

「雄二。君は今、最高に輝いてるよ」

「？ お前らが何を言っているのかわからんが……ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘すぎず、辛過ぎる味わいがとっても……ンゴパっ!!」

その姿に、デジャブを感じる男2人。

「……ねえ瑞希、今度は何を入れたの？」

「えっと、塩酸を入れました」

「姫路さん、一真が以前言ってた事忘れたの？ お願いだから、薬品で味のイメージをするの……」

「ん？ 雄二じゃないか……お前も、そうなのか？」

「よくきたニヤー」

「やあ雄二」

「ああ……何の問題もない」

突然の一真と雄二と祐輝と当麻の言葉に、一旦話を止める事になった。

「あの川を渡ればいいんだろっ？」

「あれは、姉さん！」

「あの人もいるニヤー」

「ああ……あそこに船番が居るぞ？ 行ってみよう」

「ゆ、雄二！ 一真！ 当麻！ 祐輝！ その川はダメだ、渡ったら戻れなくなっちゃう！！」

「しっかりするのじゃ一真！！」

雄二と大輝に明久が、一真と当麻に秀吉が必死に心臓マッサージ。

「六万だと！？ バカを言え、普通渡し賃は六文と相場が決まって

……はっ！？」

「ふざけんな！ ぼったくりもいい所……はっ！？」

「切り殺すニヤー……は！」

「撃ち殺す！……は！」

4人の蘇生は成功し、尊い命が救われた。

「……姫路、お願いだから厨房に立たないで。雄二は別にくたばっ

て良いけど、これが一般客に出回ったら確実に営業停止にされちゃうから」

「やばいことになるのは間違いないニャー」

「そうだよ姫路さん。雄二だから良いけど、薬品を使った物を出したりしたら問題だから」

「おいコラお前ら、俺は良いとはどついう事だ？」

「まあまあ、雄二」

「……そうします。本当に、ごめんなさい」

しよんぼりという瑞希に、一真達は罪悪感にさいなまれた。

「明久、一真、当麻、祐輝いつかキサマらを殺す」

「上等だ、殺される前に殺ってやる」

「やってみるよこのゴリラが」

「その前に殺してやるニャー」

「僕何もしてない!」

……が、それからの笑顔のやり取りにすっかり忘れ去られた。こんな彼らは仲良し5人組。

「所で雄二は、どこに行っておったのじゃ？」

「ああ、ちよっと話しあいにな」

学園長室にて、例の試験科目の指定をしてきた所である。でもそんな事を言う訳にもいかず、適当に誤魔化した。

「ご苦労だった。喫茶店はいつでもいけるぜ？」

「ばっちりじゃ」

「……お茶と飲茶も大丈夫」

唯一の心配事は、瑞希作の料理が混ざっているかという事。これだけでも、相当な不安要素ではある。

「よし、少しの間喫茶店は一真と秀吉、ムッツリーニ、当麻、祐輝に任せる。俺と明久は、一回戦済ませてくるから」

「あれ？ あの、吉井君と坂本君も出るんですか？」

「俺と祐輝、当麻と秀吉も出るよ？ 折角だからね」

学園長は6人に“チケットの裏事情について誰にも話すな”と緘口令を敷いていた。

「あれ？ でもアキが坂本で、神竜が大神とで破神が木下とペア？」

「こいつらも出たといって言うけど、召喚の経験が少ないからな。俺達はフォロワー役だ」

「そっか……」

一応、瑞希の為に頑張ると言う事なので、美波も嬉しそうにする。ついでに言うと、この場に瑞希が居る為大まかな事は言えない。

「もしかして、賞品が目的なんですか？」

「うん。一応、そういう事になるかな？」

目的と言えば目的だが、理由と向こうの動きの内容自体は別方向だった。

「……誰と行くつもり？」

「え？」

「吉井君。私も知りたいです、誰と行くことと想っていたんですか？」

そこで、攻撃色の美波が明久に詰め寄った。

更に瑞樹まで、明久に詰め寄り始める。

「明久は俺と……」

「霧島のデートの為に協力してほしいって、雄二直々に頼まれたんだよ」

「なっ!？」

雄二がフォロー？ を入れようとしたのを、一真が遮った。
ちなみに余計な事をしようとした罰も含めてある。

「じゃあチケットは、坂本にあげるつもりなの？」

「うん、そうだよ。僕の興味はチケットよりも腕輪だし、チケットなんて貰っても一緒に行つてくれる宛てなんて全然ないからね」

「そういう事。まあ俺達で優勝と準優勝と三位入賞した場合は、売って金にするつもり」

賞品として出される腕輪は、優勝の場合が“白金の腕輪”で、準優勝の場合が“白銀の腕輪” 3位が“琥珀の腕輪”

白金の腕輪は、召喚獣を2体同時に呼び出せるタイプと、立会人になれる(教科指定可能)タイプの2つ。

白銀の腕輪は、召喚獣を使用者が見えている範囲でレポートできることと武器を戦闘中に変えることのできるタイプと、立会人が展開しているフィールドに別のフィールドを割り込むことのできるタイプの2つ。

琥珀の腕輪は、自分の召喚獣の能力を10分間2倍にすることのできる能力と立会人になれる(教科指定不可)

一応表向きは、これらで行く事しておいた一真達だった。

「おいこらテメエ！ 俺の人生をなんだと……」
「つと、そろそろ時間だよ雄二。早く行かないと」
「……くっ！ おっ、覚えている……！」

まるで小悪党の様な捨て台詞を残して、雄二と明久は教室を後にした。

「さて祐輝、俺達もそろそろ」

「そうだね」

「俺たちもだニヤー」

「そうじゃの」

と、一真と祐輝、秀吉と当麻が教室を出ようとしたところで……

ガシッ！！

「ねえ神竜、木下、破神、大神、さっきのチケットを売って話だけど……」

「幾らで譲ってもらえますか？」

「……悪い先約があるんだ」

「俺は朱里といくニヤー」

「僕は明日菜とデートに使うからね？」

「うっうむ。優先すべきは雄二と霧島じゃからの？」

と言って納得して貰った上で、一真と祐輝、秀吉と当麻は逃げ去った。

「……姫路、だんだんFクラスに馴染んでるな？」

「怖かったニヤー」

「うむっ……早く設備を何とかしてやるか、明久をけしかけねばな

らんな」

「まずい震えが」

4人は試合以上に、瑞希の壊れ具合の方が心配だった。

それから、校庭に作られた特設会場にて。

決勝は、AブロックとDブロック、BブロックとCブロックによる準決勝の勝者で行われる。

明久と雄二はDブロック、大輝と秀吉はCブロックの為、決勝、準決勝で当たる様には考慮されていた。

「えー、それでは試験召喚大会1回戦を始めます。三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

で、こちらはBブロックの一真と祐輝。

一回戦の科目は数学であり、一真の苦手科目である。

「やろう、一真」

「任せとけよ、勝ちに行くぞ祐輝」

一真と祐輝が会場に上がり、相手と対峙。

対戦相手は、2・Eの中林宏美と三上美子。

「げっ、神竜一真に大神祐輝!?!」

学年を代表する危険人物と呼ばれるだけあって、一真と祐輝の知名度は悪名が大きく起因する。

「げって何だよ！」

「ま、危険人物の神竜一真に大神祐輝とはいえ、たかがFクラスコ
ンビ。楽勝ね」

「祐輝、練習にはちょうどいい相手だ。気楽にいくぞ」

「何よ、たかがFクラスの分際で！！」

「お前らもEクラスなら大して変わらんだろうが！！」

がんの飛ばしあいを始める一真と中林代表。

それぞれ、祐輝と三上になだめられ、開始線へと戻る。

「では、始めてください」

「『『『サモン！』『』『』」

4人の掛け声で、場に召喚獣が姿を現した。

改造学ランを纏い、手にトンファーを持った一真の召喚獣。

チームライフルにチームサーベルという、祐輝の召喚獣がFクラス
タッグとして。

野球のプロテクターを纏い、ミットとバットを持つ中林の召喚獣。
白いローブをまとい、手に本を持った三上の召喚獣がEクラスタッ
グとして姿を現す。

『Fクラス 神竜一真&破神当麻 数学635点&528点』

VS

『Eクラス 中林宏美&三上美子 数学95点&82点』

『え、何その点数。』

「んじゃ祐輝、あの三上だっけ？ そっちの召喚獣相手頼む」

「了解」

「眼中にないって事！？ 目にものを見せてやるわ！！たかが点数差がどうって言うのよ！」

完全に冷静さを失った中林の召喚獣が、一真の召喚獣めがけて襲いかかる。

だが……。

「邪魔、すつこんで」

と、トンファーで殴る、それが中林の召喚獣腹を貫いた。さらに仕込んであった爆薬で爆破させる

「なっ！？」

「Aクラスにこそ負けたけど、BやDとお前ら以上の相手と戦ってきたんだ。お前らごとき敵じゃない、点数差これだけあるしな、“元学年主席”と“元学年次席”嘗めんなよ？」

Eは基本部活中心の生徒が多く、試験召喚戦争に対して興味はない。その為、一真と祐輝の事やFクラスについてもてんで疎かった。

「えい、やあ！」

「遅いよ！」

相手が本を振り上げ襲いかかるのを、祐輝が受け止めそのままガンブレードで狙撃。

召喚獣は怪力な上に、体形も異なる故に操作も難しく、単調な攻撃ばかり続く。

まあ例外として、観察処分者で操作に慣れてる明久と武器の精密なファイリングがある一真、当麻、祐輝の場合、それ以上に高精度な

動きが出来る。

「うー、あんまりやってないからちょっとやりにくいね」

「そんなもんだって。でも大体はつかめただろ？」

「ん？まあ一真の足手纏いにはならないだろうね」

一真は興味なさげに指示を出し、三上と中林の召喚獣を貫いた。身動きが取れなくなると、ゆっくりと両手のトンファーを2人の召喚獣に突き付ける。

「そっそんな……こんな、あっさりと……？」

「俺に狙われた時点で、この運命はきまっていたんだ」

ゆっくりとトンファーが振り下ろされ敵召喚獣の頭を貫き消滅。

「俺の攻撃は、絶対をもって当たる」

「勝者、神竜・大神ペア」

立ち会いの教師により勝者が告げられ、敵側のペアは膝をつく。祐輝と一真は、勝者らしく余裕ある佇まいでその場を去っていく。

「久々にあの台詞聞くね」

「さつさと戻ろうぜ？仕事しないところ殺されちまう」

「だね」

2人は一路、喫茶店へと駆け足で戻る事に。

「マジできつたねえ机だな！これで食べ物扱っていいのかよ!？」

戻ってきた教室で2人を出迎えたのは、騒ぎの声だった。

「うわ……確かに酷いな……」

「クロスでごまかしていたみたいだね」

「学園祭とはいっても、一応食べ物のお店なのに……」

周りの客も、それを見て自身のテーブルのクロスを捲りあげる。

確かにそこには小汚いみかん箱が重なっている為、衛生上良くない。

「何だよあいつら？」

「ああ、良い所に来た神竜に大神！」

先に当麻たちは帰っていたらしく

「あの様子からして、営業妨害じゃな。まずいぞ一真、ここでの悪評はかなり痛手となる」

「俺たち腕章もらってきてないからニヤー」

一真は懐に手を入れて、秀吉に耳打ち。

「一応用意はできるが……あっても2つ程度じゃぞ？」

「構わねえよ。少なくとも今は、アピールできさえすればいい」

「了解した」

一真の指示を受けて、秀吉が教室を駆け出した。

営業妨害をしているのは2人、中肉中背の坊主とソフトモヒカンの男。

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表ゴペツ！」

一真はポーチから取り出したスタンガン（20万ボルト）を、殴る様に押し付けた。

「代表はただ今不在の為、この私が承ります。何かご不満でも？」

手に持つスタンガンを除けば、模範的態度ともいえる一真の態度と佇まいだった。

「不満も何も、今連れがスタンガンで殴られたんだが……？」

「それは私のモットー“20万ボルトから始まる交渉術”でございます」

「ふ、ふざけんなよこの野郎……何が交渉ふざげやあつー!!」

抗議すべく立ち上がった坊主が、もう一つ取り出されたスタンガンでダメージを負った。

先程使用した20万ボルトをしまい、先程より大きめの物を取り出す。

「そして、“30万ボルトでつなぐ交渉術”でございます。メインディッシュにこちらの“トンファーで締める交渉術”が待っておりますので」

「わ、わかった！こちらは夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから、交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちよつと待てや常村！お前、俺を売ろうと言うのか!？」

2人の名が判明した所で、とりあえず一真は“常夏コンビ”と命名した。

「なんだ？何の騒ぎだ？」

「一真、何してるの!？」

そこへ明久と雄二が戻ってきた。

一真は得意のアイコンタクトを2人に送り始める。

「(営業妨害だ)こちらのお客様が、不満を申し出ております」

「(やはりか)これは失礼いたしました。では……」

雄二はそう言うや否や、ソフトモヒカンの常村を殴り倒した。

「では代表として、まず“パンチから始まる交渉術”を。次には“キックでつなぐ交渉術”、最後に“プロレス技で締める交渉術”にて受けさせていただきます」

「い、いや、もう十分だ。退散させてもらおう」

「そうですか……では」

雄二がキックで常村を蹴飛ばし、夏川の方へ飛ばす。

そして一真がトンファーを手に、ゆっくりと歩み寄る。

「おいつ、俺たちもう何もしてないよな!? どうしてそんな物をげぶるあっ!!」

「お前もどうしてそんな大技をぐぶるあっ!!」

一真が夏川をトンファーで殴り。雄二が常村にバックドロップをかけた。

「それでは、お帰りくださいませ」

「お、覚えてるよっ!」

よろよろと坊主を抱え、走り去るモヒカン。

それでも、やった事の効果は出ている訳で……

「流石にこれじゃ、食ってく気はしないな」

「折角おいしそうだったんだけどね」

「食ったら腹壊しそうだからなあ」

客から不安な声が出てきて、早速一真達は対処しようとする。だが、それを遮るように教頭の竹原が席を立った。

「店、変えるか」

「そうしようか」

「あ、お客さん！」

それに合わせるように、他のお客も次々と出て行くこととする。

集団心理という物で、こうなれば次々と悪評は広まっていくだろう。

「先程は失礼しました！ こちらのミスで一時的にこんな物を使っていました。ただ今本物のテーブルとお取り換えいたします！」

「すまぬ、遅くなった！」

一真の進言に合わせるかのように、秀吉、当麻、祐輝をはじめとする男子生徒が立派なテーブルを運んできた。

風評対策にもなり、これで良しと一息。

「良くやった一真」

「ああ……けどどうなってんだよ？ たかが学園祭の喫茶店で営業妨害だなんて。しかもあれ教頭じゃねえかちつ、敵は教頭か」

「さあな……こうしちゃいられねえぞ。早く次のテーブルを確保しないと」

「俺（僕）も手伝うニャー（よ）」

「そうだね。で、どこ行くの？ 2回戦まで一応時間はあるけど」
「それはだな……」

所変わって……

「吉井君に神竜君、破神君、大神君、坂本君も！ 今日という今日は、許しませんよ！」

廊下にて、化学の布施教諭の怒声が響き渡る。
そして……

「明久、一真、祐輝、当麻、走れ！ 捕まったら生活指導室行きだぞ！！」

「『鉄人の根城！？ 冗談じゃない！！』」
「だったら走れ！ 向こうは運動不足なのか、そんなに早くない！」

3人は先ほど応接室から盗んだテーブルを担ぎ、追手の教師から逃げていた。

「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるんですか……」

それを追うは、布施教諭と長谷川教諭。
ただし3人の体力についていけないのか、2人ともなかなか距離を詰められずにいる。

「こうなったら、西村先生に応援を……」

「まずい、鉄人が来たら確実に捕まるよ！」

「一真！当麻」

「おう！」

「分かつてるニヤー」

当麻はポケットからスーパーボールを取り出す。それをひょいと投げて、一真が蹴る

「うわっ！」

指弾は布施教諭の指に命中し、携帯電話は廊下に転がる。それにまた当たり、携帯が飛ぶ

「それでは御機嫌よう、先生方！」

「一真、連絡は？」

「ああ、してある」

布施教諭が携帯を拾っている間に、5人は全力ダッシュ。

撒いた処でテーブルを放置し、次へ。

放置したテーブルは回収班が来て、喫茶店へ運ぶ算段となっている。

「よし、次は職員室そばの休憩室を攻めるぞ！　それが終わったら、2回戦だ！」

「はあっ……僕と一真と雄二と当麻と祐輝は、いつか停学になる気がするよ」

「仕方ないだろ、他に手が無いのも事実なんだから！　ほら、早くぞ！」

「早くニヤー」

こうして、3人のテーブル泥棒の暗躍のおかげで、喫茶店の悪評のもととは解決した。

もうすぐ、召喚大会2回戦。

「次は英語だけど、大丈夫？」

「英語は大丈夫だと思う」

「……一真、僕、まずいんだけど」

「大丈夫だ。精密攻撃でうめる」

「だね」

第20話 問題発生！（後書き）

つと、投票を

第21話 お一人千円！？（前書き）

文月新聞 号外

『召喚大会 2-Fクラス所属の4ペア大健闘！』

清涼祭名物“召喚大会”において、2回戦が終了。

各ブロックにおいて激戦を勝ち抜いた学力戦士たちが、一般の方々の目に映る事となる。

その中に、2-Fクラスの4組のペアが快進撃を続けていた。

“姫路瑞希&島田美波ペア 通称『ゴミ溜めに咲く花コンビ』”

“神竜一真&大神祐輝ペア 通称『文月学園最強コンビ』”

“吉井明久&坂本雄二ペア 通称『文月学園最低コンビ』”

“大和大輝&木下秀吉ペア 通称『嘘つきと美少女コンビ』”

Fクラスと言えば最下層のクラスであるが、先の試召戦争においてDクラスとBクラスを破る快挙達成。

そのFクラスからの参加者は以上の8名のみであるが、その8名全員が3回戦進出を達成。

これはFクラスが最下層という認識を改めるべきかもしれない。という意見が多数出ております。

さあ、試召戦争から続くFクラス旋風はどこまで吹き荒れるのか？

第21話 お一人千円!?

2回戦も危な気なく勝ち進み、一真と祐輝は教室へ。

祐輝も一真とのコンビにはだいぶ慣れ、連携もとれるようになってきていた。

「今回は、一真に助けられたね」

「何言ってるんだよ祐輝、現実と一緒にだろ？」

「……別れましょう」

「ちょ、ちよっと待ってくれ！ これには事情が……」

ふと、殺伐とした雰囲気では別れ話が持ちあげられている、とあるカ
ツプルの姿が。

女子の手には、ある写真集が握られている。

「あれ、Bクラスのクソヤロー（根本）にCクラスのヒステリー（
小山）じゃないか」

「どうやら、あの写真集を見られたらしいね」

「是非見たかったな、あのクソヤロー君が慌てふためく姿を」

一真と祐輝は、巻き込まれる前にさっさと自分達の教室へ。

「ただいま……あれ？ 全然人がいないな？」

「だね？ どうしたのかな？」

自分達が駆け回り手に入れたテーブルと、その上で飲茶を楽しむ人たち。

……が居ると思ったが、教室には殆どお客さんがおらず、閑散としている。

「あ、一真に祐輝、おかえり。無事三回戦進出でしょ？」

「おっ、わかつてるじゃないか相棒」

「一真、今の相棒は僕なんだけど？」

「あっ、そうだったな。悪い悪い、勘弁してくださいな」

祐輝が拗ねたように言うと、一真もおどけた様に謝る。

「それで、雄二は？」

「トイレ行って来るってさ。それよりはいい、これ返すよ」

明久が手渡したのは、根本恭二写真集“生まれ変わった私を見て”である。

実は明久に頼まれ貸していたのだが、雄二が用意してあった為不要になったのである。

「お兄さん、すいませんです」

「いや、気にするな、ちびっ子」

「ちびっ子じゃなくて、葉月ですっ！」

そこへ、雄二の声と一緒に小さな女の子の声が響いた。
そこでガラッと扉が開かれ、雄二が姿を現す。

「んで、探しているのはどんな奴だ？」

と、雄二は連れて来た少女に声をかけた

「お、坂本。妹か？」

「可愛い子だな。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？」

「俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ」

2人はあつという間に、Fクラスの面々に囲まれた。

客が来る事がなく、ヒマなのである。(どうやらFクラスには口リコンがいるらしい)

「あ、あの、葉月は4人のお兄ちゃんを探しているんですっ」

「お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？」

「あう……わからないです……」

「？ 家族の兄じゃないのか？ それなら、何か特徴は？」

雄二は割と面倒見がよく、代表としても気配りはできている方である。
例外として、常に追い込む明久やよく敵対する一真達を除いて。

「えっと……剣を持つてるお兄ちゃんと、バカなお兄ちゃんと銃を持つてるお兄ちゃんとやる気なさそうなお兄ちゃんでした。とつても仲良しだったです」

「そうか……バカはたくさんいるんだが、もう3つで明らかだな」

「」「神竜と吉井と大神と破神だな」

「おい、何で俺達が即座に出る？」

「まったくだね。何で僕が銃を持ち歩くのさ」

「やる気無いとは失礼だニヤー」

「この日本で木刀を持ち歩くのはお前だけだ！というか、破神と大神は分かっただろ！！」

それと仲良しでバカと剣と銃とやる気なさげとなると、明久と一真と祐輝と当麻位しかない。

「あつ！ 剣のお兄ちゃんと、バカなお兄ちゃんと銃のお兄ちゃんとやる気ないお兄ちゃんだ！」

一真と明久と祐輝と当麻の姿を見るや否や、満面の笑顔で駆け寄る少女。

その少女は真つ先に明久に抱きついて、腹に顔を埋めた。

「ふむつ……明久、お前モテないからとついに」

「何を想像してるんだバカ雄二！！……えつと、一真達知ってる？ 僕に、小学生位の知り合いはいはずだけど？」

「えーつと……もしかして、ぬいぐるみの子じゃないか？ ホラ、

お前が観察処分者になるきっかけの」

「あれだと思っニヤー」

「あはは、そうだね」

「僕が……ああつ！ あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです、葉月です。折角のフィアンセとの再会なのに、失礼です！」

「恵が聞いたら楽しくなる台詞だな」

「その前にあの二人がだまって無いニヤー」

「いま録音したんだけど、使えるかな？」

「今すぐ破棄」

葉月ちゃんの言葉で、一真達以外の空気が凍った。
一真達は別のことを雑談している。

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ！」

「ぶあつ！？」

「あちゃー」

「やっぱりニヤー」

そこへ、美波と瑞希のコンビネーション技が明久に炸裂した。

「姫路に島田か。どうやら、勝ったようだな」

と、雄二はいたって落ち着いている。

「瑞希、そのまま首を真後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから！」

「こ、こうですか？」

「ちよつ、ちよつと待て！ 子供の言う事だろ！？」

「子供なんて酷いです！ 葉月のファーストキスもあげたんですから」

さらなる爆弾発言に、2人して激怒。

明久の骨が危ない音を出し始める。

「坂本、包丁持ってきて！ 5本あれば足りると思う！」

「吉井君、そんな悪い事をするのはこの口ですか？」

完全に殺意とみても過言じゃないオーラで身を包み、明久を痛めつ

ける2人。

一真はそれに気押されつつも、何とか弁解しようとして試みる。

「だっ、だから、ちよつと落ち着け！ キスって言っても……」

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

葉月が美波を見て、そんな事を言った。

「え？ お姉ちゃん？」

「あれ？ 葉月！ え？ 葉月とアキ達って、知りあいなのか？」

「ああ、去年ちよつとな。それより、まさか葉月ちゃんのお姉ちゃんって」

「ウチの事よ？」

技から解放された明久は、倒れこみつづつ2人を見比べた。

良く見ると目元などが良く似ている為、成程と頷いた。

「大丈夫か明久？ 災難だったな」

「……幾ら幼女暴行犯と誤解されたとはいえ、あんまりだよ」

「まあドンマイだ」

殆ど処刑なのだから、無理もないだろう

「吉井君はズルいんです……どうして美波ちゃんとは、家族ぐるみの付き合いなんですか？ 私はまだ、両親にもあつて貰ってないのに……もしかして、実はもう“お義兄ちゃん”になつちゃってたり……」

「姫路さん、とりあえず落ち着こう」

一真と明久、秀吉に当麻、祐輝は瑞希の変貌ぶりに流石に怖気を感じ

じ、一刻も早く設備の改善をと改めて心に決めた。

「ところで、この客の少なさはどういう事だ？」

雄二の言葉で、一真達は再度辺りを見回した。

「そう言えば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」

「ん？ どんな話？」

一真が屈み込んで、葉月の目線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かない方が良いつて」

店内の装飾は元々のボロ教室の面影をなくしており、掃除もきちんとしてある。

唯一の“汚い”はみかん箱テーブルだったが、それも解決している為どこにも不安要素はない筈。

「ふむ……例の連中の妨害が続いているんだろうな。探し出してシバき倒した上で、切り殺すか」

雄二の言葉で、一真は普段出さない剣のケースから一番殺傷能力の高い木刀を取り出す。

「例の連中つて、さっきの常夏コンビのこと？ まさか、そこまで暇じゃなくない？」

「ったく、学園祭で下らねえ真似しやがって………いつそのこと連行したほうがいいか？」

と、奥の方へとスタスタと速足で去っていき、腕にガトリング砲を

抱えて戻ってきた。

「……一真、そんなの持ってきてたの？」

「ガトリング砲だ。高かったけど、はい祐輝誕プレだ」

「ありがと、一真」

「その誕プレ間違ってるからな?!」

「問題ない」

これが神竜一真という男である。

だからこそ彼は、危険人物？1の称号が与えられているのだ。

「……まあ良い。一まず、様子を見に行く必要があるな。一真、祐輝、それを早く隠せ。イメージに傷がつく」

「ああ、悪い悪い。少なくとも、どこから流れてどこまで広がってるかの確認もしたいな」

「俺も新しい武器試すニヤー」

「僕もなんとかしないとね」

小学生が聞くぐらいだから、どこまで広がっているか。

悪評が続けば売り上げに響くともあって、不安を隠しきれない。

「という訳で、敵情視察も兼ねて昼飯でも食いに行くか。葉月ちゃん、一緒にご飯食べにいかない？」

「じゃあ葉月ちゃんと一真達には、僕が奢るよ。一真には助けられてるし、葉月ちゃんも再会祝いだね」

「わーい、ありがとございます」

明久もそう何度も一真達に世話になる事に引け目を感じる為、多少は我慢すると言う事を覚えていた。

だからと言っても、“塩と水”から“カップめんと水”に変わった

程度だが

「じゃあ、お言葉に甘えるか。召喚大会があるから、早めに昼を済ましたいし……秀吉も来るか？」

「うむつ、相伴にあずかるう」

「私もご一緒します」

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね？」

美波の口調は、普段と違って柔らかく優しい姉その物。

これでトータル9人、学園祭を歩き回るには少々不便な人数となった。

「それで葉月ちゃん、中華喫茶の話はどの辺で聞いた？」

「えつとですね……短いスカートをはいた、綺麗なお姉さんがいっぱい居るお店……」

それを聞いて、真つ先に反応したのは5人。

「何だつて！？ 一真、雄二、当麻、祐輝それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 我がFクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないと！」

「当たり前だニヤー絶対ムツツリーニ並みの写真を撮るニヤー」

「まかせて、僕が女子を集める」

「ああ。これもFクラスの為だ！ カメラは持つてるな、当麻、祐輝、腕章もあるか？ よしつ 未開の楽園へと、いざゆかん！」

「……「おおーっ！！」「……」

と、全力ダッシュで駆け出していく5人。

そして、取り残された面々は……

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄ちゃん達のバカ！」

「一真……姉上にフラれた故の錯乱と信じたいのじゃが、良いのかの？」

所変わって……

「明久、ここはやめよう（にゃー）」

「ここまで来て何を言ってるのさ！ 早く中に入るよ！」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ（にゃー）
！！」

Fクラスが宿敵Aクラスが経営する、メイド喫茶『ご主人さまとおよび』の前にて。

雄二は心底嫌そうに、一真はすごく複雑そうな顔で祐輝と当麻はちよっと思いつめた顔をして立っていた。

「というか、主人なのかメイドなのか、どっちなんだ？」

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんと、神竜の大好きな木下さんと、破神の大好きな水野さんと大神が大好きな十六夜さんが居るクラスだもんね」

「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？ 神竜君も、気持ちはわかりますけど……」

「……いや、大丈夫。いい加減未練は断ち切るべきだし、敵情視察何だから、な？」

「一真……」

その姿に、相棒の明久と当麻、祐輝、優子の弟にして一真の親友である秀吉は、いたたまれない気持ちとなった。

「……………！（パシャパシャパシャパシャ！）」

その空気を破ったのは、連続して聞こえるシャッター音。

「……………ムツツリーニ？」

「……………人違い」

「どっからどう見てもムツツリーニだろ！ 厨房責任者が何してやるー！？」

「……………敵情視察」

ローアングルの写真撮影では、とてもその説得力はない。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られてる女の子が可哀想だと……………」

「……………1枚100円」

「2ダース買おう」「俺もだ」「……………可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、神竜、破神、普通に注文してるわよ」

言ってる事は正論だったが、途中あっさりと注文した事で説得力はなくなっていた。

「……………そろそろ当番だから戻る」

「全く、ムツツリーニにも困ったもんだね」

ムツツリーニは明久に写真を渡し、教室の方へ去っていく。

それを見つつ、明久は呆れたようにそう言った後にポケットに写真をしまった。

「吉井君、その写真をどうするつもりなんですか？」
「やだな、もちろん処分するに決まってるじゃないか。それよりそろそろお店に入ろうよ？ もうすぐくおなが減っちゃったよ」
「それもそうだな。雄二ももう腹くくれよ」
「……………くそっ！」

雄二が吐き捨てるようにそう言い、観念したかのように同伴。

「あつ！ 写ってるの、男の足ばかりじゃないか畜生！」 「ラッキ
ー俺のは全部女子だ」 「なにっ」
「やっぱり見てるじゃないですか！」
「ご、ごめんなひゃい！ くひをひっぱらないで！」

明久は瑞希に頬を抓られ、葉月に腿をつねられての同伴となった。

「それじゃ入るわよ。お邪魔します」

美波が1番手となり、いざメイド喫茶へ。

「……………おかえりなさいませ、お嬢様」
「おっかつえつりなっさいませ、おっ嬢様！」

出迎えたのは知的な美人メイド事、霧島翔子。それに、十六夜明日
菜に水野朱里、武本恵、柴崎彩夏

「わあっ、きれい……………」

長い黒髪にエプロンが映え、黒のストッキングが美脚を際立たせて

いる。その横の恵は、鈴の音がまた綺麗で朱里は大人の感じを明日菜は、文学派を、彩夏は初々しさをかもし出しておりこれは女であるつと、見惚れる光景。

「ふむつ、流石はAクラスじやの。雰囲気も違うわい」

「はい、失礼します」

「お姉さん、きれ〜！」

続いて瑞希と葉月と秀吉が、中に入る。

「…………お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様」

「お帰りなさいませ」

「翔子、明日菜暗い！もうちょっと明るくしないと！」

「そつだよ！元気に行かないと」

と、模範的な礼儀で出迎えた。あとに、恵と彩夏からの駄目だし

「ほら、いつまでも仏頂面してんじゃねえ。俺だつて嫌なんだよ」

「ちつ…………」

「やあ、明日菜遊びに来たよ。」

「さすがは最高クラス、設備がいいね」

「んまあ、いいんじゃないかニヤー。」

今度は一真と、それに連れられ不機嫌そうな雄二さらには当麻と祐輝と明久。

「…………お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」「」

「おかえりなさいませ、今夜は寝かせません。明久」

「お帰りなさいませ楽しんでくださいダーリン？」

「……みんなAクラスに妻がいるのに俺だけ仲間外れにされた気分
ダゼったく」

と、雄二と祐輝と明久と当麻に対して、かなりアレンジが加えられ
た出迎えが贈られた。

「お帰りなさいませ。サービスとして、保健体育の特別実習を一
晩中行います」

「……特別実習終了後、全身の関節が粉々になるまでマッサージ
をさせていただきます」

と、これまたかなりのアレンジが加えられた出迎えがあった。

「本心でもないことを口に出すもんじゃないよ柴崎、工藤。優子と
山口を少し見習え、あれが俺に対する普通の対応の仕方だ」

一真を出迎えたのは翔子ではなく、工藤愛子と柴崎彩夏と木下優子
に山口怜奈の4名。

ちなみに前者を出迎えるはニコニコと笑顔の愛子と彩夏が行い、後者
は目が笑っていない笑顔の優子と怜奈が行った。一真は最初の二人
をかるく流しているが

「霧島さんに水野さん工藤さんに山口さん、柴崎さん、木下さん、
十六夜さんに武本さんも大胆です……！」

「ウチも見習わないとね……」

「あのお姉さんたち、夜の間ずっと遊ぶのかな？」

「姫路、優子と怜奈のは大胆じゃない。俺を殺そうとしている。あ
と工藤と柴崎はおふざけだ。島田、お前は誰をどう見習って明久を
どうする気だ？ 葉月ちゃんは、ずっとそのままできてね？ ……

という訳で、お邪魔しました！後は勝手にやれリア充共！！俺は一

人むなしく彷徨ってるさ！」

と、一真は即座に回れ右をして、駆け出そうとする。

雄二と当麻、明久、さらにはこの空気に耐えかねた祐輝もそれにあわせ逃げ出そうとするが、あっさりと雄二が翔子につかまってしまい苦し紛れに一真に抱きつき、その後の連鎖で巻き添えに。

「テメ、何しやがる!？」

「1人だけ逃げようだったってそうはいかねえぞ!？」

「離せゴリラ、俺にそっちの趣味はねえ!」

「一真も離せ!」

「だが!お前らも道ずれだ!」

一真がそう言った処で、漆黒のオーラが放たれた。

「雄二、浮気は許さない……」

「まつ待て翔子、いくらなんでもこんな事で……」

「ちよつ、スタンガンはやめて!俺まで……」

「霧島さん!それはその後ろの僕たちも食らうんだけど!」

「代表、一真(当麻)諸共にしっかりお仕置きしてやって!」

「翔子っち!明久が全然見てくれないからやっちゃって!」

「ぎゃああああああああああ」「」「」「」

と、優子達の死刑宣告により、雄二は一真達諸共に20万ボルトの餌食となった。

「では、お席にご案内いたします」

その他の面々は愛子の案内で席へと向かう事になった。

「………何で俺（僕）まで」「」「」
「お前が変な事言うからだろうが（にやー）！」「」
「テム、ゴリラ！ お前が変な事するからだろうが！」
「僕のは完全に4人に巻き込まれた！僕死刑宣告受けてない！」
「僕の死刑宣告の仕方がおかしいよ！………あ！恵！謝るから許して
！あと姫路さんに美波！攻撃態勢をとらないで！」
「落ち着けお前ら、俺が一番被害をこうむっている、姫路、島田、
明久には後話を聞け」
「分かつてるわよ（ます）」「」

それから間もなく、一真達がスタンガンのダメージを引きずりつつ、
席へ。

一触即発の空気なので、自動的に離れた席に座る事を促す明久達。

「他のお客様の迷惑になりますので、騒ぎは控えてくださいませ。
ご主人様」

と、優子に注意され、全員黙る事に

「あつ、悪いな………」
「なんだ？その歯切れの悪い返事は？一真く〜ん？」
「るっせえよ！」
「あははっ、学園1の危険人物って話だけど、随分と純情なんだね
？」
「んなわけあるかよ。そこの明久と恵にそれは言うべきだ！」

そこには、ムツツリー二に敗れた“保健体育の実戦派”事、工藤愛
子。

「あれ？ 確か保健体育実践派の………」

「愛子、遊んでないであっちをお願い」
「あっ、うん」

優子に注意され、愛子は別のテーブルへと向かって言った。
それと入れ違いで、翔子が見るからに高級そうなメニューを持ってやってくる。

「……では、メニューをどうぞ」

翔子が用意したメニューを受け取り、それぞれ注文品を決定。

「うちは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれが良いです」

「葉月もー!」

と、女性陣は女性らしいメニューに。

「僕はえーっと……じゃあ、その、オレンジ、ジュースで。後、トーストお願い、します」

「ワシもそれで」

明久はそもそも、喫茶店で注文などする機会などない。
なので、少々無難な物で行く事にし、秀吉も便乗。

「俺はフレンチトーストセット。飲み物はコーヒー、エスプレッソで」

「「一緒のもので」」

「んじゃ、俺は……」

「……ご注文を繰り返します」

雄二の注文を、翔子が遮るように声を上げる。

「……“ふわふわシフォンケーキ”を3つ、“トーストとオレンジジュース”を2つ、“フレンチトーストセット、お飲み物はエスプレッソ”を3つ、“メイドとの婚姻届”を1つ、以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞ！」

「はい、以上でお願いします」

「テメ、一真！！」

「にははははは」

「……では、食器をご用意いたします」

女子3人と一真達の所にはフォークが、明久と秀吉の前にはストロークが。

そして雄二の前には、実印と朱肉が用意された。

「しょ、翔子！ これ本当にうちの実印だぞ！ どうやって手に入れたんだ！？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながら、おまちください」

と、翔子は優雅なお辞儀をして、キッチンと思わしき方向へと歩いて行った。

「さて、そろそろ本題に入るか。葉月ちゃん、この辺りで聞いたんだよね？」

「うん。嫌な感じのお兄さん2人が、おっきな声でお話してたの」

「もしかして、あの2人？」

たまたま話を聞きつけた怜奈が、入口を指差した。

そこには、坊主とモヒカンの2人組が。

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな」

「そうだな。さっき言った2・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルは腐った箱だったし、虫もわいていたもんな！」

ワザとらしく、大声で悪評を叫び合う。

特にAクラスの場合人が多い為、これなら噂もドンドン広まっ
ていくだろう。

「待て、明久。一真も当麻も祐輝も、懐から手を離せ」

連中を殴りに行こうとした明久と、懐からナイフを取り出そうとし
た一真、撃とうとした祐輝に投げようとした当麻を止める雄二。

「雄二、どうして止めるのさ！？ あの連中を早く止めないと！」

「あいつらはこのナイフでのど笛を引き差かねえと（にやー）」

「落ち着け、こんなところで騒ぎを起こせば、悪評はさらに広まる
だけだ」

「あんた達一体何したの？ さっきからあの人たち何度もああして
るから、こっちも迷惑なんだけど」

訝しげに見る怜奈に、一真はさあというようにジェスチャーを。

「こっちが聞きたいよ。なあ山口、秀吉にメイド服を着せてやって
くれないか？」

「なっ！？ ちょっと、どついう意味よ!？」

「あのバカ共を黙らせる為だ。頼む」

「……わかった。優子の弟、こっち」

一真の剣幕に押され、怜奈は秀吉を伴いバツクへ。

「あの店、出している食い物もヤバいんじゃないか？」

「言えてるな。食中毒でも起こさなければ良いんだけどな！」

「2・Fには気を付けろってことだよな！」

今すぐ殴りかかりたい衝動を抑えつつ、秀吉の準備が終わるのを待つこと数分。

バツクからメイド服を纏った瓜二つの2人が現れ、一真達の傍に駆け寄る。

「秀吉、良いか？ あいつらにだな……」

「ふむふむ……わかったぞい」

と、ゆっくりと常夏コンビに歩み寄る秀吉。

「とにかく、汚い教室だったよな！」

「ま、教室のある旧校舎自体汚いし、当然だよな！」

タダの嫌がらせだろうと、明久達にとってはクラスメイトの命運がかかった喫茶店。

無論タダで済まずつもりもなく、雄二と明久はボキリと指を鳴らし、一真は懐からトンファーと生徒会の腕章を当麻はゴムナイフと風紀委員の腕章を祐輝はマシンガンエアガンと選挙管理委員会（運営委員）の腕章を取り出す。

「お客様」

秀吉が、さもこの喫茶店のウェイトレスの様に声をかける。

「何だ？ へえ。さっきのメイド……とはちょっと感じが違うな」「結構可愛いな」

舐めまわすように見られ、秀吉は気持ち悪さに顔をゆがめる。

「お客様、こちらへどうぞ」

「おっ、何かサービスでもしてくれるってか？」

と、モヒカンの方の手を取ると大きく息を吸い込んで……。

「きゃああああああああっ！」

「え！？ なっ、何でいきなりぐあっ！！！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「最低だね。雄二、とっちめてやろうよ！」

と、雄二と明久が2人を蹴飛ばした。

「た、助けてください！ この人たち、今私につかみかかって……」

「ちっ、違う！ 今明らかに俺達の方がぐヴあ！」

抗議しようとした夏川に、スタンガン（30万ボルト）が投擲された。

「ああ、明らかにお前から襲いかかっていたな！」

「とんだ最低野郎だな。こんな公衆の面前で、辱めるとはよ」

誰もが節穴だと思うだろう。そこに腕章をつけ終えた3人が到着

「はいどいて〜、風紀委員会と生徒会執行部と選挙管理委員（運営委員）の見回りです」

「な！風紀と生徒会に選挙管理だと！」

「Aクラスの皆さんと、お客さんの営業妨害とつるさいと言つ苦情チクリがきていますので迅速につかまるニヤー」

「後、その痴漢行為も対象に入るからね」

「だからこれ……」

「……三年生夏川、常村、営業妨害と痴漢の容疑で、風紀委員と生徒会執行部と運営委員の選挙管理執行部各委員長の名にかけてお前達を連行する！！！！」「」「」

と、手錠で二人を拘束しようとする

「よし明久、一真、当麻、祐輝こいつらを連れていくぞ！」

「うん、わかったよ」

「まず生徒会室ね？」

「いや、風紀の拷問室だろ（にやー）」「」

とりあえず、明久は先程スタンガンでダメージを追った坊主に歩み寄る。

「大丈夫？ 君」

「ええ……ありがとうございます」

と、秀吉の服から何かはずれ落ちた。

明久はそれを拾い上げると、持ってた瞬間接着剤を使用して、坊主の頭にくつつける。

「くっ！ 行くぞ、夏川！」

「こ、これ、外れねえじゃねえか！ 畜生、覚えてろ！」

モヒカンが逃げ出したにつれ、坊主の方も走り去って行った。頭にブラをつけたまま。

「逃がすか！ 追うぞ、明久、一真、当麻、祐輝！」
「了解！」

「ああ。絶対にあいつらの黒幕、吐かせてやる！」

「罪が重くなるね！」

「風紀で拷問だニヤー」

3人は2人を追いかけ、店を飛び出した。

「……お会計は、夏目漱石を4枚か坂本雄二の1名」

「大神祐輝の1名」

「破神当麻の1名……吉井明久の1名」です」

「並びに、神竜一真の1名ずつのどちらかとなります」

「ちよつ、ちよつと愛子、彩夏！」

「坂本雄二と大神祐輝と神竜一真と破神当麻と吉井明久の1名ずつ
でお願い」

そのあとの喫茶店では、女子3名と秀吉により一真と雄二と祐輝と当麻さらに明久が1人1000円で売り飛ばされていた。

第21話 お一人千円！？（後書き）

テストと言う魔物から追われているため、更新を一時中止したいと思いません

第22話 めんどくさいけどやらないと(前書き)

親の目をかいくぐりましたよ!

第22話 めんどくさいけどやらないと

「あいつら、4階に逃げたよ!？」

「面倒だな! 応援頼めるか一真?」

「俺は無理だ! 他の連中は多分部室にいる」

「僕は応援呼べるけど、このスピードだったらちよと無理かも」

「俺たちで捕まえたほうが早いニヤ」

そうこうしてる内に、2人は3 - Aの“迷路風お化け屋敷”に逃げ込んだ。

5人もすぐさま追いかけてようとする。

「いらっしやいませ、5名様ですね?」

「いや、7名だ。金は後ろの奴が払う」

と、何の躊躇いもなく後ろの連中に会計を押し付けた雄二。そこに一真が、

「すまない俺たちは実行委員なんだがここに他のクラスの営業妨害をしていた奴が逃げ込んで」

「それを追ってるんだけど」
「これで入れてくれニヤー」

つと、腕章を見せる。

「どうぞお入りください」

そして5人は中へ。

「暗がりだから気を付けるよ?」

「そうだな。あいつら、どんな罠を仕掛けてやがるか……」

「とつとと連行しないと」

「腕章つてここまで効き目あったんだね」

「あんなん嘘に決まってるんだろ、出た瞬間、無銭入場客だ」

「よく分かったな雄二、俺らも見回りでも中に入ったら金払わなきゃいけないって」

「会長だから許してくれるんじゃない?」

「普段働いてないからニヤー」

暗がりだから、周りが良く見えない。

だからこそ罠や奇襲がかけやすく、むしろ追う側にとって不利な状況。

「それにしてもあの常夏コンビ、一体どういつつもりで……」

と、そこで明久の前に何かが現れた。

男子の制服を纏い、坊主頭で、頭には……

「見つけたぞ、変態!」

「でかしたぞ明久、覚悟しろよ変態」

「今なら土下座して洗い浚い白状して今日明日タダ働きするなら、40万ボルトで許してやるぞ。変態」

「今なら逮捕されて風紀委員の拷問室に行くだけで許してあげるよ（にやー）変態」

「変態変態言っんじゃないやねえ！くそ、ここまで追ってくるなんて、しつこい奴らだぜ！」

変態坊主はすぐに奥へと走り出す。

祐輝はすぐさまエアガンを構え、撃ちだした。

「あいてて！常村、今だ！」

「ああ、壁を倒して閉じ込めるぞ！」

「まっまずい、脱出だ！」

5人は退散し、入口へ。

だが、いつまでたっても壁は倒れてこない。

「……あれ？壁、倒れてこないね？」

「ハッターか……やられた」

と、変態坊主の姿も見えなくなり、5人は諦める事に。

ふと、一真が時計を見る。

「あつ！そろそろ時間だぞ！？」

「まったく、あの連中の所為でおちおち集中出来やしないよ」

「ああ。まあ閉じ込められる心配もないだろうし、ゆっくりと……」

「あつ！さっきの無銭入場客と嘘つき！実行委員も金払わないといけないんじゃないか！」

当然だが、先程の受付が駆け寄ってきた。

「げっ、まずい！」

「走るぞ明久、一真、当麻、祐輝！」

「「ああもう！ 今日はこのなのばかりだ！」」

5人は受付に追われながら、教室へと戻って行った。

そして3回戦

「 “空間爆発” ！」

一真が切った空間を中心に、試合会場で爆発が巻き起こる。

「まだまだ！こんなんでやられるもんですか！」

「これで勝てると思わないで一真、祐輝」

爆風の中から薙刀とビームサーベルが飛び出してくる。それを二人は後方に下がって防御する

『 2 - Fクラス 神竜一真&大神祐輝 物理856点&648点』

VS

『 2 - Aクラス 水野朱里&十六夜明日菜 物理431点&592点』

2 - Aのコンビと当たるとあって、雄二はそれを考慮したうえで一真の準最強武器を選択していた。科目に関わらず強いのが祐輝であ

る。

「面倒なんだよ！俺の攻撃も祐輝の攻撃も分かるなんて反則もいいところだろ！」

「一真、落ち着かないと勝てないよこの二人」

「分かつてる。祐輝俺が隙を作る。その間にやれ。桜炎双闇流。桜奥義「桜花」」

変則的な動きで、一真が動く、そして朱里がフィールドの端に追い込まれた。ここで一真が、

「朱里終わりだ。桜炎双闇流。桜五式「桜吹雪」」

「させない、“絶対防御権”」

つと朱里の周りに膜が張られる。一真は待つてましたとばかりに左手をかざす

「残念だったな！明日菜！“イメージブレイカー”！」

パリンっという音が響き明日菜の結界が割れる。そこを祐輝が逃すわけがなく、

「スターダストスラッシャー」

朱里は八本のレーザーに貫かれた。それを見て放心している明日菜を一真は逃さない。

「桜炎双闇流。桜一式「枝垂桜」。“龍切り神殺し”」

「勝者！Fクラス神竜&大神ペア」

「「っしやー！」」

そして、二人は常夏コンビにめちやくちやにされた喫茶店の経営へと戻っていく。

ちなみに最低コンビの方は、相手が食中毒で不戦勝。嘘つき美女は怜奈と恵に勝つたらしい

「さて、失った客を取り戻すためにも、何かインパクトが欲しいところだな」

教室の中は空席だらけで、とてもうまく行くとは到底思えない光景。酷い悪評が広まっている以上、それを払拭する何かが必要だ。

「で、一応用意したのがコレだ。安直だが、効果は絶大な筈」

雄二は刺繍も見事な、水色と白のチャイナドレスを取り出した。

作：ムツツリーニ

「成程ね。これなら確かにインパクトはあるはず」

「ああ。これを……明久が着る」

「雄二。霧島呼ぶぞ?」

「準備完了ニヤー」

「後はこの送信ボタンを押すのみ」

雄二の浮気対策と称し、一真達は翔子のメアドを教えてもらった。た。

「冗談だ。頼むからそれだけはやめてくれ!」

「だったら真面目にやれ。」

つくづく、この学園はどこかこう変な奴ばかりだと、改めて認識し

た一真だった。

無論一真も、自分が非常識である事は自覚してはいる。

「たっだいまゝ。皆無事に勝ち残れて、よかったわね」

「3回戦、不戦勝だったそうですね？ 残念です、吉井君の試合見たかったのに」

「剣のお兄ちゃんたちも勝ったよね？ 剣のお兄ちゃんの試合、すごかったよ」

「危なかったにゃー」

「流石にあの二人じゃからのう」

そこへ、ちょうど女子3人と当麻たちが戻ってきた。

「ちょうど良かった。実は……って案が出たんだけど、頼めるか？」

「え！ それを着るの!？」

「さっ流石に、それは……」

2人は少々過激な格好になる事に、抵抗を見せた。

一真がちらりと明久を見て、ピンっと閃く。

「明久、チャイナドレスは好きだよな？」

「大好……愛してる」

「言いなおす意味がないぞ？」

吉井明久は、ウソがつけられない人間である。

「し、仕方ないわね。店の売り上げの為に、仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！ お店の為ですしね」

明久の進言で、言葉とは裏腹に我先にと服を手取る。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い……？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にも頂戴！」

葉月の真意は別の処にあったのだが、この際はと葉月は頷いた。その言葉を受けて、ムッツリーニはすごい勢いで裁縫を始める。

「ムッツリーニどこから出てきた」

「……俺の嗅覚をなめるな」

「これは本物だニヤー」

「ハア、すごいのかすごくないのかわかんないや」

「それじゃ、3回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてくれないか？ 宣伝の意味合いもあるから、できれば頼む」

「お願い！」

と言って、明久は頭を下げた。

「もしかして吉井君達、私の事情を知って……」

「仕方ないわね。クラスの設定の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

「あ、は、はいっ！ これ位、お安いご用です！」

と、美波と瑞希は賛同。

それから2人は、チャイナドレスを抱え教室を出て行った。

「……………できた」

「できた！？ まだ数分もたっていないだろ！？」

「……………朝飯前」

「今度メイド服頼めるかニヤ〜？」

「よし！朱里に送信！」

「ぎにゃー！一真！酷いにも程があるニヤー！」

「まあまあ、落ち着いて当麻」

そして秀吉と葉月がそれに着替え、宣伝に回る事に。

一真も厨房の持ち場へと戻ろうとした時、雄二に止められた。

「それと、一真達。お前らも宣伝に回れ」

「え？俺達も？」

「できれば厨房がいいんだけどニヤー」

「僕もあんまり目立ちたくないんだけど」

驚く一真達だが、雄二が顎である方向を指した。

「ねえ、あの人じゃない？ さつき太刀の召喚獣使ってた人、となりがナイフ使ってた人、あのイケメンな人が翼の人じゃない？」

「うん。ちよつと危険そうだけど、よくない？かつこいいし」

と、ちらほら居る女性客が一真達を見て、話題へと上げていた。それを見た祐輝がにこつとして黄色い悲鳴が上がる

一般の見る中で3・Aを堂々の実力で破ってきた以上、話題となるのは当然の話。

「とまあ、そう言う事だ。憎らしいが、これも喫茶店の為だ」

「まさか、俺みたいな危険人物？1がね……………」

「俺みたいな嘘つきが」

「僕みたいなイケメンが」

「祐輝！一回死んでみつか？」

「ごめんなさい！調子に乗りました」

「でも一真も当麻も祐輝もみんなかつこいいからね」

明久は基本、一真達に対しては素直に尊敬と仲間としての情を持っている。

なので、雄二や他のクラスメイトに対してのそれは、全くない。

「（それに、あの常夏コンビがこのままとはとても思えんしな。そんな中で秀吉とチビツ子だけをうるつかせる訳にもいかんだろ）」

「（……用心するに越した事はないってところか？ わかった）」

「（俺たちなら一瞬で連行できるしニヤァ）」

「（つま、何とかなるでしょ）」

幼い子供に暴行を加えたりなどはないだろうが、学園祭で営業妨害するような奴ら。

だからこそ、ある程度の護身は必要となる。

「じゃあ、頼むぞ」

「ああ」

「任せるニヤァ」

「まっかしといて」

そして時間は過ぎ、瑞希&美波ペアが戻ってくる時間帯。

「何とか持ち直したな」

「ああ」

一真と雄二は、活気を取り戻した教室を見回して悦に浸る。

「さて、ここから本番だ」

「まったく、どうして学園祭で妨害を気にせにやならんのやら？」

と、吐き捨てるように一真が言うと、ウェイターに精を出す。

一真達は“本性を知らければ”それなりの為、その辺りの評判も起因しているため女性客も多い。

「では、ゴマ団子2皿と本格ウーロン2つですね？ では少々お待ちくださいませ」

「本格ウーロン茶が4つですね？少々お待ちください」

「えっ写真ですか？僕でいいならいいですよ？お〜い一真、当麻写真だって！」

「ラジャー！今行きます」

慣れない接客に精を出しつつ、荒事担当の業務もしっかりとこなす一真達。

ふと、明久と秀吉の2人と話す竹原教頭を見つけた。

「……竹原、教頭？」

明久と秀吉との付き合いの中で、教頭と縁がある様な話はない。

特に秀吉はともかく、明久は開校以来初の観察処分者であり問題児であり、縁がない教師が話しかける人間じゃない。

「どうした、一真？」

「いや、ちょっと珍しい光景が……ん？」

ふと見ると、その光景を他校の者と思われるガラの悪そうな3人が見ている。

明久と秀吉が、美波から何やら指示を受けると、2人して教室の外へ。

それを見ていた3人が、それを追って出て行った。

「（……黒幕が見えて来たかも知れないな）」

「（何だと？）」

「（明久と秀吉が危ないかもしれないから、ちょっと出てくる。雄二は教頭から目を離さないでくれ）」

「（教頭！？……わかった）」

「……………明久と秀吉は？ 餡子も足りなくなった」「
「じゃあ、俺らが行ってくるよ」

一真達は明久達を追い、一路空き教室へ。
空き教室から声が聞こえ、そこで戸が閉められた。

「おい明久、秀吉。餡子も足りなくなったから俺も手伝うよ」

「俺も着たニヤー」

「僕もするね？」

と、あくまで普通を装い、中へ。
そこには、秀吉をかばう明久の姿と、先程明久達を見ていたチンピラ。

「あつ、一真、当麻、祐輝」

「コイツらどうする？」

「面倒だから、一緒にやっちまおうぜ！」

と、1人が一真めがけて襲いかかった。

「どうしてこう面倒ばかりあるのかね？」

「俺たちが何者かを知らないからニヤー」

「気分が悪くなってくるね」

チンピラが繰り出したパンチをかわし、すれ違いざまに蹴り上げる。そこで悶絶した不良をほつといて、明久と秀吉に殴りかかるチンピラは当麻と祐輝がぼこぼこに。

「あぐあっ!!」

「ぐうああっ!!」

それから1分後

「おっ、覚えてろっ!」

「テメエらの面、忘れねえから!」

「夜道に気を付けるよ!」

負け犬3匹が、よろよろと逃げ出して行った。

「大丈夫か?」

「あつ、うん。ねえ一真達、あの連中何だったかわかる?」

「さあな……さっきの営業妨害の続きかもしれない」

喫茶店の営業妨害、明久と秀吉を狙った襲撃。

両方で見える教頭の姿に、一真達は疑問を抱く。

「とにかく、急いで戻るぞ。ムツツリーニが待ってる」

「はいよ」

「承知した」

茶葉と餡子を抱え、喫茶店へと戻る3人。

その喫茶店には、既に教頭の姿はなかった。

「あっ、そつだ秀吉。お前これもつとけ」

一真は秀吉に、スタンガン（30万ボルト）を手渡した。

「一真よ、いくらなんでもこれは……」

「営業妨害と言ってお前らを狙った襲撃と言い、どうにも解せない事が多すぎる。用心に越した事はない。そろそろ俺も本格的に生徒会の仕事をしないとイケない。お前は自分で自分を守らないと」

「俺も、流石にこの状況はまずいと思つたからつろちよろしてる奴叩きのめすニヤァ」

「僕も、みんなを集めてみるよ。」

「気をつけてねみんな」

「つま、もうちょいしたらだけどな」

明久も流石に、立て続けに起こる騒動に不安を感じていた。

一真は周りを気にしつつ、接客へ戻る事に。

「よつ、お帰り（どうだった？）」

「力仕事はやっぱきついな（やっぱり明久と秀吉を狙った襲撃があった）」

「もつと鍛えるよ、（成程な……ちつ、面倒な事になりやがった）」

「うるせえゴリラ（雄二、後でお前の考えを教えるよ？ どうせもう何かつかんでるんだろ？）」

「誰がゴリラだ（ああ、最悪ババアも交えて話す事になるだろうかな）」

そして時間が過ぎ

「俺たち全員実行委員に戻るニヤー」

「ごめんねみんな」

「行って来い。早めに終わらせとけよ。」

そんなこんなで、特に問題もなく4回戦の時間。

「やれやれ……きつすぎるにも程があるぞ？さっきまで書類仕事してたつてのに」

「確かに……。」

本当は、明久・雄二ペアが瑞樹・美波ペアと当たる為、美波の鬼門科目である古典を選んでいた

しかも、それは一真も得意科目のため楽勝だと捉えていた

しかし……

「やほーっ、神竜君に大神君」

「ごめんね〜。勝たせてもらうから。一真君、大神君」

2 - Aの柴崎彩夏と、ムツツリー二に負けた工藤愛子。

『2 - Fクラス 神竜一真&大神祐輝 古典609点&411点』

VS

『2 - Aクラス 工藤愛子&柴崎彩夏 古典395点&705点』

「へえっ、結構成績良いね」

「これでも“元学年主席”なんで」

「……何でFクラスにいるの？」

「趣味で放棄したんだテスト」
「海外にいったんだ」

重ねて言うが、彼らはサッカーの試合と海外旅行で試験を放棄したのである。

「さて、行くこうか」

一真と祐輝の召喚獣が、それぞれ武器を構える。
そして愛子と彩夏の召喚獣も、同様にする。

「愛子、行くよ」
「わかってるよ」

一真は今回ガトリング砲のため小回りが利かない。
その為、点数で負けていても勝てる自信があった。

「おいおい、忘れてないか？　これがタッグ戦だったこと」
「またまた。大神君じゃあ僕達には、相性最悪でしょ？」
「愛子、来る！」

まず祐輝の召喚獣が、羽を広げながら突進！

「突進？　なんで……」
「任せて、“サイコキネシス”」

と、祐輝の召喚獣が停止する。

「あつ！　待って彩夏！」
「え？」

彩夏の召喚獣にナイフが刺さっていた。ナイフの刺さった方向には、一真の召喚獣の姿が

「成程ね。大神君の背後での動きに合わせての攻撃か」

「だけど、これは少しでも狙いを外せば味方を殺す様な物。危険なことするね〜?」

「一真は狙いを外す事はない。僕達の共通認識ね?」

「まあ、そう言う事だよ。行くぞ」

その後、攻撃は大半が一真の銃弾に弾かれ、祐輝のスターダストスラッシャーを続ける事で、

相手の点数は削れる。

ラストは一真の銃弾が2体の召喚獣を蜂の巣にし、勝負は決した。

「勝者、神竜・大神ペア」

ポロポロになりつつも、勝利を手にした2人は晴れやかな表情。

「やれやれ…疲れるもんだね」

「相手はAクラスだから、仕方ないだろ? まあ後でゴマ団子奢ってやるから、な?」

「お願いね?」

と、駆け足で去って行った。

それを見て愛子は一言。

「神竜一真君か……優子はいらなくなって言ってるし、貰っちゃおうかな? 怜奈がライバルだけど」

「そうは行かないよ愛子？私が勝つんだから」

「つむ！彩夏も？ちよつとライバルたくさんいるじゃん。負けないよ？」

「臨むところよ！」

二人の会話は誰にも聞こえなかった。

所変わって。

「ただいま」

「あつ、剣のお兄ちゃん！ お客さんがいっぱい来てくれたよ？」

葉月が2人の姿を見るなり、トトトツと駆け寄ってきた。

「へえつ、こりやすごいな。葉月ちゃん、お手伝いありがとう。バカなお兄ちゃんも喜ぶよ」

「ホント？ バカなお兄ちゃん、早く帰ってこないかな？」

「ありやりや、こりや俺らの負けかな？」

おどけたように肩をすくめると、祐輝と顔を見合わせて苦笑。

「ねえねえ、あの人たちじゃない？」

「あの2人、仲いいね」

「だってあんなコンビネーション披露する位だから」

先程の試合を見たらしい客も入ったらしく、それぞれが声を上げる。それを聞いて、祐輝が苦笑したのはお約束。

「にやはははは……」

「はは、ちょっと愛想よくして見るか」
「ただいま」

そこへ明久をはじめ、4回戦でぶつかつた4人が戻ってきた。
葉月が明久に駆け寄り抱きついて、頭を撫でて貰っている。

「お、あの子たちだ！」
「近くで見ると一層可愛いな！」
「手伝いの小さな子も可愛いし、レベルが高いな！」

それを見たお客が、更に声を上げる。

「で、どつちが勝つた？」
「雄二、かな？」
「そうね。坂本の1人勝ちね」
「ですね」
「??？」

瑞希と美波、明久と一真と祐輝は接客に。
雄二は一旦厨房に入る事に。

「いらつしゃいませー！ 中華喫茶ヨーロッパアンヘようこそー！」
そして祐輝と秀吉も戻り、大変な作業に追われることとなった、後から聞いたが二人は常夏を破つたらしい

「ちつ……まさか3組して、準決勝まで来るとは」
「俺達が負けるなんて」
「まあ落ち着け、所詮は二年坊主だ。ここであいつらを戦えなくすればいいだけの話だろ？」

第22話 めんどくさいけどやらないと(後書き)

投票をしてくれないと大変なことになってしまうのでよろしくおねがいします！

第23話 お持ち帰りはよしてくれ！（前書き）

文月新聞 号外

『今年の清涼祭も反響を見せている中、名物ともいえる召喚大会も盛り上がってまいりました。

準決勝は、AブロックとDブロック、BブロックとCブロックの勝者が戦う事になります

第一試合

神竜一真（2 - F）・大神祐輝（2 - F）ペア（Bブロック代表）

V S

破神当麻（2 - F）・木下秀吉（2 - F）ペア（Cブロック代表）

第二試合

吉井明久（2 - F）・坂本雄二（2 - F）ペア（Dブロック代表）

V S

霧島翔子（2 - A）・木下優子（2 - A）ペア（Aブロック代表）

驚いた事に、BブロックとDブロックさらにCブロックを勝ちあがってきたのは、2 - Fのペア。

ここで神竜・大神ペアが破神・木下ペアと吉井・坂本ペアが勝ち上がれば、明日の決勝はFクラス一色という事になる。3位もFとなれば大波乱となる

それを防いでAクラスの意地を見せるか？

この戦いの行方が、気になるところです！』

第23話 お持ち帰りはよしてくれ！

「さて、準決勝だ」

明久達にとっては、これを勝てば目的が達成される。

ただし、明久と雄二が負けたらダメ。

しかし準決勝となると、それ相応の学力戦士が生き残っている。

「僕たちの相手は、あの霧島さんと秀吉のお姉さんだよ？ きつそ
うだなあ……」

「俺達の相手は……っ！ お前らかよ!？」

「まあ、やるしかないでしょ」

「よろしくにやー。一真、祐輝」

「勝負なのじゃ」

準決勝は、一真・祐輝ペアは当麻・秀吉ペア。

そして明久・雄二ペアは翔子・優子ペアとの対戦。

雄二たちはが2年のAクラスであり、まさに正念場ともいえる戦い

「お互い、因縁の対決ってことか」

「ああ……って、そっちは違うだろ？ 雄二のいとしい霧島との将来を約束すれば楽勝だろうに」

「うるさい黙れ……！」

「……まあいいや」

準決勝の科目は保健体育。

一真もそれなりに点数はとれているため、そうあわてる事もなく試合会場へ。

ちなみに一真と祐輝のペアが先の為、これが終わったらある作戦を実行予定である。

「かつぞ、祐輝！」

「当たり前だよ」

そうして一真と祐輝がステージに上がる

「俺達だつて負けたくないニヤー！」

「全力で勝ちに行くのじゃ」

「負けるかよ」

「勝負だ！当麻、秀吉！」

「では、はじめてください」

「……サモン……」

そうして点数と召喚獣が現れる

『Fクラス 神竜一真&大神祐輝 保健体育 439点&421点』

V S

『Fクラス 破神当麻&木下秀吉 保健体育 432点&218点』

「やはりわしが下か」

「そんなもの関係ないニヤー！」

先手必勝とばかりに動き出す当麻、それに一真が応戦する今回の一真の武器は日本刀だ

「行くぞ一真！」

「は！桜炎双闇流。桜三式「満開」」

「つく、おりゃあああああああ」

「そんな簡単に一真に攻撃させると思っつか！」

一真の攻撃をよけ、ナイフで攻撃してくる当麻を祐輝が止める

「わしを忘れてもらっては困る！」

秀吉が3人めがけて振りかぶる

「そう簡単にやられるようにはなってる！」

「桜炎双闇流。炎三式「不知火」！」

「く、しもつた」

「秀吉！」

秀吉に一真の日本刀が当たる。すかさず祐輝が攻撃しようとするが、

「祐輝、余所見は禁物だぜい“バースト”」

「余所見などしてない！」

「祐輝！当麻を任せろ、俺は秀吉をやる」

「おう！」

祐輝VS当麻、一真VS秀吉の構図が出来あがる

「行くぞ秀吉！」

「勝負じゃ一真！」

それぞれが剣を構え、突進する

「桜炎双闇流炎。四式「紅蓮爆炎陣」！」

かの有名なモ ハンの鬼神切りが炸裂する

「何のこれしき！」

「甘いんだよ桜炎双闇流闇二式「暗閃」」

飛んで秀吉の後ろに行き、そのまま一閃そして腕輪が光る

「龍切り神殺し」

遅れてさまざまな刃が秀吉を切る

「終わったみたいだにゃー一真」

「ごめん。一真負けちゃった」

「ドンマイ祐輝、後は任せろ」

『Fクラス 神竜一真 保健体育 389点』

VS

『Fクラス 破神当麻 保健体育 312点』

「行くぞ当麻。桜炎双暗流。桜二式「夜桜」」

連続した斬劇が当麻に襲い掛かり、切り傷が出来る。

「人炎：「バースト！」…っち！」

一真が放つより早く、当麻がナイフを投げ攻撃してくる

「当麻：残念だったな。桜炎双闇流。奥義「絶滅」」

当麻のナイフが一真の武器によって叩き落されていく。

「桜炎双暗流。闇五式「闇転」！！」

死角からの攻撃に当麻は対応できない

「終わりだ“人炎爆発”」

当麻の召喚獣が爆発しグロテスクなものとなる

「勝者、神竜・大神ペア！」

一真が祐輝の腕をつかんで、高々と掲げた。

それに合わせて、観客から歓声が沸いた。

「よし、急いで戻るぞ。（優子を取り押さえに……な？）」

「うむっ（……何故そこらのチンピラより強い一真が怖気づくのじゃ？）」

「（優子相手じゃ無理ないだろ！）」

「（確かにこのう……）」

「じゃあ当麻、祐輝後頼む」

「逝って来るのじゃ」

「がんばって」

「とりあえず救急車は呼んでおくニヤー」

そして時間が過ぎて……

「……雄二、邪魔しないで」

「そうは行くか。俺はまだやりたい事がたくさんあるんだ！」

明久・雄二ペア VS 翔子・優子ペア

ペアチケット目当ての翔子は、その相手となる雄二を前にして悲しい顔をする。

「さあ、頼むぞ秀吉！」

雄二の作戦は、秀吉と優子のすり替え作戦。

準決勝を終えた一真と秀吉が、そのまま優子を拉致しての入れ替えである。

「……ふふっ」

「秀吉、もう木下さんの演技は良いから、早く僕らと……」

「秀吉？ 秀吉って、あそこの生ゴミどもの事？」

優子が指差したステージの一角。

そこには、ボロボロにされた揚句、手足も縛られた秀吉と一真の姿。

「ばっ、バカな!？」

「雄二の考えてる事くらい、私にはお見通し」

「アタシも、一真がやること位お見通しよ。まっ、匿名の情報提供

もあつただけだね」

優子の言葉に、明久は目を見開く。

明久はここにくるまで、作戦の概要を知らなかった。

それを知ると言うのは、常に自分達をマークしていなければ不可能だと言う事。

「くっ……すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……」

「優子め……容赦って言葉の意味知らねえのかよ？まさか、秀吉を盾にするとは」

「……………！！（パシャパシャパシャ）」

「撮影なんかしてないで、早く秀吉と一真の縄をほどいてあげてよ！（その秀吉の写真、後で売って欲しい）」

「明久、本音が混ざってるぞ？」

優子の降伏勧告があり、その間にムツツリー二は即座に2人の縄を解いた。

（雄二、僕に考えがあるから、指示通りの台詞を言ってほしい）

と言った後に、多少のやり取りをして明久は雄二の背に身を隠す。

（翔子、俺の話を聞いてくれ）

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

（お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ）

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

明久の指示通りに、雄二は棒読みにならない様気を付けてセリフを合わせる。

「……雄二の考え？」

(俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ！)

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。そして、胸を張ってお前と幸せになりたい……って、ちょっと待て！」

「……雄二」

雄二が明久の方を慌てて向こうとするが、明久が強引に頭を押さえつける。

一方、翔子は雄二の台詞に、うつとりとした表情を浮かべ始めた。

(だから、ここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう)

「だっ、誰がそんな事言うかボケェッ！！」

一真がスタンガン(40万ボルト)を取りだし、放り投げる。

明久はそれを受け取ると雄二の首に最大出力でおしつけた。

「くたばれ」

「くぺっ!?!」

「……雄二？」

続きの台詞を待ち望む翔子に、明久と一真は目配せ。

(おい、秀吉)

(うむ、了解じゃ)

一真の指示に従い、秀吉がゆっくりと深呼吸。

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛し

ている、翔子」

本人と区別がつかない声真似で、最後の台詞が紡がれた。指示していないセリフまで追加となっていたが、この際、誰も気にしなかった。

「……雄二、私も愛している」

「ま、待て……俺は、愛してなど……こぺっ!？」

明久が雄二の首をひねり、そのまま黙らせた。

「ふはははは！ これで最強の敵は封じ込めた！ 残るはキミだけだ、木下優子さん！」

「ひ、卑怯な……!」

「優子、卑怯も何もそれは今から敗北する奴が言う言葉だぜ？」

翔子は雄二の亡骸に抱きつき、戦意喪失。

だが雄二の方も力なく頂垂れており、とても戦える状態にない。

「おい明久、明日の決勝はよろしく頼む！」

「一真、バカにしないで！ アタシ1人でも吉井君に負けないはず！ 行くよ……サモン！」

「ふふつ。それはどうかな？ この勝負の科目が保健体育だった事を恨むんだね！」

明久がムツツリー二に目配せし、元々の秘策を実行。

「行くよ、サーモン（新巻鮭）！」

（……サモン（試獣召喚））

「えー!? それ、土屋君の……!」

これぞ秘策『代理召喚（バレない反則は高等技術）』である。

（……………加速）

「ほ、本当に卑怯……………きゃあっ！」

一撃で仕留め、勝負が決まった。

『2 - A 木下優子&霧島翔子 保健体育321点&UNKNOWN

』^N

VS

『2 - F 土屋康太&坂本雄二 保健体育521点&UNKNOWN

』^N

「よしっ！ 僕と雄二の勝ちだ！」

明久は高らかに勝鬨を上げておいた。

「……………ただ今の勝負ですが」

「霧島さん、僕らの勝ちで良いよね？」

物言いがつきそうなところを、明久が遮った。

「……………それは」

「翔子、愛してる（by秀吉）」

「……………私達の負け」

「……………わかりました。坂本・吉井ペアの勝利です！」

観客は冷めた目でそれを見ていた。

それもそのはず、召喚獣の勝負を見に来たのにこの終結では、しら

けてもしようがない。

増して、先程が接戦だっただけに、その差は激しい。

「それじゃ、僕等はこれで」

ブーイングが出る前に、明久はさっさとその場を後にした。

「明久よ、中々の機転であつたな」

「……作戦勝ち」

「ああ。見直したぜ。流石は俺のファミリーだ」

「一真や秀吉、ムツツリーニのサポートがあつたからだよ」

一真と秀吉は既に決勝進出を決めており、翔子たちは3位決定戦辞退、今、自分達も決まった。

これで2つの問題が一気に解決されたこともあり、明久はともうれしそつだった。

決勝戦は明日の午後1時から。

「やったね。これで僕たちの問題は解決したよ」

「いや、まだだ。明日は姫路のお父さんも来るって話だろ？ なら姦計やら策略やら抜きにして、それ相応の戦いつて物を見せてやらないとな？」

「小学時代最強と言われた力を見せてやる!!」

一真と祐輝の言葉に、明久は力強く頷いた。

「ああ！ どんとこい!!」

明久が拳を差し出したのを、一真と祐輝はそれにゴツッと合わせた。秀吉と当麻はそれを羨ましそうに見ていた。

「ところで、雄二はあのままにしておいていいのかな?」

「別にいいんじゃない?」

「そうそう。あいつもたまには素直になるべきだと思っし」

と、一真と明久は特に気にもしない。

「じゃが、霧島が雄二に一服盛って、持ち帰ろうとしておったので

……」

「霧島さん! 雄二にはまだ決勝があるから、クスリは勘弁して!

」!

「式には是非呼んでほしいけど、それはせめて決勝が終わってからにしてくれ!!」

「お願い霧島さん!! 年齢制限のない国に紹介するから!」

2人が引き返してみたのは、うつろな目をしながらタキシードに着替える雄二の姿だった。

第23話 お持ち帰りはよしてくれ！（後書き）

活動報告で自己紹介するか迷っております。どうかなたかお答えください。

投票のほうも待ってますんで。

事件？いえこれは虐殺のフラグDeath（前書き）

文月新聞 号外

『召喚大会準決勝が終了し、勝ち残ったのは神竜・大神ペアと吉井・坂本ペア
当初の予想を大きく裏切り、2年最下級クラスの2ペアが決勝へと名乗りを上げた。』

決勝戦 科目（総合科目）

神竜一真（2・F）・大神祐輝（2・F）ペア（通称文月学園最強コンビ）

V S

吉井明久（2・F）・坂本雄二（2・F）ペア（通称文月学園最低コンビ）

決勝は明日からだだが、この最低VS最強の対決は、今までどれだけ卑怯と言われようとも見事に這い上がってきた最低クラスの最低な人間で構成された最低コンビVS全て実力であり、完全に美しすぎるコンビネーションを見せてきた“元”学年主席と次席の二人で構成された最強コンビ

これは接戦となる事も予想されるが、一方的に終わる事も予想される。

勝負の様子、結果、その他全てが予想不可能ともあり、その事も話題を引き起こすこの戦い。

勝負は清涼祭2日目の午後1時、これは見逃す手はない！』

事件？いえこれは虐殺のフラグDeath

そこには、キレ顔のゴリラがいた。

「明久、一真、今日という今日はキサマヲを殺す！」

「あはは。やだなあ雄二、目が怖いよ？」

「なんだ、まだクスリが抜けてないのか？ 帰ったらお茶飲んで落ち着けよ」

あの後2人は腹を殴りクスリを吐かせた上で冷水につけて、電気ショック（20万ボルト）を施す。

それにより、雄二は正気を取り戻し今に至る。

ちなみに秀吉とムツツリー二は、喫茶店があるのでその間に帰って行った。

「だいたい、雄二の作戦が読まれていたのがいけないんじゃないか。相手はあの霧島さんなんだから、充分考えられた事態だと思うよ？」

「ぐつ、それを言われると反論できん……」

「お前、霧島が相手だと物事きちんと把握できねえよな？」

「そんな訳ないだろう！！」

噛みつくように一真に抗議する雄二。

それを見て、明久も一真もやはりというように頷く。

「それより、早い所戻ろう。心配事もあるし」

「そうだな。ところで、姫路や島田は教室にいるのか？」

「え？ まだ確認してないけど、いるんじゃないの？」

いきなりの話題に、明久は少々戸惑う。

「多分、そろそろ仕掛けて来る筈だと思うんだが……」

「ああっ、例の妨害か？」

「え！？ …… まつまさか、姫路さん達に！？」

「…………… 雄二」

教室の前まで行くと、ドアの前に立っていたムッツリーニが3人に駆け寄る

「ムッツリーニか。何かあったのか？」

「…………… ウェイトレスと、たまたま来ていた木下優子と工藤愛子、

山口怜奈、柴崎彩夏、武本恵、水野朱里、十六夜明日菜が連れて行かれた」

「なっ！？」

「ええっ！？ 姫路さんに恵達が！？」

「おい！ 祐輝！ 当麻！ お前達がいて何でこうなった！」

「ごめん、僕達は、材料の調達に行っていたんだ明日のために」

「そこを完全に狙ってきたニヤー」

「やはり俺や一真、明久、当麻、祐輝と直接やりあっても、勝ち目がないと考えたか。当然と言えば当然の判断だな」

雄二は勉強をサボっていた分体を鍛えまくっており、中学時代は“悪鬼羅刹”と異名を持っている

一真とて、武器を駆使すれば、そんじょそこらでは相手にもならない程強いと言うか“孤独の死神”の異名を持っており、その参謀の

当麻や右腕的存在である祐輝は、裏社会にもその名を轟かせている。

「ってそんな事より、姫路さん達は大丈夫なの！？ どこに連れて行かれたの！？ 相手はどんな連中！？」

「落ち着け明久、これは予想の範疇だ」

「え？ そうなの？」

「ああ。もう一度俺達に直接何か仕掛けてくるか、あるいはまた喫茶店にちよっかい出してくるか、そのどちらかで妨害仕事を仕掛けてくると予想できたからな」

“俺たちに”という言葉に、明久も一真も当麻も祐輝も疑問を持つ。だが、それよりも今回の事態を解決するのが先と、決定づけた。

「何だか、随分と物騒な予想をしてたんだね？」

「全くだ。誘拐なんて、流石に洒落じゃ済まないぞ？ 下手すれば警察沙汰だって言うのに」

「……………行先はわかる」

と言って、ムツツリーニが取りだしたのはラジオの様な機械。

「何それ？ ラジオみたいに見えるけど？」

「……………盗聴の受信機」

耳を疑ったが、まあここは気にしない事に。

そう4人は決定づけた。

「オーケー、あえて何でもってるかは聞かないよ」

「さて、場所が分かるなら簡単だ。かるくお姫様達を助け出すとしまししょうか、王子様方？」

と、雄二はニヤついた目つきで明久と一真と当麻と祐輝を見つめた。

「何だよその目つき？ 気持ち悪い」

「そのニヤついた目つきは気に入らないけど、今回は感謝しておくよ。姫路さん達に何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」

「……………それが向こうの目的だろうがな」

「多分そうだろうだニヤ」

「はあ最悪だよ。明日菜に何かあったら義父さんに怒られるどころの話じゃない。」

「ちよっと待つてる、今コレクション持ってくるから」

一真はロッカーに行き、自慢のコレクションを手に持つ。

そして、急いで明久達と合流。

「さて、作戦だが、ムツツリーニはタイミングを見て裏から助けてやってくれ」

「……………わかった」

「となると、俺達、特に明久と一真のやる事は1つだな」

「ああ。そつ言つ事だ」

明久がそれを聞いて、不思議そうな顔をする。

「それってどういう事？」

「王子様の役目は、昔から決まってるだろ？」

「え？ それって？」

「お姫様をさらった悪者を退治する事さ」

『さて、どうする？ 坂本と神竜と破神と大神……それに吉井だったか？ そいつら、この人質を盾にして呼びだすか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本と神竜と破神と大神は下手に手を出すとマズい。坂本は中学自体は、相当鳴らしていたらしいしな』

『それに神竜達つて、あの死神グループだろ？ 俺たちだけでそんな奴ら、どうやれつてんだよ？』

『ああ。出来れば、事を構えたくはないんだが……』

『気持ちは分かるが、そもいかないだろ？ 依頼はその10人を、動けなくする事なんだから』

ムツツリーニの持っていた受信機からの、音楽に混じって聞こえる会話。

それを聞いて、5人は顔を見合わせる。

(雄二に一真、当麻に祐輝この連中つて)

(黒幕に依頼されたその辺のチンピラじゃないのか?)

(しかし、俺達を狙ってつて……秀吉までどうして?)

ムツツリーニに案内された先は、文月学園から歩いて5分程のカラオケボックス。

そのパーティールームに、連れていかれたらしい。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタ達！ いい加減葉月を離しなさいよ!!』

『そんな小さな子を人質にするなんて、恥ずかしいと思わないの!』

『ふざけるんじゃないわよ』

泣きそうな葉月の声と、美波と優子と怜奈の怒鳴り声が次に響いて

きた。

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』

その声を聞いて、明久が今にも部屋に入りそうな勢いになる。

(待て明久、勝手に行動するな)

(まずは人質の救出が優先だ。ムツツリーニがうまくやってくれるから、それまで待てる)

(……わかつたよ)

『……灰皿をお取り換えいたします』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？ ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺は、コツチの巨乳チャンがいいなー！』

『こつちのねーちゃんだろ』

『いや俺は有名人とやってみたかつたんだ』

『あつ、ズリー！ それなら俺、2番目ね！』

明久のボルテージが上がる中、当麻と雄二は明久、祐輝は一真を抑えている。

一真とて、手に持っている木刀をギリツと握りつぶしかねない勢いで、握りしめていた。

『しかし、まさか似た顔が居るとは思わなかったな』

『ああ、木下秀吉だろ？ ビックリするほど瓜二つだわ。しかも2人してかわいいと来たもんだ』

『やつ！ 触らないでよ！』

『ちよつと、やめなさいよ！』

『あーもう、うっせエ女だな！』

ドン、という突き飛ばした音と、美波の悲鳴。
そのあと、まるで何かテーブルを巻き込んで倒れたような音。
そこで、一真は、女子を“本気で”守りたいと思ってしまった。

ガチャツッ！

「おじゃまします」

「ねえ、こいつらもう殺していい？」

「落ち着くニヤー祐輝、こんな奴ら殺すまでもない。生死を彷徨って貰うニヤー」

明久は自分の中の何かがトんだ様な顔をして、そのままドアを開け放ち部屋へ。

祐輝と当麻も先程ので怒りの頂点に達し、それに続く。

「よ、吉井君に、大神君に破神君？」

「アキ……それに、大神も破神も」

「祐輝、来てくれたの？」

「当麻」

「明久」

不良に腕を掴まれている瑞希と優子と彩夏に恵、そして倒れたテーブルの近くで尻もちをついている美波と怜奈生傷状態でソファでぐったりとしている愛子に朱里、一人に体を接触させられている明日菜。

その突然の出来事に、驚いている様子。

「はア？ お前ら誰よ？」

「それでは失礼して……死にくされやああっ！」

そこで一真が、なにやら怪しげな袋から取り出した錠剤を呑む。そこで一真の雰囲気が変わる。

「貸しイチ、だからな？」

「そんなことしなくても、俺が全員救うからいいんだよ、悪いが王子様役は取らせてもらうよ？僕が全部かっこつけてさせてもらうね？」

「ヒスったか、一真」

「ありや完全にヒスツたね」

その傍らで、向かって来た相手を壁に叩きつける雄二と一真。

そう言いながら、更に他の奴に拳をたたき込み、今度は膝を鳩尾にめり込ませる。一真は髪を書き上げかっこつけているこれが一真が本気で女子を守りたいと思い、媒薬を飲んで発情してなる“ヒステリアスモード”だ

「で、出たぞ！」

「坂本まで来ていたのか！」

「しかも神竜の様子が変だぞ！」

雄二と一真を見て、チンピラが浮足立つ。

「坂本に神竜よお、このお嬢ちゃんがどうなってもいいのなあ？」

向こうの1人が、葉月を羽交い絞めにしていた。

「良いか？ 大人しくしているよ？ さもないと、ヒデエ傷を……」

「……………」 「負うのはお前」だ

ビシッ！ ゴインッ！

「あがあっ！」

羽交い絞めにしていた男は、額を抑えると同時に白目をむいて倒れた。

隠し持っていたベアリングで額を狙った一真と、その相手の後ろにクリスタルの灰皿を振り切ったポーズで立っている、バイトのフリして先に侵入していたムッツリーニ。

「お、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「葉月っ！ よかった……怖かったよね……？」

「吉井君っ！」

「明久！」

解放された葉月を美波が抱きしめ、瑞樹と恵が腕を広げて駆け寄っていく。

「姫路さん！恵！」

「吉井い！ ヤスオをよくも！」

それに備え、明久が腕を広げて構えた所に来たのは、チンピラのパンチだった。

「うわーっ……」

「な、何だこいつ？ 血の涙流してるぞ……？」

鬼気迫る雰囲気、そのチンピラをしばき始める明久。

「姫路さん、恵、ちょっと待ってて！ こいつをしばき倒した後でもう一度……」

「女子は全員先に戻っている!」

「雄二! キサマまで僕の邪魔をするのか!?!」

「落ち着いて明久、この場合はどうしようもないことなんだよ?

優子達も早く逃げて?」

「「一真……わかった。けど後で事情説明はしてもらおうよ!?!」」

「「神竜君(一真君)後でよろしく!」」

一真は木刀で、特に優子と怜奈と愛子と彩夏に乱暴をしようとしたチンピラを重点的に痛めつけていた。

「くははははは! それにしても、ちょうど良いストレス発散の相手が出来たな! 生まれて来た事を後悔させてやるぜえッ!!!」

「あーあ、雄二の奴完璧キレてる。タイミングが悪かったね……

桜炎双暗流。炎奥義“獄炎”」

「確かに、霧島さんに追い詰められてるこのタイミングで、雄二とケンカするなんてね、一真もヒステリアスのままキレてるし」

「まあめんどくさいことになったニヤー」

「はあちよつとは自重してよ」

同情するような言葉だが、その中に情はこめられていない。

なぜなら言葉とは裏腹に、自分達も今痛めつけている相手に容赦の念を込めず殴りつけているからである。

誘拐騒ぎも一段落。

喫茶店の1日目が終了したFクラスにて、明久と雄二、一真、当麻と祐輝と秀吉。

そして……。

「で、いつまで待たせる気？」

優子と怜奈が貸し切り状態の教室でお茶を飲み、一真の奢りのゴマ団子を咀嚼していた。

巻き込まれた以上、事情を聞かないと帰らないと言ってきたかかないためである。

「まあ待て。もうそろそろ来る頃だ」

「？ 来るって、誰がじゃ？」

「ババアだ」

「ああぬらりひょんか」

「ああババアね」

「ババアニヤ」

「？ 学園長がわざわざここに来るの？」

「ちよつと待ちなさい、アンタ達なんて事を言つの！？」

「恐れ多いことを！！」

普通に考えて、その場にいないとは言え学園長をババアもしくは妖怪呼ばわりなど褒められた事ではない。

というより、普通にババア（ぬらりひょん）＝学園長で通じる事に、流石に優子も驚いた。

「そう言えばさつき、雄二が何か話してたな？ あれはその事が」

「話ねえ……ダメだよ雄二、一応相手は目上の人なんだから、用事があるならこつちから行かないと」

「吉井君、一応は余計よ？」

「もっともあんたらの態度が信じられないけど」

敬意もなくでもない態度に、優子と怜奈はツッコむ。

だが、誰一人気にする事もなく、話は続く。

「用事もくそも……この一連の妨害の原因は、あのババアにある筈だ。事情を説明させないと、気がすまん」

「ババアに原因が……えええっ!？」

「何じゃと!？」

「はい?」

「ああそうだニヤー」

「ちょっと待ちなさい。妨害って何のことよ? それに学園長がらみて、アンタ達一体何をしてるの!？」

「あ、あのババア! 僕等に何か隠してたのか!」

明久も怒りを隠せなかった。

その所為で恵達が危険な目に遭い、喫茶店の経営は苦勞の一途。仲間の命運がかかっている以上、文句を言わないと気が済まなくなつた

「……やれやれ、態々来てやったのに、随分と御挨拶だねえ、ガキ共が」

「あつ、がつ学園長!」

優子と秀吉と怜奈は立ち上がって礼をする。

「来たかババア」

「さて、どついう事が説明して貰うぞ? 妖怪さん?」

「めんどくさいが呼んでやっただけ感謝するニヤー」

「とつとつことを話せぬらりひょん」

「出たな、諸悪の根源め!」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい?」

「……ねえ秀吉、怜奈アタシがおかしい訳じゃないわよね?」

「奇遇じゃの、ワシもそう思っておった処じゃ、姉上」
「私もよ」

蚊帳の外の優子と秀吉と怜奈は、そのまま黙る事にした。

「確かに黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思っが？」

「ふむ……やれやれ、賢しい奴だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺達ちに頼む必要はない。もっと高得点を、例えばそこにいる木下優子や山口怜奈の様な高得点をたたき出せる優勝候補を使えば良いからな」

雄二の言葉を聞いて、学園長は周りを見回し優子の姿に気がついた。

「ん？ ああ、あんたが木下優子に山口怜奈かい？ 何でここにいるさね？」

「騒動に巻き込まれたんだよ。それで事情を聞かせるってうるさくてね」

学園長は成程ねと頷いた。

「話に戻るけど、そうだよな。優勝者と準優勝者と三位入賞者に、後から事情を話して譲って貰うとかの手段も取れた筈だし」

「なのに、俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる。一真、当麻、祐輝説明してやれ。構わないだろ？」

「……ああ、構わないさ」

雄二の言葉に、学園長は頷いた。

それを見て一真と当麻と祐輝は優子と怜奈に事情説明。

「成程ね、姫路さんの転校か……それで、教室の改修を条件に副賞の回収を？」

「まあ表向きはな？ 考えてみたら、教育方針の前にまず生徒の健康状態が重要な筈だ。教育者側、増して学園の長が反対するなんてありえなかった」

「という事は、ワシ等を召喚大会に出場させる為に、ワザと渋ったと言う事じゃな？」

「そう言う事だ。あの時俺がババアに1つの提案をしたのを、覚えているか？」

話が終わった処で、雄二が割り込んできた。

提案とは……

「科目を決めさせるってヤツかい？ 成程ね、あれでアタシを試したってわけかい？」

「ああ。めぼしい参加者全員に、同じような提案をしている可能性を考えてな。もしそうだとしたら、俺達6人だけが有利になるような話には乗ってこない」

「そうだよな。ましてや、科目によっては最強になる当麻もいるし、その気になれば教師とも戦える一真もいるから、僕たちにとっては破格過ぎる条件だ。なのに、ババアは提案を呑んだ」

つまり、この6人が決勝または3位に出なければ学園長が困ると言う事。

そして、学園長が困らなければならぬ連中が居る事につながる事も、その6人の周りに起きている。

「じゃあ学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、明久と秀吉を

狙ってチンピラが襲いかかったり、優子達に情報を流した密告者が居たのは、俺達が勝ち上がったては困る奴がいるってことか？」

「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れだしたのが決定的だった。ただの嫌がらせなら、ここまでではない」

「アタシも巻き込まれた事ね？ ……正直、どうなる事かわからなかったわ」

「あの時は普通に怖かったわ」

幼い少女も巻き込まれたと言う事もあり、流石に優子と怜奈も悪寒を感じた。

下手をすると警察沙汰であることゆえに、尚更に。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか……すまなかったね」

と言うと、突然学園長が明久達に頭を下げて来た。

その姿に、明久達も驚きを見せる。

「アンタ達の点数だったら、集中力を乱す程度で勝手につぶれるだろうと最初は考えていたのだろうけど……目論見が完全に潰されて焦ったんだろっね」

「さて、ここまでであった以上話して貰いますよ？ あんたが俺達を選んだ真の目的を」

「はあっ……アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね……」

だから、誰にも公言しないでほしい。

そんな前置きをする学園長。

「無能？　じゃあアンタの目的は、チケットじゃなくて腕輪か？」
「そうさね。アタシにとって、企業の目論見なんてどうでもいいのさ」

腕輪とは、優勝者と準優勝者と3位入賞者に贈られる2種類の腕輪。優勝者には、テストの点数を二分して2体の召喚獣を同時の呼びだせる腕輪。

そして教師なしで立会人になり、科目指定をした上での召喚用フィールドを形成できる腕輪。
その2種類の“白金の腕輪”

準優勝者には、召喚獣を使用者が見えている範囲でレポートできることと武器を戦闘中に変えることのできるタイプと、立会人が展開しているフィールドに別のフィールドを割り込むことのできるタイプの2つ。

そして三位入賞者には、自分の召喚獣の能力を10分間2倍にすることのできる能力と立会人になれる（教科指定不可）

「そうさ。その腕輪を、アンタ達6人に勝ちとって貰いたかったのさ」

「僕たちが勝ち取る？　回収してほしい訳じゃなくて？」

「あのな……回収が目的だったら、俺たちに依頼する必要ないだろ？　そもそも、回収なんてマネは極力避けたいだろうし、な？」

「ねえ雄二、どういう事？」

理解できなかったのか、明久が疑問を投げかける。

一真達は呆れるように、かみ砕いて説明。

「新技術は使って見せてナンボだってことだろ？　デモンストレー

シヨンもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われるだろうから、このババアにしてみれば避けたいってことだ」

「一真の説明の方がわかりやすいね」

「お前の頭が悪すぎるだけだ！ で、どうして俺達じゃないとだめなんだにやー？」

「……欠陥があつたからさ」

「ああ、それなら納得できる」

苦々しく顔をしからめる学園長。

技術屋にとつて、新技術の欠陥は耐え難い恥であり、それを生徒に明かすのだから無理もない。

「欠陥？ どんな欠陥です？」

「入出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすんだよ。だからアンタ達を使うなら、暴走は起らずに済む、で、白銀の腕輪だけAクラス並の点数じゃないといけなかったのさ」

「成程な、だから得点の高い優勝候補を使わず、俺達みたいな“優勝の可能性を持つ低得点者”と一真と祐輝のような奴がババアにとつては一番理想的だつたってことか」

「「じゃあ、アタシ達がもし決勝やら3位に出てたら……」」

知らないとは言え、自分達が暴走の引き金を引こうとしていた……その事に、優子と怜奈は顔を青ざめさせた。

「えーっと、つまり……？」

「つまり白金の腕輪も琥珀の腕輪のひとつのほうも、バカにしか使えないってことだ。そしてババアが選んだバカがお前たちで点数が高くないといけない奴が2人いるからそれが俺と祐輝」

「何だとババア……！」

「説明されないとわからない時点で、否定できないとおもうんだけ

ど」

祐輝のツッコミで、明久は苦々しい顔をした。

「とりあえず、3種類の召喚フィールド作成用の方はある程度まで耐えられるんだけどねえ……もう片方の同時召喚用は、現状だと平均点程度で暴走する可能性がある。だからそっちは出来れば吉井専用にと……」

「あかさ、これはほめられてると取っていいんだよね？」

「何を聞いてたんだよお前は？ 平均点程度で暴走する可能性があるって事は、それ以下のバカにしか使えないってことだろ？」

一真と祐輝は出来る科目ではすごいどころか教師より高い場合もある。それ故に、総合ではAクラス並。

「何だとババア！！」

「いい加減自分で気づけ！！ それより、そうになると黒幕の正体は大体絞れてくるな」

「そうだな。明久にもわかりやすく言つてやると、腕輪の暴走を阻止されたら困る奴ら。つまり文月学園に生徒を取られた他校の経営者が絡んでると見ていい。後これは個人的な直観だけど、教頭の竹原も関与してると思う」

その言葉に、全員の視線が一真に集まった。

「最初の営業妨害の時、真っ先に席を立ったのは教頭だ。それに明久と秀吉が襲われた時も、襲った奴らは明久と教頭が話をしているのを見て明久だと認識してた素振りがあった。偶然と思えないんだよ」

「やはりそうだったかい……近隣の私立校に出入りしてたなんて話を聞いたが、最早間違いないさね」

「つちふざけるのも対外にしてほしいニヤー」

「むかつく野郎だね」

「となると、ワシ等の邪魔をしてきた常夏コンビや、例のチンピラは……」

「教頭の差し金だろうな」

明久はふむふむ、と頷いてみてふと思う。

「あのさ……じゃあ僕たちは、文月学園の存続が掛かった問題に巻き込まれてたつて事？」

「そうなるな。試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われているシロモノだ。そんな状態で暴走なんて問題が起きたら、学校その物の存在意義も問われる」

「騙していた事はすまなかったね。だが、目的は既に達成はされているんだ。このまま何もなければ、全てはまるく収まるんだよ」

確かに表向きは、既に目的は達成された。

だが、このまま向こう側が黙っているとも思えない以上、用心に越した事はない。

「はあっ……まさかアンタ達が、こんな事に巻き込まれてたなんてね」

「ごめんね、木下さん。山口さんでも……」

「良いわよ。事情はよくわかったから……それに姫路さんと島田さんと恵の事、しっかり助け出したでしょ？ だから良いわよ、それは」

「破神君も朱里助けたしね」

と、優子は明久の肩をバンと叩いて、一真に駆け寄る。

「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もう帰ろう」
「そうだな。家に帰ってやる事もあるし……それに明日も早いしな」
「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

「6人とも、学園長としても個人としても、礼と謝罪をさせてもら
うよ」

「おう！」

そう言うと、学園長は出て行った。

「さて、俺達も帰るか。秀吉と優子と山口は、俺と当麻が送ってく」
「ああ。俺と明久と祐輝はともかく、秀吉と女子には荒事に対応する術はない。用心してくれ」
「あいよ」

と、2人が出て行った。

「それじゃ優子に秀吉、山口、俺らで悪いけどエスコートさせてもら
うぞぞ？」
「ええ、そうさせてもらおうわ」
「あんた達しかいないしね」
「うむっ、すまぬの。何から何まで」
「気にするなよニヤー」

事件?いえこれは虐殺のフリゲDeath(後書き)

投票のほうをなにとぞよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2259y/>

バカとマフィアと召喚獣

2011年12月11日11時51分発行